

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

315
53

315-53
1200701768921

國文學史

315-53

永井一孝講述

國文學史



早稻田大學出版部蔵版

大正
1. 9. 16
製本

國文學史目次

緒論

第一章	文學と文學史……………	一
第二章	國文學史に關する著書……………	六
第三章	文學時代の區分……………	三三
第一編	奈良時代以前の文學……………	二六
第一章	總論……………	二六
第二章	歌謠……………	二九
第三章	散文……………	三五
第四章	漢學……………	四二
第二編	奈良時代の文學……………	四五
第一章	總論……………	四五

早文
451

第二章 歌謠

第一節 歌界の概況

第二節 萬葉集

第三節 萬葉集中重要な歌人

第三章 散文

第一節 散文の概況

第二節 宣命

第三節 歴史

第四節 風土記及び氏文

第四章 漢學

第三編 平安時代の文學

第一章 總論

第二章 歌謠

第一節 歌界の概況

第二節 古今和歌集

第三節 古今集中重要な歌人

第四節 古今集以後歴代の勅撰歌集

第五節 古今集以後の重要な歌人

第三章 散文

第一節 散文界の概況

第二節 小説

第三節 歌序

第四節 日記及び紀行

第五節 隨筆

第六節 雜史

第四章 漢學

第四編 鎌倉時代の文學

第一章 總論

目次

次

三

二

四九

四九

五一

六一

八〇

八〇

八二

八八

九七

一〇一

一〇八

一〇八

一一三

一一三

一一九

一二六

一四一

一五一

一五七

一五七

一六一

一八三

一八六

一九四

一九八

二〇七

二一四

二一四

第二章	歌謠	二二七
第一節	歌界の概況	二二七
第二節	勅撰歌集	二二〇
第三節	當代の重要な歌人	二二六
第三章	散文	二四五
第一節	散文界の概況	二四五
第二節	小説	二四九
第三節	隨筆	二五二
第四節	軍記附雜史	二五八
第五節	日記及び紀行	二六九
第四章	漢學	二七四
第五編	室町時代の文學	二七七
第一章	總論	二七七
第二章	歌謠	二八一

第一節	歌界の概況	二八一
第二節上	和歌	二八三
第二節下	重要な歌人	二八九
第三節上	連歌	二九八
第三節下	重要な連歌師	三〇三
第四節	謠曲附狂言	三一六
第三章	散文	三二五
第一節	散文界の概況	三二五
第二節	隨筆	三二七
第三節	雜誌軍記及實錄	三三二
第四節	御伽草紙	三四五
第四章	漢學	三四八
第六編	江戸時代の文學	三五一
第一章	總論	三五一

第二章 歌謠

第一節 歌界の概況

第二節 和歌附狂歌

第三節 當期の重要なる歌人

第四節 俳諧附狂句

第五節 當期の重要なる俳人

第六節 淨瑠璃附脚本

第三章 散文

第一節 散文界の概況

第二節 和漢混和文

第三節 雅文附古書の解釋及び語法の研究

第四節 小説

第五節 俳文及び文

國文學史目次終

國文學史

永井一孝述

緒論

第一章 文學と文學史

文學の定義 文學の變遷發達する所以 文學史の定義

文學史と一般歴史 世界文學史と各國文學史

こゝに講述せんとする事は我が文學の歴史なり。そも文學とは如何なるものなるか。文學と文學史又は文學史と一般歴史との關係は如何。これ文學の歴史を攷究せんとするもの、豫め知らざるべからざる要件なり。

文學といふ語は往古より種々の義に解せられ或は學問の義なりとし或は文典若しくは文字學識などの意に解したるものもありき。按ふにこれ文學といふ語が時と處との異なるに従ひて其の形質を異にしたるがために一定の意義を有すること

能はざりしに依るめり。故にこゝに國文學史を講ずるに當り文學といふ語に一定不易の意義を有せしめん事は頗る難しと雖も予輩はしばらく

り。文學とは美的好尚に基き言語又は文字によりて人の感想を表現したるものなり。

といはんとす。されば詩歌小説の如き想像を主としたるは論なく多少考察の加はりたる史傳隨筆日記紀行の類若しくは教誨啓發の文なりとも苟くも美的好尚に基きたる著作なる以上は皆これを文學の中に攝入すべし。換言すれば科學又は技術の如き専門的事柄に關する類にはあらで人間が天地山川に對する動植物に對する社會に對する又は一個人に關する感想を表現したる著作にして美感の衝動に起因するものは即ち文學なりとす。

然るに人の感想は常に感觸する事柄が心裡に生ずる映象の如何によりて變化するものなれば常に人によりて異なるのみならず同じ人にては境遇の異なるに従ひてまた其の趣を異にするものなり。故に是等の感想を基とする文學も常に諸因縁の如何によりて特殊の現象を呈するは當然の理なり。即ち文學に及ぼすべき影響を大別して三個とす。

(一)

人種 人種とは或一國民が其の祖先より遺傳繼承せる特別の氣質を指せるものにて世に國體國風若しくは國粹といふも即ちこれなり。こは人間の發生以來幾千百年の間養成し來たりたるものなれば世を易ふとも消滅することなく地を移すとも失ふことなく其の血族のあらんかぎりは永久不滅の痕跡を人心の上にとゞめて一國民を結合する無形の繩索となり殊に一國の文學を他國の文學と區別する要素たらしむ。

(二)

境遇 然れども人間の生を受けて此の世に存在するや決して獨り在るものにあらず常に諸種の事情によりて圍繞せらるゝが故に生存の必要よりして四圍の境遇に適應せんことを務む。此に於いてか人の感想は天地山川氣候動植社會制度等およそ周邊の事情又は當代を貫通する精神氣風の支配を受けざるを得ず随つて文學も亦是等のために大なる影響を受く。

(三)

個人 以上の二勢力は常に人心を支配して止まずと雖も人によりて是等の勢力を感受すること一様ならざるがゆゑに其の反動力もまた表彰力も一様ならざるなり。即ち個人の性格異なるによりて其の文學上の現象に相異なる所あり。

是等の三大勢力は互に因縁して時と處とを問はず文學の上に莫大の影響を與ふ。而して是等の勢力の人心の上に活動するや其の一部を異にする時は其の文學をして多少相異なりたる状態を有せしむ。これ文學に變遷發達ある所以にして又各國の文學其の形質を異にする所以なり。此に於いてか文學史あり。

文學史は文學の起源變遷發達を秩序的に記載するものなり。

換言すれば文學史は制度文物等すべて社會の外部に現はれたる事物の變遷を叙述するに止まる客觀的歴史に對して主觀的歴史とも名づくべく一國民の心的現象の變遷發達を推究するものなり。蓋し一國民の心的現象のあらはれたるは獨り文學にかぎらず繪畫彫刻建築等美術に關するものは勿論宗教の如き其のもの尠からず。然れども文學は最も敏活靈妙に心的現象の全部を表明するものなれば其の國民の眞正の發達變遷を知らんと欲せば之に若くものなかるべし。故に此の點より云へば文學史は一般歴史殊に人文史の重要な一部として見るべきのみならず翻りては亦諸種の歴史を解明するものなり。

一般の歴史に世界史と各國史との別ある如く文學史にもまた世界文學史と各國文學史との別あり。世界文學史とは世界各國の文學を綜合して其の起源變遷發達

を叙述するものにて各國文學史は一國內にあらはれたる文學上の現象を稽查して其の變遷發達の因縁を蹤跡討尋するものなり。此に講述せんとする文學史は即ち後者に屬せり。

かゝれば予輩が此に國文學史を講述するにつきては我が國民の系統言語風俗習慣さては天地山川の状態風土氣候の變化制度文物の變遷各時代の精神各偉人の事業等苟くも人心に影響を與ふべき萬般の事情を稽查して其の文學上に及ぼせる關係を討尋せざるべからず。然れども客觀的歴史すらなほ未だ充分ならざる今日にありては何すれぞ一個人の微力を以て一時に這般の研究を成し得べき。故に予輩は最初より斯かる重大なる希望を抱かず唯我が文學上にあらはれたる心的現象の變遷及び發達の跡を討ねて秩序的に其の大要を叙述せんと欲するのみ。

第二章 國文學史に關する著書

過去に於ける國文學史研究の狀態 輓近の著書並に
其の概評

文學史といふもの西洋にては早くより世に出でたれど我が國にては十數年以前までは一部の著述すらも現はれざりき。藤原俊成の『古來風體抄』吉田令世の『和歌勅撰考』さては伴蒿蹊の『國つ文世々の跡』榊原芳野の『文藝類纂』の如きは多少文學史めくものなれど只其の一部分を叙べたるのみにて未だ真正に文學史と呼ばれるべきものにあらず。されば我が國に文學史といふものゝ世に公にせられたるは

三上參次 二氏の『日本文學史』 二冊
高津敏三郎

を以て嚆矢とすべし。此の書は二氏が大學にありける頃西洋に文學史あるを羨みて稿を起したる者の由我が國文學全體の起源及び發達を論じ主なる作者の略傳を載せ且つ例證として許多の作例を掲げたり。全編を通讀するに往々考證の錯誤と評論の枝葉に涉りて剩へ當を失へりと見ゆる所のなきにあらねど我が國文學史の研究に與へたる効果は決して其等の缺點のために沒了すべ

きにあらず。本書は明治二十三年十月金港堂の發行せるものなり。

爾來國文學史の世に出でたるもの十數種に及べり。

小中村義象 二氏の『中等日本文學史』 一冊
増田子信

本書は明治二十五年九月博文館の發行せるもの。全編を總論、學校、學術、文字、附假名、文章、歌の十章に分類し各類別々に其の變遷を叙述せり。されど本書は分類の上にては推測せらるゝ如く文學史といふものよりも寧ろ學術又は學問の變遷を叙べたる歴史なり。

鈴木弘恭の『新撰日本文學史略』 一冊

本書は明治二十五年十月青山清吉の發行せるもの。全編を十編に區別し紀元前、紀元後、奈良朝前、奈良朝、延喜天曆朝、寛文以後、鎌倉時代、足利時代、慶長以後の文學とせり。著者は文學を文章の學と見たるらしく、而して其の變遷を論述したる所少く主として作例を掲げ且つ其の解釋を詳述するなど餘程異様のものなり。

大和田建樹氏の『和文學史』 一冊

本書は明治二十五年十一月博文館の發行せるもの。著者嘗てコリア氏の『英文

學史』を見て本書を起草したるもの、由、全編を開題、上古、中古、近古、近世、今代の六編に分ち毎編また二三期に小別し我が國文學の沿革を叙べたり。文章、史論としては稍、嚴正を缺き枝葉に渉る多きのみならず、叙事の體また多少雜駁の傾向あるが如し。然れども本書に採るべき所も亦其の雜駁にして諸種の項を掲げたるにあり。

三上^三參^次 二氏の『教科^三 日本文學小史』 二冊
高津^三鐵^三 耶^三 二氏の『適用^三 日本文學小史』 二冊

本書は二氏が曩に著はしたる『日本文學史』を縮約したるものなるが『日本文學史』に見えたる錯誤を訂正したる所もあれば叙事評論簡單なれど寧ろ前者に優るべし。發行所は『日本文學史』と同じく金港堂にて明治二十六年三月の發行なり。新保磐次氏の『中學國文史』 一冊

本書は明治二十八年十二月同じく金港堂の發行せるもの。全編九十二枚より成れる小冊子にて尋常中學國文科の最後半期に充てんために編せるなり。文例は専ら氏の別著『中學國文讀本』に據り同書に掲げざるもの、外は本書に載せず。故に本書を見んとするものは同讀本を併用せざるべからず。別に取り出で、評すべき節なし。

中等學科教授法研究會の『日本文學小史』 一冊

本書は今泉定介氏の校閲に係り明治三十年三月同研究會の發行せるものなり。編述の體は専ら文學上の變遷に従いて上古、奈良、藤原、鎌倉、足利、徳川の六時代に畫し一時代毎にまづ其の文學の大勢を提示し而して後に細目に説き及ぼせり、總體簡明を主とせる中に幾分か重きを散文の上に置き歌は比較上之を略説せり。卷末に文學史年表あり。

佐々政一氏の『日本文學史要』 一冊

本書は明治三十一年十月内外出版協會の發行せるものなり。文部省の國語科教授細目に準據して國文學史の概要を叙べたり。全編僅かに十時間以内に教授すべきやうにとて作りたるものなれば或は簡略に失して前後の連絡充分ならざる所あるが如し。卷末の文體變遷の略表並に時代文學略表は至極重寶なるものなり。

アストン氏の『日本文學史』 一冊

本書は久しく我が國の英國公使館に勤務せる英國人なる氏の物せる英文の國文學史なり。全編を上古、奈良、平安、鎌倉、南北朝及び室町、江戸、東京の七時代に劃

したる時代の區分概ね先づ妥當なり。著者は此の書の外にも嘗て『日本書紀』の翻譯及び我が『俗語法』を著はしたることありて日本學者として西歐に名を得たる人なり。例證として擧げたる國文の英譯甚しく原文の意を誤れるもの少く又我が邦人の思ひよらざりし奇警なる觀察さへ少からず。若し本書の缺點を云は、江戸文學並に東京文學の觀察如何にもみすばらしきにあり。さばれ一外國人によりて著はされたる此の書は我があらゆる國文學史中にても一二を爭ふべき價值あるを覺ゆ。明治三十二年三月横濱のケリー商會發行。

大和田建樹氏の『日本大文學史』 五冊

若し一編の分量大なるを以て大の字を冠せしむべくば實に本書は我が文學史中の最大なるものなり。全編無慮一千六百頁。編を總論、上古、中古、近古、近世、今代の六編に分ち更に紀元前後、三韓交通以後、藤原奈良の朝、中古、源氏物語時代、鎌倉時代、足利時代、元祿以前、元祿以後、明治時代の十期に劃したり。かくて總論を九章に分ちて我が國の言語、言語と文章、普通文と美文、散文と韻文、文學の外界の現象、外國文學との關係、文學史を學ぶ必要、文學史と普通歴史との異同を論じたるを見て、其の詳密なるを知るべく又殆ど文學史に關せざる事柄を網羅せるにて其の冗贅の點多きをも察すべし。加之文例徒に多くして殆ど半に超ゆる紙數を充たすを見れば大文學史の所謂大なる所以奈邊に存するかをも知るべし。されども本書の第三卷に室町時代の文學を叙述したる項と第五卷の末に附したる文學年表とは他の諸書に見るべからざる所長なり。こは明治三十二年四月より翌年一月に亘りて博文館の發行したるものなり。

芳賀矢一氏の『國文學史十講』 一冊

本書は著者が明治三十一年八月帝國教育會の夏期講習會に於いてせられたる十回講義の筆記を修正して出版したるものなり。緒論、上古、中古、近古、近世、現代を十回に分ちて講述したるものなれば詳しかるべき筈なきは勿論なれども繁簡要を得且つ文學者の傳記著書の解題さては作例などを漫然記載せる『日本大文學史』などに似ずして文學の眞正なる歴史的發展の點に意を注ぎたれば國民の心的生活を知るには彼の書に勝ること萬々なり。蓋し本書は文學史專攻の著者が多年研鑽の結果に成れるもの他の諸國文學史に優るも當然ならんかし。明治三十二年十二月富山房發行。

内海弘藏氏の『中等教科 日本文學史』 一冊

本書は明治三十三年三月明治書院の發行せるもの。本書は文學その者の價値を詳論するよりも寧ろ文體の變遷並に中學の國文讀本に關係ある書又は文體につきて説明せんことをつとめ其の他につきては頗る省略せり。故に江戸時代の戯曲、小説等の文、謠ひ物、奈良時代の文學等につきては單に其の一二を擧げたるにすぎず、今日行はれつゝある何れの讀本にも收められたる『保元』『平治』『源平盛衰記』『平家』『太平記』『増鏡』『徒然草』『神皇正統記』『土佐日記』『大鏡』『榮花』『十六夜』及び江戸時代の和漢混和文『萬葉集』以後の歌等はすべて其の例を擧げずして單に其の説明に止めたり。全編六章より成る。時代の區別大方他の諸書と同じ。毎期の始に其の時代の文學及び時代の關係を説きたるは初學者にとりて能き參考たるべし。

鈴木忠孝氏の『日本文學史』 一冊

本書は明治三十三年五月興文社の發行せるもの。全編を二十回に分ち著名たる文學時代の區分文學者の傳記及び著作物等を教授すべき目的にて編纂したるなり。全編を二十回に分ちたるは一に文部省の教科細目に據りたるなれど單にそれに據りたるのみにて文學そのものゝ内容には毫も關せざりしが如し。

殊に『源氏物語』の事を只、一行の四分三位に記しながら三十六歌仙の名を記すに一頁半を費したるなど繁簡要を失へるに似たり。

笹川種郎氏の『中等日本文學史』 一冊

本書は明年三十四年五月東京の書肆文學社の發行せるものなり。教科書にして別に創見あるにあらず、漢文學の盛衰に注意したると近代文學に詳密なるとは其の特色なりとも言はゞいふべし。卷末に文學年表を附せり。

藤岡作太郎氏の『日本文學史教科書』 一冊

本書は太古より明治維新までを四大期に別ち各期をまた四條に細別し條々概ね年代の秩序を逐うて叙述したるものなり。全編百頁ばかりの一小冊子なれば其の記事の簡略なるは勿論なれど初學の人の一わたり知るべき要項は網羅したるが如し。これを從來世に出でたる國文學史の教科書に比すれば多少特色あるを覺ゆ。明治三十四年九月五日東京小石川の書肆開成館の發行に係るものなり。本書の外

同氏の『日本文學史教科書備考』 一冊

といふは『日本文學史教科書』を教授せんとする教師の參考として編纂せるもの

なり。故に本書には主として彼の書に見えたる事項を敷衍し若しくは考證説明せり。記事素より簡なれど明なり、初學の人は益する所多かるべし。こは明治三十五年一月同上の書肆開成館發行。

高野辰之氏の『國文學史教科書』 一冊

本書は從來の國文學史教科書が分量多きに過ぐとて編述したるもの。全編百二十頁。本文を言文一致にしたりといふ外別に特色を見ず。卷末に主要文學年表を添附せるがあり。明治三十五年一月東京神田上原書店發行。

鹽井正男 二氏の『新日本文學史』 一冊

本書は舊來の文學史と其の體裁を異にし文例を前に置き著書の解題著者の小傳を後にし参考書の主要なるものを擧げ各時代の首に總説を説きたり。然れども所載の記事時代の區分等多く從來の文學史教科書の範を出でざるが如し。明治三十五年二月東京の普及舎發行。

高津上 三 津下 三 二氏の『定日本文學小史』 一冊

本書は二氏の別著『日本文學小史』の煩を削り漏を補ひ約めて二百二十頁許りの一冊とせるもの體裁は彼の『小史』に同じ。明治三十五年二月金港堂發行。

杉敏介氏の『本邦文學史講義』 一冊

本書は上下二卷より成り上卷鎌倉時代までは稍詳細なれども下卷室町時代以下は極めて簡略なり。蓋し原稿の成るに隨つて掲載したる講義録の紙數と時間とに制限せられて中途より體裁を改めて略述したるものなるべし。卷頭まづ緒論ありて文學の定義を示し以下時代を追うて國文學の變遷を説くに殆どあらゆる作物と主要なる作者とを説明せり。惟恨むらくは全篇稍作物の解題めくものとなりて、單に時代順に各時代の作を配列して其の内容を叙述したるに過ぎざるを。遮莫我が文學の事實史としては上半は詳しきもの、一として參考すべきものなるべし。明治三十五年八月十日吉川弘文館發行。

岡井慎吾氏の『新日本文學史』 一冊

本書も亦中學校師範學校の教科書として編述したるもの、各時代の區劃など他に異なる點なしと雖も近世文學より溯りて上古文學に及ぼしたる所など所謂新體といふものなるべし。然れどもこれ元より教科書としての新體なるまでにて文學史として何等出色の文字あるにあらず。卷末に簡單なる年表あり。藤井乙男氏の校閲を経て明治三十五年十月十五日金港堂の發行せるもの也。

池邊義象氏の『日本文學史』 一冊

本書も亦中學校師範學校の教科書にて何等の特色はなけれども著名なる作者の肖像と各章の末に文學史に關する設問數條とを掲げたり。明治三十五年十二月十六日金港堂發行。

落合直文
内海弘藏二氏の『國文學史教科書』 一冊

鈴木暢幸氏の『國文學史教科書』 一冊

これはた中學校師範の教科書として格別目新らしき所あるにあらず。前者は明治三十六年二月二十日明治書院の發行にかゝり、後者は芳賀矢一氏の校閲にて明治三十六年十二月十三日富山房の發行に係るもの也。

鈴木暢幸氏の『日本文學史論』 一冊

本書は明治三十六年八月帝國教育會の夜間講義會に於いて一夜十四時間に講述したる講義の速記録に訂正を加へて發刊したるもの也。題目十四、叙述よりも寧ろ評論を主としたるものにて杉氏の『本邦文學史講義』と相反する趣あり、史論の名あるも蓋し偶然にあらず。文學論、文學史研究法、佛教概論、佛教略史、支那文學論などを交へて僅々十四時に亘れる講義筆記なれば著者自身のいへる如く、勿論文學の事實史としては缺くる所あるを免れずと雖も、從來出でたる文學史に比して多少の新研究あるをば認めざるべからず。随つて文學史を研究するもの、一参考書たる價值はあるべし。明治三十七年三月十三日富山房の發行に係る。

笹川種郎氏の『提日本文學史』 一冊

明治三十七年十月二十七日大日本圖書會社發行。これも中等教科書にて、上欄に參考書文學者の主要なる著作物及び關係書目を挙げたると、文學者の筆蹟その他の圖解等を挿入したるとが、稍他に異なるもの也。

境野正氏の『日本文學史』 一冊

明治三十七年十月二十九日弘文館吉川半七發行。これはた中等教科書にて、芳賀矢一氏の校閲したるもの、傳説數種を掲げたり。

藤岡作太郎氏の『國文學全史』平安朝篇 一冊

本書は著者が文科大学に於いて數年間に亘りて講じたる國文學史をもととして、これを簡明に叙し、更に一二節を加へて公にしたるものなりといふ。書籍の解題作家の傳記及び評論、何れも精細なる、これまでに比類なき著作なり。され

ど、その説くところは主として文壇の大勢力たりし作家と作物とに限り、神樂歌、催馬樂、和歌六帖の如きは、文運の大勢に關係少しとて之を省きたり。予輩は本書について多少の錯誤を認め、又多少の異見を有すと雖も、そはもと隴を得て蜀を望むもの、眞面目なる研究を経て成りたる唯一の著作として推奨するに躊躇せず。明治三十八年十月一日東京開成館發行。

林森太郎氏の『日本文學史』 一冊

明治三十八年十二月十九日、帝國百科全書の第百三十八編として博文館の發行せるもの也。全篇の結構何等の異色なしと雖も、能く簡にして要をつくしたるが如し。只恨むらくは、著者の勞力のあまりに著作業的ソクゲイカクにして、學者の態度に缺くるところあるを。もしそれ本書を披いて、『國文學史十講』と對照せんか、いかに多く類似の點あるかに驚かざるを得じ。否、本書は嘗に『國文學史十講』に似たるところの多きのみならず、その他二三の史籍と文章までも全く同じきところあるを見る也。さはれ、只ひとわたり國文學史を學ばんとするものにとりては、彼此を參照する勞なくして、却て便利よき書物なるべし。

佐々政一氏の『國文學史提要』 一冊

明治三十九年九月十五日金港堂發行。これも中學教科書也。

畠山健氏の『日本文學史綱』 一冊

明治三十九年十月二十五日參文舎發行。これ亦中學教科書也。前者の簡明なるに比べて、これは少しく雜駁にはあらじかと思はる。

藤岡作太郎氏の『國文學史講話』 一冊

かの『國文學全史』の史實に重きをおきて解題傳記などを詳しく述べたるに引きかへて、この書は史實の上に立ちて國民の特性を叙述せんとしたるものゝ如し。かれは事實史に近く、これは文明史風のもの也。文學史の研究としては更に一步を進めたりともいふべし。故に本書はひとわたり國文學の事實史に通じたる上ならでは會得しがたき事もあるべけれども、時代と文學との交渉を明かにし、國民の内の生活を叙したる國文學史としては、本書ほどに詳しくも他になければ、必ず見るべき也。明治四十一年三月十五日東京開成館發行。

以上は一部の體裁を具へたる國文學史として予輩の一見したるものなり。予輩の見聞せざるものも、なほ多かるべし。そも、世に國文學史の公にせられてより未だ十數年を出でざるに、既に二十有餘種の著書を見る、一瞥國文學史の研究は宛も

隆盛なるかの觀あり。然れども、上にも記載したるが如く、二十有餘種の文學史も、仔細に稽查し來れば、何れも大同小異にして、二三氏の作を除くの外、最初に出でたる三上氏等の著に幾何も抽んでたる所あるを見ず。但し、是等の中の多數は中學校師範學校及び高等女學校などの教科書として編纂したるものなれば、其の可否は教科書としての如何に存するものなるべし。故に、我が國文學史を研究せんとするものは、先づ三上氏等の『日本文學史』若しくは林氏の『日本文學史』に芳賀氏の『國文學史十講』鈴木氏の『日本文學史論』杉氏の『本邦文學史講義』藤岡氏の『國文學全史』及び『國文學史講話』等を參照し、且つアストン氏の『日本文學史』を參照せば、或は其の堂に昇ることを得べし。是等の外、講義録を一巻とせるものにて、予輩は

關根正直氏の『日本文學史』 一冊

萩野由之氏の『日本文學史大要』 一冊

とを見たることあり。關根氏のは明治二十六年の頃哲學館の講義録に載せられ、萩野氏のは明治二十七八年の交尋常師範學科講義録に載せられたるなりとぞ。此の中、關根氏のは全編八十八頁、而も鎌倉以下は一時期を一括して大概を叙べたるものなれども、萩野氏のは二百五十餘頁に涉り、日本人の作り成せる文學の國文なるはい

ふまでもなく、漢詩にても、漢文にても、日本文學として其の盛衰沿革を叙べたるものなれば、若し手に入るゝを得ば就いて見るべし。曩に本校の講義録に掲げたる武島又次郎氏の『日本文學史』も好箇の參考書たるべし。予が明治三十二年十二月和田萬吉氏と合著したるを松村九兵衛吉川半七の共同發行せる

『國文學小史』 一冊

並に明治三十三年九月同氏と共に此の『小史』を刪訂したるを、同じく右の二書肆の發行せる

『刪訂國文學小史』 一冊

は、主として中等教育を施せる學校の教科書として編述したるものなれど、初學のものには是れはた多少研究の一端たるを得べし。明治四十一年二月五日文會堂より發行せる芳賀矢一氏の『歷代國文選』の卷頭に掲げたる序論も、簡短にはあれど能く要を得たるもの、大體の變遷發達を知らんとするには、至極有益なる著述なり。

第三章 文學時代の區分

我が文學の起原 文學上の時代と政治上の時代 文學
上の時代の區別

我が國には、其の昔國未だ開けず天神なほ高天原に在りし時、すでに歌を詠せし者あり。爾來殆ど三千年時に盛衰あり物に興亡ありて、文學はた多少の波瀾なきにあらずといへども、未だ曾て絶無の世を見ず、神代より繼承せる國民の好尚は、自然の絢美に養はれて今日に至りぬ。今にして古往三千年の文學を追想すれば、洋々たる大河の流れに時水勢の緩急あるが如し。或は歌謳ひとり盛にして散文いまだ行はれざりし世もあり、或は散文も歌謠も共に行はれしものから散文の發達特に著かりし時もあり、思想にしても或時は厭世的傾向を帯び、或時は樂天的趨勢の見ゆるなど千差萬別なり。こゝに之を政治史上の時代に配するに、文學史上の時代は勿論かの時代とは異なる所ありといへども、大勢は略、政治の消長に伴ふに似たり。故に、予輩は政治史上の時代を中心として、文學上の時代を區分すること次の如し。

第一編 奈良時代以前 神代より始まりて崇峻天皇の御代を終ふる頃までをい

ふ。此の時代の文學として史籍に見えたるは和歌及び祝詞の類なり。我が國と三韓との交通開け、漢學及び佛教の傳來したるは此の時代の間なり。然れども、文學は未だ外國思想の影響を受けざるが故に、文質何れも素樸にして幼稚の域に在り。此の時代には國字といふもの未だなし。

第二編 奈良時代 推古天皇即位の頃より桓武天皇都を平安に遷し給ひし頃までをいふ。此の時代は盛に唐土の文物を模倣し、大に漢學を奨励せり。漢學佛教の影響漸く見え、和歌また盛なり。散文には宣命及び叙事の文あり。此の時代の末に片假字發明せられて、國字といふもの始めて現はる。

第三編 平安時代 桓武天皇平安遷都の頃より後鳥羽天皇の御代源頼朝覇府を鎌倉に開きし頃までをいふ。此の期の初に平假字の發明あり。名媛才女頻りに出いで、假字書の文章大に行はれ、世は當に散文極盛の時期なり。和歌にも見るべきもの少からず、勅撰歌集といふもの始まる。和歌も散文も貴族の手に成り、織麗優美なり。

第四編 鎌倉時代 源頼朝覇府を鎌倉に開きしころより後醍醐天皇の建武中興の頃までをいふ。此の時代の文學は大方隱士の手になり、佛敎の影響著く、和

歌散文共に多少の厭世的趣味を帯び、漢學の影響また少からずして、文體の變革著し。戰記文といふもの始めて出で、材料嶄新にして頗る通俗的傾向を有す。

第五編 室町時代

後醍醐天皇の建武中興の頃より後陽成天皇の御宇徳川家康大將軍となりし頃までをいふ。此の時代の文學も亦多く僧侶隱士の輩より出でしことゝて、佛教思想を含むこと前後比なし。當代の特産としては謠曲連歌御伽草子の類あり。是等は蓋し平民文學の萌芽をなすものなり。されば此の時代は戰亂多き世の中なれば、文學は衰へ、言語は亂れたり。

第六編 江戸時代

家康大將軍となりしころより今上皇帝都を東京に遷したまひし頃までをいふ。國學漢學共に古學の註釋をなすもの多く、儒教主義榮えたり。各種の文學一時に發生して、社會上また各種の階級擧つて文學を有せり。特に士民の手に成りしもの最も隆盛を極めしは國文學史上空前の事なり。淨瑠璃脚本の如きは此の時代に始めて出でたり。西洋學傳來せしかど文學の上には未だ影響を受けず。

第七編 東京時代

今上皇帝都を東京に遷したまひし頃より現時に至るまでを

いふ。西洋學の研究盛に行はれ、佛教思想漢學思想なほさままでに衰へず。印刷術大に進歩して、新聞雜誌の發行古書の翻刻さては新著の出づること夥し。而して西洋文學の影響著しくして、我が文學は殆ど從來の面目を改めたるかの觀あり。新體詩といふものは勿論、小説評論亦然り。今や國民文學勃興せんといひ、其の途に在るもの、如し。

以上政治上の革に準據して文學史上の時代を區劃したれども、文學の變遷は必ずしも斯く截然たるものにあらず。若し仔細に其の特質を稽查したらんには、或は此の時代より彼の時代に亘るもあるべく、或はなほ數期に分かるゝもありぬべし。今は只其の大體の變遷を見て之を定めたるのみ。

第一編 奈良時代以前の文學

第一章 總論

時代の範圍 社會の狀態 文字 言語 文學の概況

爰に奈良朝時代以前と稱するは神代より崇峻天皇の御代の頃までをいふ也。普通の歴史に奈良時代以前といふよりも範圍や、狭し。

抑、神代は邈たり、詳細の知りがたきは云ふに及ばず。人皇の世となりても、時なほ鴻荒に屬して諸般の制度未だ整はず、開化の中心たるべき皇都すら歷朝東西に移り南北に轉じて定まらず、夷族處々に割據して王化に霑はざる地甚だ多かりき。當時我が國民の大文學を有せざりしは勿論なり。况や、此の時代には文學を書きあらはすべき文字なく、只語部と稱する一部族がわづかに口授によりて舊事古説を相傳するに止まりしをや。世或は神代文字といふものありて社會の一部に行はれたりと傳ふるものあれども、該文字を以て記載せる文學一も今日に傳はれるものなきのみならず、其の存在すら疑はしきものあり。

(イ) 世に神代文字と唱ふるものには凡そ三種あり、一を日文といひ、一を天名地鎮といひ、一を秀眞といふ。古代文字の有無に關しては新井白石の「文字考」平田篤胤の「神字日文傳」

一伴信女の「假字本末」等を参照せよ。

我が國に弘通の文字ありしは應神天皇の御代に百濟の使者阿直岐及び博士王仁來朝して皇子菟道稚郎子に經書を授けたる時を始とす。これ今日漢字と唱ふるもの也。蓋し我が國と三韓との交通は早く神代に開け、殊に西陲の住民等は支那とさへ往來せしものありしかば、此の以前にも漢字を使用せし者あるべしと雖も、未だ公に流布するには至らざりしなり。阿直岐王仁等の子孫次第に繁衍し、文筆の業を以て朝廷に事ふるに及びて、漢字は漢學思想と共に愈、四方に傳播し、遂に漢字を借りて國語を寫すこととなりぬ。かくて、繼體天皇の御代に佛教の三韓を経て我が國に入るに及びて、漢學の講究も亦益、盛に、佛教と共に漸く人心を支配するに至れり。されども、此の時代の文學には未だ漢學及び佛教の思想のあらはれたるものなく、純然たる日本の思想を見るのみ。

言語も亦この時代は外國語の影響を受けず、純粹の日本語ともいふべきもの也。發音甚だ明晰にして、今日に見るごとき音便轉訛の交れるなく、拗音などはた無かりしが如し。

此の時代の文學として今日に傳はれるは只「古事記」と「日本書記」とに散見せる歌

謠及び『日本書記』『延喜式』等に載りたる祝詞壽詞の類あるのみ。是等の文學は孰れも彼の書どもの作らるゝに至りて始めて記載せられたるなり。思想概して單純、言詞はた素樸なるを免れずと雖も、さすがに諷詠すべきものなきにあらず。殊に素樸なる言詞も記誦に使せんがために枕辭を冠らせ、對句疊語を用ひたるなど面白きふしあり。國文學史を修めんとする者、其の源流の觴を濫すにすぎざるを見て輕視すべからず。

第二章 歌謠

起源 變遷 歌想 歌體 歌語

我が國の文學は、歌を以て其の緒を開きたり。須佐之男命が出雲の國籬、川上なる須賀の地をトして、其の妃櫛名田姫のために宮室を營みたまひける時、雲の立ち騰りたるを見たまひて詠みたまへる歌、即ち是れなり。
(口) 綱立つ出雲八重垣妻こみに
八重垣つくる其の八重垣を

其の後、大國主命、沼河姫、須勢理姫、下照姫等各、多少の詠あり。其の中に、須勢理姫の
八千矛の 神の命や あが大國ぬしこそは 男にいませば
うち見る 島のさきく 搔き見る 磯の崎おちす 若草の
妻もたせらめ あはもよ 女にしあれば 汝をおきて 男はなし
汝をおきて 夫はなし

といへる如き、當代に於ける婦人の情操を知るに足るものなり。されども、當時の歌は大抵、漠然たる想像と、單純なる情感とを反覆せる言詞の中に叙べたるまでにて、且つ其の情感も、範圍亦極めて狭く、大方男女相思の情をあらはすに過ぎず。

人皇の世となりては神武天皇の頃より早くも歌にあらはれたる感想の範圍稍廣まりて神代の歌と異なり國民的感情を歌へるもあり。神武天皇が登美長髓彦を討たんとして大和に入り孔舎衛坂の戦に皇兄五瀬命の流矢に中りて薨せるを想起し憤慨の情に堪へずして詠みたまへる歌に、

みづくし 久米の子等が 粟生には 臭葦ひともと

そねがもと そねめつなきて 撃ちてし止まむ

みづくし 久米の子等が 垣下に 植ゑしはじかみ

くちひやく われは忘れず 撃ちてし止まむ

といへる如き是れ神武天皇一個の感情を叙べたるものなれどやがては當時の國民が一般に懷抱したりし感情なりとも見るべし。蓋し此の頃は人々干戈に馴れて武勇を尙び敵愾の氣盛なりしなり。道臣命神武天皇の密旨を奉じて盛饗を忍坂に設け虜八十建を誘ひ猛卒をして之を刺さしめんとせし時に起ちて誘ひし歌に、

忍坂の おほむろ屋に 人さばに 來入り居り 人さばに

入り居りとも みづくし 久米の子等が 頭椎 石椎持ち

撃ちてし止まむ みづくし 久米の子等が 頭椎 石椎持ち

今うたば善し

といへるも不撓不屈の精神充溢して當時の好尚を表するを見る。神武天皇の皇后媛踏鞴五十鈴姫も亦歌を能くせしが其の詠雄壯の風を帯びて柔弱なる女性の趣なし。爾來世の降るにつれては歌をよむもの愈多く歴代の天皇皇后及び群臣等みな多少の歌を作らざるはなし。就中景行應神仁德允恭雄畧武烈等の諸帝菟道稚郎子磐之姫衣通姫影媛勾大兄皇子平群鋪等秀詠あり。其の外童謠俚歌の誦すべき者も少からず。崇神天皇の朝には微賤なる童女の歌を詠みて大彥命を諷せしことあり或は古事を引き出で、當時の御代を祝へるもあり。景行天皇の朝には連歌といへるもの出で來て、日常の用事を歌もて應答すること行はれたり。日本武尊東征の途次甲斐の國なる酒折の宮に憩ひたまひける折柄歌を以てにひばり筑波を過ぎて幾夜か寐つると問はせたまひけるにか、なへて夜には九夜日には十日をと火焼の翁の答へしぞ是れが始なる。應神天皇の御代には旋頭歌といふもの始めて見え。此の御代の頃より我國と三韓との交通漸く頻繁に向ひ人事益々複雑に赴きしかば歌の姿情も一段の進歩を加へてや、單純素樸の域を脱せり。菟道稚郎子が異母兄大山守皇子の叛けるを討ちたまはんとて兵を宇治の河上に伏せて。

千早人 宇治のわたりの 渡り瀬に 立てる梓弓 眞弓
 い伐らんと 心は思へど い取らんと 心は思へど 本へは
 君を思ひ出で 末へは 妹を思ひ出で いらなげく
 そこに思ひ出で かなしげく こゝに思ひ出で い伐らずぞ來る
 梓弓 眞弓

と詠みたまへる歌に、太子が大義と人情との衝突に心緒の亂れ給へるさまの明かに現じたるを見ても、其の一斑を窺ふに足るべし。武(一) 歌垣又歌かがひとも云ふ。
 烈天皇の頃には、歌垣といふものあり、男女打雜りて、(二) 事蹟は「日本書記」の「武烈紀」に見
 歌を唱和して戀愛の意を寄すること行はれき。武
 烈天皇が太子たりし時、歌垣の場に立ちて、平群鮪と影媛を争ひたまひしは世に名高
 き事蹟なり。推古天皇の頃より、漢學及び佛敎の影響著く人心を支配し、我が國の文
 運を誘導するや、歌謳の發達次第に著しく、奈良時代に入るに及びて絶代の繁榮を極
 むるに至れり。

さて、此の時代の歌はかくして多少の發展を爲せりと雖も、要するに折にふれ事に
 臨みて起れる實感を其のまゝに詠出せしに過ぎず。故に、天地又は人生を詠すとい

ふが如き事なく、規模甚だ小なり。露骨に云へば、詩想ならざる想を多少律呂ある言
 語もて表出せるものが、此の時代の歌なりし也。

句格は未だ一定せざるもの多く、三音四音五音六八九音を一句とせるものもあり
 しが、五音七音の句數個を聯ねて後に七音の句一個を添へたるもの次第に多くなれ
 り。蓋し、此の世には歌は専ら謠ふものなりしかば、句法の嚴正ならざりしも、適宜の
 曲節を以て、聲を長くも短くもしたりしに因るものならん。五音七音の句各、二個を
 繰り返して後に七音の句一個を添へたるを短歌といひ、五音七音の句數個を繰りか
 へして後に七音の句一個を添へたるを長歌といふ。この外五七七音の三句を繰り
 かへして通計六句より成れるものあり、これを旋頭歌といふ。又、旋頭歌を折半した
 る五七七音より成れるもの、これを片歌と名づけ、五七七音の一節づゝを唱和し、聯ね
 て一首旋頭歌の形式となせるもの、これを連歌といへり。これ孰れも後世より名づ
 けたる名稱なり。是等各種の歌の中にて最も多きは短歌なれども、長歌も少からず。
 『古事記』及び『日本書記』に載りたるもの、各種の歌を合して百八十二首、この中短歌殆
 ど半を占む。

歌語は當時の通用語の中にて雅なるを選び、同音を重ね、同語を繰返し、對句を設け、

枕辭を用ひなどして、諷詠に適せしめたり。前に掲げたる歌は、何れもこれを證して餘りあるべし。

第三章 散文

祝詞・壽詞 起源 其の内容 其の文體

此の時代の散文として、史に徴すべきに祝詞・壽詞の類あるのみ。神功皇后が攝政中に書を裁して魏及び晋に遣はし、履仲天皇の御代に史官を置きて四方の言事を志さしめし事など國史に見えなれども、其の文傳はらねば今は知るに由なし。

祝詞は宣説言ウタコトの義にて、壽詞は可言コトコトの義なり。祝詞は神前に告白する詞にて、壽詞は臣連の家々に傳はれる神代の古事舊説を朝廷に出で奏上する詞なり。祝詞・壽詞の現存せるものは、共に「延喜式」の中に錄せられて其の數およそ二十餘編あり。壽詞にては出雲の國造神賀詞最も佳く、祝詞にては新年祭・大祓・大殿祭など最も古くして其の詞うるはしく調はた高雅なり。

祝詞の起源は、天照大神の天の窟戸に籠りたまひし時、天兒屋根命が白しける太諄辭にあるべけれども、今は傳はらず。賀茂眞淵（ホ）の説に、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に作られ、大祓詞は天智又は天武の頃に作られた（ホ）眞淵の「祝詞考」を参照せよ。
りといひ、本居宣長は之を難じて、既に神武の御代に「大祓詞後釋」等を参照せよ。

ありきといへり。按ずるに、祝詞も壽詞も上代より其の形はありけるを、年を閱するに及びて或はおのづから時と處とに適はずして不用の文詞も出で來けんを改作もしつらんが、即ち今の文の如くなれるべし。故に、昔ながらの祝詞壽詞は其のまゝ傳らはざるべしと雖も、なほ能く其の真意を探らば、一は祭政一致の上代にありては、敬神の念、祭祀の制の篤く、嚴かなりしを知るべく、一は我が散文の發達し來れる由縁を知るべし。

試に出雲國造神賀詞一編を掲げて、其の内容の一斑を窺はん。

八十日日は在れども、今日の生日の足日に、出雲國造姓名恐み恐みも申したまはく、掛けまくも畏き明御神と、大八島國しろしめす天皇の大御世を手長の大御代と齋ふとして、出雲の國の青垣山内に、下津岩根に宮柱ふとしき立て、高天原に千木高知ります伊弉諾の日眞名子神王熊野の大神櫛御氣野命、國作りまし、大穴持命、二柱の神を始め、百八十六社にます皇神達を、某が弱肩に、太手綱取りかけて、伊都幣の緒結び、天の美賀秘冠りて、伊豆の眞屋に、龜草を伊豆の席と刈り敷きて、嚴瓮黒まし、天の甕和に齋みこもりて、靜宮に鎮め仕へ奉りて、朝日の豊榮登に、齋の神賀の吉詞奏したまはくと白す。

高天の神王高御魂神魂命の皇御孫の命に、天の下大八島國を事避り奉りし時に、出雲の臣等が遠祖天穗日命を國體見に遣はし、時に、天の八重雲を押し別けて天翔り國翔りて天の下を見めぐりて返事申したまはく、豊葦原の水穗國は晝は五月蠅なす皆沸き、夜は火瓮なす光る神在り、石根木立青水沫も事問ひて、荒ぶる國なり。然れども鎮め平けて、皇御孫の命に安國と平けく所知まさしめむと申して己れ命の兒天夷鳥命に布都怒志命を副へて天降し遣はして、荒ぶる神どもを撥ひ平げ、國作らるゝ大神をも媚びしづめて、大八島國の現事顯事事さらしめき。

乃ち大穴持命の申したまはく、皇御孫の命の靜りまさむ大倭の國と申して己れ命の和魂を八咫鏡に取託けて、倭の大物主櫛玉命と御名をたゝへて大三輪の神奈備にませ、己れ命の御子阿遲須伎高孫根命の御魂を葛木の鴨の神奈備にませ、事代主命の御魂を宇奈提にませ、賀夜奈流美命の御魂を飛鳥の神奈備にませ、皇御孫の近き守神を貢りおきて八百丹杵築宮に靜まりましき。こゝに親神魯伎神魯美命の宣りたまはく、汝天穗日命は天皇命の手長の大御世を堅石は常石に齋ひまつり伊賀志の御世に幸へまつれと仰せたまひし次のまに、供

齋仕へまつりて、朝日の豊榮登に、神の禮自利臣の禮自と、御壽の神寶献らくと奏す。

白玉の大御白髪まし、赤玉の御赤らびまし、青玉の瑞の江玉の行きあひに明御神と大八島國しろしめす、天皇命の手長の大御世を御横刀廣にうちかため、白御馬の前足の爪、後足の爪踏み立つることは、大宮の内外の御門の柱を上つ岩根に踏みかため、下つ岩根に踏み凝らし、振りたつる事は耳の彌高に天の下をしろしめさむ事の志太米、白鶴の生御調の玩物と倭文の大御心もたしに彼方の古川岸、此方の古川岸に生ひたてる若水沼間のいや若えに御若えまし、須々伎指遠止美の水のいやをちに御袁知まし麻蘇比の大御鏡の面を押しはるして見そなはずことのごとく、明御神の大八島國を天地日月と共に安らげく平らげく知ろしめさむことの志太米と、御壽の神寶をさゝげ持ちて、神の禮自利臣の禮自と、恐み恐みも天津次の神壽の吉詞白したまはくと奏す。

これ出雲の國造が、天地開闢の状態、曩祖の故事を陳べて、御代の繁榮を祝ひたるものなり。壽詞といふものは大抵此の體なり。祝詞も、其の旨とする所は罪穢を祓ひ、災禍を却け幸福を希求するにあれども、其の冒頭には亦おほむね建國の由來上代の

事跡を叙述せざるはなし。例へば、大祓の詞にも、

高天原に神づまります皇親神漏岐神漏美の命もちて、八萬の神たちを神集へにつどへたまひ、神議りはかりたまひて、我が皇御孫の命は豊葦原の水穂の國を安國と平けく知ろしめせと事よさしまつりき。かくよさしまつりし國中に、荒ぶる神どもをば神問はしに問はしたまひ、神拂ひに拂ひたまひて、語問ひし磐根木根立ち、草の垣葉をも語止めて、天の磐座はなち、天の八重雲を稜威の千別にちわきて天降しよさし奉りき。

といひ、また大殿祭の詞にも、

高天原に神づまります皇親神魯企神魯美の命もちて、皇御孫の尊を天津高御座にまさしめて、天つ璽の鏡劍をさゝげ持ちたまひて、壽ぎ宣りたまはく、皇我が宇都の御子、皇御孫の命此の天津高御座に、天津日嗣を萬千秋の長秋に、大八島豊葦原の瑞穂の國を安國と平けく知ろしめせと言寄さしまつりたまひて、天津御量りもちて事問ひし磐根木根立ち、草の可岐葉をも言止めて、天降りたまひし。

といへるなど、天孫降臨したまひて天壤無窮の皇基を定めたまひつる由來を語れり。されば、壽詞は勿論、祝詞も間接には祭祀に參與する群臣は更なり、遠隔遐陬の下民に

至るまで、亦漸次傳承して建國の基本を明かにする便宜となりたるなるべし。否、管に其の冒頭に云へる歴史的事實が國民をして建國の由來を知るの料たらしめしのみならず、其の篇中に述べたる事柄は、或は不淨汚穢を拂ひ、或は心術を正うして神明の加護を乞ふなどあれば、亦間接に民心をして正直公明ならしむる便ともなりたるべし。蓋し、上代の人は身の不淨汚穢を以て罪惡災禍を招く基とし、殊に神明の厭惡したまふことと思惟したりしなり。

祝詞、壽詞の文體は何れも謹嚴莊重にして、且つ想像の大なる、比喩の巧なる、殆ど歌謠にも優りたり。其の一斑は、前に掲げたる「出雲國造神賀詞」にても知らるべきが、更に大祓の詞に、罪の消えゆく狀を物して、

皇御孫の命の朝廷をはじめて、天の下四方の國には罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つことの如く、朝のみ霧夕のみ霧を朝風夕風の吹き拂ふことの如く、大津べに居る大船を舳ときはなち艦ときはなちて大海の原に押しはなつことの如く、彼方の繁木がもとを燒鎌の敏鎌もて打拂ふが如く、遣る罪はあらじと祓ひ清めたまふことを

といへるなど、想像如何にも大にして、比喩また巧ならずや。殊に、篇中許多の對句疊句又は冠辭の層々として相聯りたる、謹嚴莊重の中におのづから節調ありて、秀絶なる長歌を誦する心地す。これ萬事口傳相承の時代に其の端を發したる散文といは、當にかゝるべきか。之を當代の歌謠に比ぶるに、彼は歌謠といへども寧ろ散文に近く、此は散文といへども寧ろ歌謠に近きを見る。然れども、上代の人の習として、思念想像する所或は散漫無稽に過ぎて稍、妄想たらんとする嫌なきにもあらず。また、諸の祝詞、壽詞は言詞相同じきが多く、文體はた同工一律にして變化の妙に乏しきを免れず。

第四章 漢學

漢學の傳來 其の發達並に影響

漢學の我が國に渡りしは、紀元九百四十六年應神天皇の御宇十五年に、百濟の王族阿直岐といふもの來朝して、『易經』『論語』『山海經』等の書籍を貢獻したるを始とす。これ、我が國史の録する所にして、且つ學者の一般に承認する所なり。されども、是れより先神功皇后三韓を征討せさせたまひける時、かの國に於て府庫を封じ、圖書を持ち歸りたること、さてはまた其の後魏と晋とに使を遣はして書を賜ひしことありき。之を思へば、我が國にも早う其の頃にありて彼の學問に通じたるものもありけんこと疑ふべからず。されば、漢學の始めて我が國に渡來したるは、實は應神天皇の朝にはあらで、外交開けて程なき頃にあるべし。神代の太古にありて、既に須佐之男命は新羅に至り、鷓鴣草葺不合命の皇子稻飯命は彼の國の王となり、其の後、人の世となりては、邊疆の民或は密に交通往來し、或は公に歸化來住せしこと、彼此の史に見えたりば、學問も亦必ず是れと共に傳はりたらんと思はるれども、今知るに由なし。おもふに、上代は百事偏に簡樸を貴びたる事なれば、差當り之を講究すべき必要なくて自然の發達に放任したるものなるべし。

然るに、星霜を閱するにつれて、人智次第に加はり、事繁雜に赴きしが、更に三韓征服の舉ありしかば、我が國內外の事業も一層繁くなりゆき、また昔ながらの簡樸なる状態を持續すること能はずなりぬ。是に於いてか、應神天皇は其の頃百濟より來たれる阿直岐の經典に通せるを幸として、太子稚郎子をして之に師事せしめたまひ、後にまた使を百濟に遣はして、博士王仁を徵させたまへり。即ち、同天皇の十六年に王仁『論語』十卷、『千字文』一卷を携へて到り、辰孫王といふもの亦到りしに、共に文學を以て名ありしかば、太子また師として諸の典籍を學びたまひき。是れ、我が國に於いて漢籍を讀み、經義を講習せし始なり。太子頗る英才にして通曉する所あり、同天皇の廿八年高麗國王が獻せる表疏の文辭無禮なるを知りて詰責したまひたる事ありしが、又常に禮讓を守り孝悌を盡し友義を全うせられたるなど、大に彼の思想の感化を蒙りたるが如し。仁徳天皇が勤儉にして民の疾苦を恤みたまひしが如き、勿論聖徳の高きによるらめど、又漢學を學習したまひし効果の絶えて無かりしにあらじ。されども、此の時代にはかの學を修むるもの尙ほ極めて稀にして、其の効果の及ぶところ未だ普からざりしかば、特に掲ぐべき程の進歩も文學の上にはあらはれずして、文筆

の職業さへ永く歸化の民か、さらずば其の子孫の手にのみ委ねられたり。履仲天皇の四年に史官を諸國におかるゝに當りても、其の官に任せしは専ら高麗より歸化せし阿知使主の裔と、百濟より來たりし王仁の裔となりき。即ち、王仁の子孫文氏は河内に住み、阿知使主の後裔史氏は大和に居りて、世々文筆の業を掌り、或は史官となり、或は博士となりて、他の蕃別の史官を督し、東西の史部と稱せり。雄略天皇の世に大藏の出納を勘録せしめ、欽明天皇の朝に船の賦を録せしめしも、皆史部の人を用ひたり。これ、我が上代の風俗は上下共に世襲なりしにもよると雖も、一般の國民は尙ほ口傳相承の風を以て満足し、多少の不便を忍びても漢學を講習する事を敢へてせざりしによれり。されば、終に史官さへも其の職を曠うするものありて、敏達天皇の朝には高麗より表疏を上りたる事ありしに、諸史三日を経れども尙ほ之を讀み得るものなかりしを、王辰爾といふもの獨り能く解釋し奉りしかば、天皇深く賞讃し給ひきと傳へたり。史官にして既にかくの如し、其の職にあらざりしものゝ學力如何なりしかは、云ふまでもなかるべし。さる程に、此の時代の末頃佛教我が國に渡りて大に流行するに及び、佛典研究の必要は偶然にも漢學の進歩を促すに至れり。

第二編 奈良時代の文學

第一章 總論

時代の範圍 國文學の進歩 思想 言語 文字 印刷術

爰に奈良時代と稱するは政治上の所謂奈良時代を指すにあらず、其の範圍稍、廣くして、推古天皇の即位の頃より桓武天皇の平安奠都に至る、凡そ十七代二百年許りを總括す。蓋し、文學の發達は截然區劃すべからざれども、漢學の影響の見えそめたるは推古天皇の朝にして、所謂奈良時代の文學といふものも其の頃より之が萌芽を現じたればなり。

前期の平坦なる状態は此の時代に至りて大に革りぬ。漢學は頭を擡げて長足の進歩を爲し、佛教は一瀉千里の勢を爲して人心を驚破せり。或は佛寺の建立となり、或は留學生の派遣となり、或は唐風の模倣となれり。就中、漢學の進歩は殊に著く、學者彬々として輩出し、漢文學上の著作少からず、『日本書紀』または『海風藻』の如きは明かに此の間の消息を語るものなり。漢學と佛教とが人心に與へたる影響の大なるものありしは言ふに及はず。

かゝれば、此の時代に於ける國文學の發達は特に著きものありて、素樸なりし歌謠は文華燦然たる域に進み、簡單なりし思想は富瞻の境に入りぬ。これを前代に比すれば、梅花の蕾を破つて一時に爛漫たる趣あり。散文にしては歴史・宣命・風土記の類、歌謠にしては『萬葉集』あり。前者は未だ幼稚なるを免れずと雖も、散文の體用略具はりぬ。後者に至りては空前絶後の偉觀と稱せらるゝところ、世人或は此の期を指して文學上歌謠の時代なりとする者あり。歌聖として後人の追崇する柿本人麿も山部赤人も共に『萬葉集』中の歌人なりしなり。其の他、山上憶良・高橋蟲麿・額田女王・大伴旅人・同家持等、高手の歌人少からず、孰れも許多の秀詠あり。

此の時代の文學は上に述べたる如く漢學及び佛教思想の影響によりて發達を促されたるものなれば、其の内容には多少儒佛の思想の交れるものあり。されども、此の文學を貫通せるものは全く日本の思想なり。

言語は前記の末より漢學・佛教の流行につれて外國語の混交漸く多かりしかども、其の音韻稍變じて我が國固有の言語と能く融合せしこと、前期に於けるが如し。但し、漢學の講究はゆくりなくも文章の上に少からぬ影響を及ぼし、從來漢字を借りて國語を寫し、ものも次第に漢文を以て之に代ふる風となりぬ。故に、此の時代の初頃より、一方には我が國固有の言語と固有の言語に融合したる外國語とを以て物する歌文あり、他方には漢文ありて兩者對立せり。加之、此の末葉よりは漢文ならざる文章も多く漢語を交ふるによりて、漸く普通の言語と隔離せんとする傾向をあらはせり。

文字は漢字の音訓を借りて我が國語を寫したること、前代の如し。されども、彼我の語格全く相異なるを以て、我が國語を漢字にて書きあらはさんとするに往々適當なる文字の看出しがたかりけん、天武天皇の朝には境部連石積等に勅して特に我が國にのみ通用すべき「新字」四十四卷を撰定せしめたまひし事あり。新字は其の後大方亡せたりと雖も、今もある榊椿辻・峠等の類はおもふに其の遺存せるものなるべしといふ。其の後漢學の隆盛となるに隨ひて漢字の使用漸く巧妙に赴き、遂に萬葉書・宣命書・古事記の歌謠及び神話等の書法を見るに至れり。されども、只一音を表象するに多畫の文字を使用するは不便此の上なかりしかば、此の時代の末に及びて片假名といふものを見るに至りぬ。此のもの最初は多畫の漢字を記する煩勞を避けんがために、一時の便宜に用ひられ、其の字跡も其の數も定まざりしが、漸く發達して今日の五十音圖の知きものとなれり。該音圖の創始者は吉備眞備なりといはるれ

ど、定説にあらず。この時代には尙ほ孝謙天皇の頃に印刷術の傳來ありて大に文運開進の前途を開けり。されども片假名及び印刷術が實際の効果を收めて文學上に著き裨益を與へたるは次期に在り。

第二章 歌謠

第一節 歌界の概況

太古より千數百年の間自然の化育に委ねられたる歌謠も、時勢の進歩に伴ひて今や未曾有の發達を爲したり。是れ前章に記載したるが如く、漢學及び佛敎の東漸が太く人智の開發を促したるに依るなり。今まで見えざりし思想も次第に散見し、是まで定まらざりし形式も遂に略、定まりぬ。殊に、持統天皇の朝以來かの有名なる柿本人麿山部赤人等の續出せるに及びては、正に是れ和歌極盛の時期に到達せるものと謂ふべきなり。

この時代の歌謠も多くは事に觸れ物に應じて自然の感情を抒へたること大方前期の如くなれど、後には題詠めきたることも行はれたり。現存せる歌謠の中には往々拙劣なるものなきにあらずと雖も、概しては思想は精緻、想像は深刻、人間の性情を詠せるものさへほの見えたり。用語の雅馴なるは云ふまでもあらず。上は天皇より下は庶人に至るまで、歌を詠みたること前期におなじ。當代の歌謠を集めたるもの一部の書となりて、今に傳はるもの之を『萬葉集』といふ。これ我が國歌集の權輿

なり。予輩が當代の歌を知るは、只この一部の集在るに依る。されば、奈良時代の歌を評するは、やがて『萬葉集』を評するに等しく、『萬葉集』を論ずるはまた奈良時代の歌を論ずるに同じからん。故に、予輩はこゝに總叙の筆を止めて、直に『萬葉集』の評論を試みんとす。

第一節 『萬葉集』

撰者及び年代 歌の部類 歌體 歌語 萬葉假名
内容

『萬葉集』の撰者と撰定の時代とは一定せず、或は橘諸兄諸卿大臣と議りて撰定したりといひ、或は大伴家持の編輯せるものなりといへり。(イ) 契沖の『代匠記』賀茂真淵の『萬葉考』鹿持雅澄の『萬葉集古義』等をされど、此の集の體裁首尾の一貫せざるより、最近の説参照せよには孝謙天皇の御世に橘諸兄之を撰ばんとして中途に薨せしかば、後に家持其の業を紹きて完成したるものならんといふ。

此の集蒐録する所の歌は、上は仁徳天皇の御宇より下は淳仁天皇の天平寶字に至る、上下通じて凡そ四百餘年に亘れり。此の中、仁徳天皇の御宇より舒明天皇の御代に至る三百餘年間の歌は、録する所甚だ稀にして、最も多きは天武天皇以後およそ九十餘年間のものなり。歌の數は長歌二百六十二首、短歌四千一百七十三首、旋頭歌六十一首、すべて四千四百九十六首、分ちて二十卷とせり。前に掲げたる長歌、短歌、旋頭歌等の名目は、此の集より始めて見えたるなり。此の集また歌の想によりて部類を分ちて、雜歌、相聞挽歌、譬喻歌、四季雜歌、四季相聞の六種とせり。短歌は三十一音を以

て一首とすること『記』『紀』に於けると相同じく、長歌旋頭歌はた其體前期のに似たり。即ち後世ならば五音にいふべきを三音四音または六音にし、或は七音にすべきを六音又は八音などにせしもありて、其の句格一定せず。されども前期のに比ぶれば、五音七音の句世の降るにつれて漸く多く、時代の後れたるは大方それに定まりたり。舒明天皇の頃となりては、長歌には反歌といふもの、或は一首或は二三首必ず其の末尾に副はることとなりぬ。反歌また稀に反詠ともいへり。其の句格は普通の短歌の如くにて、其の目的は長歌の意の足らざるを補綴するか、或は其の全意を約言するかにあり。これ『記』『紀』の歌には見えざる所、漢學講習の結果より『文選』等に見えたる彼の賦の亂辭(一に反辭)といふもの、風を擬したるならんといふ。集中に或は歌を稱して詩といひ、詩歌と呼び、長歌を賦といひ、短歌を短詠とも呼び、短歌一首短歌二首とあるべきを一絶二絶とやうに書したるなど、また皆彼の風を擬したるならん。漢學及び佛教思想の影響に就きては、後の項に至りて更に之を論ずべし。

歌語はなほ前期に於けるが如く、當時に普通の言語なりき。されども、此の頃隋唐の交通いよく、繁く爲に吳漢の音は勿論、梵語さへ其のまゝ入りにしもの次第に多かりしかば、普通の言語も幾何か亂れけんを、中に就きて最も雅なる者を選びたるが如し。但し、外國の言語を、もまた能く固有の國語に調和して之を用ひたるが、あり。

孰れも冠辭を冠し、疊語對句を設けて、語調を整へ、風姿を修飾せり。

『歌』の書方は、すべて漢字を用ひたれども、おのづから一種獨特の風あり。即ち、『紀』『記』などは専ら字音のみよりて記載し、祝詞は助辭を細書して主屬の別を明かにせしかども、此の集にありては全く其等と異なりて、漢字の用法につきて一進歩を現はしたり。これを世に萬葉書と稱へ、其等の漢字を總稱して萬葉假名といふ。これを大別して、假字、借訓、正訓、義訓の四種とす。第一假字とは漢字の音訓を假りて國語を寫せるものをいふ、其の中に音假字、訓假字の二種あり。安己鳥延、憶可吉求、鷄居の如く、漢吳の音を假れるを音假字といひ、日本來異兒、猿石、渚脊苑の如く、字訓を用ひたるを訓假字といふ。假字の中にはまたおのづから正略の別あり。己鳥可求居の如きは正音假字にして、安延憶吉鷄の類は略音假字なり。又、日本來異兒の如きは正訓假字にして、猿石苑の類は略訓假字なり。訓假字には別に二字一訓なるあり、嗚呼馬聲、羊蹄の類なり。第二、借訓にも現身を、鬱瞻獵夫を、薩雄袋を、福路とする如く、字音を借りたるものと、葎を六倉、海苔を法とする如く、字訓を借れるものとの二種あり。第三に正訓とは月をツキとよみ、丈夫をマストラフと讀ませたる類にして、第四に義訓とは山上

復有山をイデ出十六をシ、(猪懸水をナミダ(涙)と讀ませたる類なり。此の外に、なほ、字畫を省けると文字を略せるとあり。起を己弦を立とのみ書けるは前者の類にして、山下出風とすべきを單に山下または下風と書き、左右手とすべきを左右とのみ書けるは後者の類なり。就中、其の用法の最も面白きは前に出せる馬聲又は山上復有山の如き戲書なり。此の事小なりと雖も、或はこれによりて當時漢字を用ひしことの巧妙なりしを察すべく、或は時好の一斑をもトするに足るべし。

此の集に載せたる歌はまた自然の情をありのまゝに叙ふるに止まりて、些の彫琢を用ひざりしが多し。故に、其の風姿概ね自然にして、風情はた雄渾なり。殊に長歌は此の集特殊の絶技にして、後世これに比すべきものなし。素樸なる言詞は自然の美に觸るゝが如く、天真なる思想はおのづから絶妙の調をなせり。但し、其の雄渾偉大なるは偶、外界に觸れて現れたる至情の聲なりしを以て、時としては拙劣なるものなきにあらず。これ、想ふに當時の歌人等は、歌謠の美文なるべきを知らずして、其の思想の選擇に意を注がざりしに依るめり。歌として拙劣なるものも、概しては至誠の真情籠りたれば、何となく趣深し。

そも萬葉歌人の通有せる感想は如何に。此の時代は漢學冲天の勢を以て、勃興し、佛敎はた堤を決したる如く、傳播し、人心の動搖甚しかりしかば、其の影響は延きて、多少歌謠の上にも見えき。例へば、漢學には大伴旅人が「酒を讀する歌」に、

酒の名をひじりとおほせし古のおほき聖のこのよろしさ

古のなゝの賢き人たちも欲りせしものは酒にしあるらし

とあるを始め、無何有の里、藐姑射の山、龍馬、仙藥等、漢土の故事典故によりて詠せるもの少からず。佛敎の影響も亦これに譲らず。大伴家持の

現身の世を常なしと知るものは秋風さむみしぬびつるかも

といへる又は某が「世間の無常を悲める歌」に、

天地の遠き始めよ 世の中は 常なきものと 語りつぎ

ながらへ來たれ 天のはら ぶりさけ見れば てる月も

みちかけしけり 足引の 山の木ぬれも 春されば 花咲き匂ひ

秋づけば 露霜おびて 風まじり 紅葉散りけり 現身も

かくのみならし くれなるの 色もうつろひ 烏羽玉の 黒髪かはり

朝のゑみ 夕かはらひ 吹く風の 見えぬが如く 行く水の

とまらぬ如く 常もなく 移ろふ見れば 流るゝ涙 止めかねつも

とあるは佛教思想より來たれる無常寂滅の想を歌へるものにあらずや。かゝる例なほいと多し。これによりて觀れば、當時は僧侶漢學者は勿論、常人に至るまで、一般に漢學若しくは佛教思想の影響を感受せることあるを察すべし。されども、全集を一貫して見らるゝ思想は、漢學の思想にもあらず、佛教の旨義にもあらず、日本民族が常の心とせる國民的性情なり。爰に國民的性情とは敬神の念、忠君の志さては、崇祖の情をいふ、約言すれば我が建國の基本とせる惟神の道、彝倫の教是れなり。孝謙天皇が遣唐使を餞したまひし歌に、

空みつ 倭の國は 水の上は 地往くごとく 船の上は

床に居る如く 大神の しづまる國ぞ 四つの船 ふねの舳ならべ

平らけく はや渡り來て 返りごとく まをさむ日に 相飲まむ酒ぞ

此の豊御酒は

といひ、又山上憶良が好去好來の歌に、

神代より 言ひつてけらく 空みつ やまとの國に 皇神の

いつくしきくに 言靈の さきはふくにと 語りつぎ

言ひつがひけり 今の世の 人もことごとく 目の前に

見たり知りたり 人さには 満ちてはあれど 高ひかる

日のみかど 神ながら 愛のさかりに 天の下 奏したまひし

家の子と えらびたまひて おほみこと 戴きもちて 唐の

遠きさかひに 遣はされ まかりいませ 海原の 邊にも澳にも

神集り うしはきいます もろくの 大御神たち 船の舳に

導きまをし 天地の 大御神たち やまとの 大國靈 久方の

あまのみ空ゆ あまかけり 見渡したまひ 事了り 還らむ日には

又更に 大御神たち 船の舳に 御手打かけて 墨繩を 延へたる如く

阿庭可遠志訓義未詳 血鹿の崎より 大伴の 三津の濱邊に

直はてに 御船は泊てむ 恙なく さきくいまして はや歸りませ

といへる如きは、共に神祇を頼みし好例なり。皇室に對する感想も、其の關係は神に對すると些の異なるところなし。かの大伴佐伯二氏の「海行かば水つく屍、山ゆかば

草むす屍、大君の邊にこそ死なめ徒には死なじ」といへるは古より人口に膾炙して何

人も知るところ、能く君臣の關係を説明するものなり。某の歌に、

高みくら 天の日嗣と 天の下 しらしめしける すめろぎの

神の命の 畏くも 始めたまひて たふとくも 定めたまへる
 みよし野の 此の大宮に 在りがよひ めしたまふらし 武士の
 八十伴の緒も おのが負へる おのが名負ひて 大王の
 まけのまに〜 此の河の 絶ゆることなく 此の山の
 いやつぎ〜に かくしこそ 仕へまつらめ いや遠ながに
 とあるも亦能く臣たるもの、義を盡せるものなり。これ、一には是等の人々の忠誠
 なるによれど、概して云は、我が國民の性情之を然らしめたるなり。天皇を神裔と
 する。例は「現つ御神」といひ、大君は神にしませばといひ、遠つ吾が大君とも、吾が大君神
 の命ともいへる語の集中に許多散見するにても知らる。天皇の行はせたまふこと
 をば神ながらといへる如きも亦其の類なり。されば、此の確信は萬事の上にあらは
 れ、自然を詠するにも大方此の心より觀察し、禽獸も草木も山河谿谷も皆大君の爲に
 發生せるものと思惟し、金銀米粟もしくは八百萬の神さへも多くは天皇の爲に存在
 せるものと觀じたりき。持統天皇吉野離宮に行幸の砌、人麿陪從して歌ひけらく、
 八隅し、わが大君 神ながら 神さびせすと 吉野川
 たぎつ河内に 高殿を 高知りまして 上りたち 國見をすれば

たゝなはる 青垣山の 山つみの 奉るみつぎと 春べは
 花かざしもち 秋たてば もみち葉かざし 夕川の ○○○神も
 大御食に つかへ奉ると 上つ瀬に 鶺鴒を立て 下つ瀬に
 小網さしわたし 山川も よりて仕ふる 神の御代かも
 山川もよりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも
 又、陸奥國より黄金を出せる時家持が之を賀せる歌に、
 すめろぎの御代さかえむと東なるみちのく山に黄金花咲く、
 と詠めるが如き、以て其の一斑を見るに足る。かく、神祇を敬し皇室を尊びたる心は、
 又祖考を崇敬する心となりて歌の上にあらはれたり。「人の子は祖の名絶たず」とも
 「むなことも祖の名絶つな」など詠せるところ散見せるにて、之を知るべし。
 要するに『萬葉集』の歌人は能く國民の精神を發揮せる者なり。神祇を敬し、皇室を
 尊び、祖考を追崇するは、凡て我が國民の精神として貴びし所なり。されども、能く之
 を發揮せしもの『萬葉集』の歌人に如くはなし。實に、此集の歌人は豊富なる想像と忠
 誠なる真情とを以て、其の聲に活氣を與へたり。さはれ、此の集の歌人ほどまた自然
 の美を喜び、人生の哀樂を心から歌へる者も前後に比なし。彼等の自然美を觀する

や多く讚歎し、彼等が人生の哀樂を目撃するや常に同情したりき。赤人が「不盡山を望める歌」憶良が「貧窮問答歌」の如きは衆口一致其の妙を稱す。

第三節 「萬葉集」中重要な歌人

柿本人麻呂以前の歌人 柿本人麻呂 山上憶良 山部
赤人 赤人前後の歌人 大伴家持

此の時代の歌の「萬葉集」に載れる中にて最も早きものは、聖德太子の詠なり。太子は推古天皇の御宇にましく、たれば、其の歌は當に當代の初つ方に屬すべきものたり。されども、その作極めて少く、且つかゝる略史にて評論すべき程の價值ありとも覺えず。然るに、舒明天皇の頃よりは漸く進歩の姿をあらはし、天智天皇の頃には後世に誇るべきほどのものを見るに至れり。額田女王の如きは特に其の卓越せるものなるべし。天武天皇の頃に及びては、天皇を始め歌を詠するもの次等に多かりき。其の中に、鏡女王、紀皇女、大津皇子等最も高名なり。天武天皇が嘗て吉野山行幸の砌歌ひたまへる

よき人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見よよき人よく見つ
といへる如きは、既に詞花を弄する迹さへあり。天武天皇の皇后が、同天皇の崩御を追悼したまへる歌など、實感を寫せるものから、猶ほ能く個人的性格を發露して、抽象的情操を離るゝに至り、歌體はた一定の句格を具へて、整然たるものあり。されば、

歌界はまさに諸般の準備を完了して、一大詞傑の出づるを持つに似たり。此の際蔚然として頭角を詞壇に抽んちたるものは、即ち當代を睥睨し、併せて後世の崇敬を博したる歌聖柿本人麻呂是れなり。

人麻呂の歌の『萬葉集』に載れるは長歌十七首短歌五十九首あり。其の歌には相思の情を寄せたる、哀悼の意を表せると、或は遊獵懷古旅行祝賀等の詠とあり。其の調雄渾にして至誠の情内に充滿せり。例へば、彼れが近江の荒都を過ぎて懷舊の情を歌へる。

(ロ)人麻呂は天智天皇の御代に大和にて生れたりといひ傳へたれど、確かならず。廿六七歳の頃より朝廷に出で、持統文武の兩帝に仕へ、新田部・高市の諸皇子に従ひて近畿諸國を歴遊し、後年筑紫に使し、又讃岐へも渡りしが、終に石見にて歿せり。生死年月未詳

玉だすき 畝火の山の 榎原の ひじりの御代ゆ あれまし、
神のことく、 つがの木の いやつぎく、に 天の下
知ろしめしけむ 空にみつ 大和をおきて あをによし
奈良山を越え いかさまに おもほしめせか あまさかる
ひなにはあれど いはゞしの 近江の國の さいなみの
大津の宮に あめの下 知ろしめしけむ 天皇の 神の命の

大宮は 此處と聞けども 大殿は こゝといへども 春草の
茂く生ひたる 霞立つ 春日の霧れる 百敷の 大宮どころ
見ればかなしも

さいなみのしがの辛崎さきくあれど大宮人の船まぢかねつ
さいなみのしがのおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも
といひて、先づ歴史的に叙べ來たる所、思想雄大莊高にして、而も感情に富み、悲哀に堪へざる如き概あり。かくて、人麻呂の歌には萬葉歌人の通有せる敬神忠君の念の著いあらはれたるが、大方は歴史的に叙べて如何にも皇室の貴むべく敬ふべきを想はしむるもの多し。愛情を抒べたるものにては、石見の國より愛妾に別れて都に下れる時の歌

石見の海 角の浦まを 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと
人こそ見らめ よしゑやし 浦はなけども よしゑやし
潟はなけども いさなとり 海邊をさして にぎ田津の
荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそよせめ
夕はふる 浪こそきよれ 浪のむた かよりかくより 玉藻なす

より寝し妹を 露霜の おきてし来れば この道の 八十隈毎に
萬たび 顧みすれど いや遠に 里はさかりぬ いや高に
山も越え來ぬ 夏草の 思ひしなへて しぬぶらん
妹が門見ん なびけ此の山

又は、嫡妻の逝りし時の哀悼歌に、

空蟬と 思ひし時に たづさへて わが二人見し はしり出の
堤に立てる 槻木の 此彼の枝の 春の葉の 茂きが如く
思へりし 妹にはあれど たのめりし 子等にはあれど 世の中を
そむきしえねば かぎろひの もゆるあら野に 白妙の
天ひれがくり 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす
かくれにしかば 吾妹子が 形見における みどり子の
戀ひ泣くごとに 取りあたふ 物しなれば 男じもの
わきばさみもち 吾妹子と 吾が二人ねし 枕つぐ 婦屋の内に
晝はも うらさびくらし 夜はも いきつきあかし なげども
せんすべしらに 戀ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の

羽易の山に

吾が戀ふる 妹はいますと

人のいへば

石根さくみて

なづみ來し よけくもぞなき

現身と 思ひし妹が

かぎろひの ほのかにだにも 見えぬ思へば

こぞ見てし秋の月夜はてらせれどあひ見し妹はいや年さかる
ふすまじを引く手の山に妹をおきて山路をゆけば生けりともなし
と詠みしが如き、孰れも句格の變化に富むのみならず、至誠の情躍如たるものあり。
其の他、吉備津采女の死後に詠める、又は讃岐の狹岑島に死人を見て其の妻子が悲哀
を想ひやりて歌へるなど、其の題材の然らしむる所もあるべしと雖も、亦此の例には
漏れず。蓋し、至誠の情は、人麻呂の歌をして、絶えず、生命あらしめたるものなり。
されども、人麻呂の歌にして單に之に止まらしめば未だ上乘のものとなすべから
ず。況や歌聖として推重することをや。人麻呂の歌聖として尊ばるゝは、至誠の情
に伴ふに豊富なる想像を以てし、措辭よく、緩急に應じて、圓滿に其の感想を發表し得
たるにあり。例へば、彼の感情の盛にして想像の豊富なりし事は、其の長歌の句數多
きにても想はるべく、措辭の妙を得たりし事は、格調の變化極めて自在なるにても知
らるべし。人麻呂の長歌は最も短きもにて、なほ二十五句、最も長きは百四十九句に

及べるもあり。其の最も長きは高市皇子の薨去を哀悼せる歌にて、『萬葉集』中第一の長篇なり。

彼れの歌はすべて序詞を用ゐ、冠辭を冠らせ、疊句對句を用ゐたるところ甚だ多く、縁語はた少からず。されども、其等は各々聲調をして變化多からしめ、何も不用に屬するものなし。かの人口に膾炙せるなかくし夜の歌の如き、上の句は全く序詞と冠辭とにすぎざれど、如何にも長夜たるを思はしむるの用をなすが如し。これ彼れが非凡なる才藻を有せりし故にて、尋常の歌人と異なるところなり。要するに、巧妙なる詩想の時としては、雄渾壯大時としては、優婉細緻よく意に應じて變りゆくさま、誠に自然にして斧鑿を経ざるに似たり。

人麻呂の歌は概して現實界に限れり。彼れの悦ぶは現實の境界に於いて喜べるにて、彼れの悲しむも亦現實の境界に於いて悲めるなり。故に彼れの歌には決して過現未の境に徹する如き幽玄深邃なる哲理的感想は絶えて見ることなし。其の想は高潔なり眞摯なりといへども、いはゞ普通の人情の妙所を歌ひたるにすぎず。之につけても、彼れが世の人に賞揚せらるゝものは、上に述べたる如く、至誠の情、豊富ななる感想、共に非凡にして、殊に聲調の妙趣企及すべからざるものあるに依ることを知るべし。

人麻呂が玲瓏たる光彩を以て當代の詞壇を飾れると同時に若しくは稍後に、又一種の異彩を添へたるものあり。一は山上憶良にして、他は山部赤人は是れなり。

憶良は頗る漢學に通じ、かねてまた佛教をも信じたりき。其の残れる詩文に就いて推測するに、彼れは漢學並に佛教の思想に影響せられたる所多し。就中、漢學の影響は歴々として、作歌の上にも、其の痕跡を留めたり。其の感情を反さしむる歌の如きは、最も恰好なる一例なるべし。

或有人不知敬父母、忘侍養、不顧妻子、輕於脫履、自稱異俗先生、意氣雖揚、青雲之上、身體猶在、俗塵之中、未驗修行、得道之聖、蓋是亡命山澤之民、所以指示三綱、更開五教、遺之以歌、令反其惑、歌曰

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐしうつくし 世の中は
かくぞことわり 鶉鳥の かゝらはしもよ ゆくへしらねば
うげくつを 脱ぎつる如く 踏みぬぎて 行くちふ人は 岩木より
なりてし人か ながなのらさね 天ゆかば 汝がまに

士ならば 大君います 此の照らす 日月の下は 天雲の
むかふすきはみ 谷ぐゝの さわたるきはみ きこしをす
國のまほらぞ かにかくに ほしきまに しかにはあらじか

久方のあまちは遠しなほくゝに家に歸りて生業をしまさね
其の意は、自序に云へるが如く、三綱五教の旨を勸むるにあり。此の教は古より我
が國人の尊奉したる所、儒教の傳來によりて始めて得たるにはあらねども、憶良の如
くかく正確に分明に表はさんことは、彼の教旨を講習したる結果たらずばあらじ。
かれが敬神忠君の念に厚かりしは前に出せる「好去好來の歌」にて知るべく、愛情に富
めりしは「筑紫にありて都に留めおきたる子等を思ひいで」詠める、又は「宴席より罷
らん」として口ずさめる歌等にて推しはからるべし。次なる歌

風じり 雨降る夜の 雨まじり 雪降る夜は すべもなく
寒くしあれば 堅鹽を とりつゝしろひ 糟湯酒 うち啜るひ
しはぶかひ 鼻びしくゝに しかとあらぬ 鬚かきなでゝ 吾をおきて
人はあらしと 誇ろへど 寒くしあれば 麻ぶすま ひき被ぶり
布かたぎぬ ありのことゝく 着襲へども 寒き夜すらを

われよりも 貧しき人の 父母は 飢ゑさむからん 妻子どもは
乞ひて泣くらん 此の時は 如何にしつゝか 汝が世はわたる
天地は 廣しといへど 吾がためは狭くやなりぬる 日月は
明かしといへども 吾がためは 照りやたまはぬ 人みなか
われのみや然る わくらはに 人とはあるを 人なみに
あれもなれるを 綿もなき 布肩衣の 海松の如く わくげさがれる
かゝぶのみ 肩に打かけ 伏菴の まげ菴の中に ひた土に
藁ときしきて 父母は 枕のかたに 妻子どもは あとの邊に
圍みゐて 憂ひさまよひ かまどには 煙りふきたてず 甌には
蛛の巢かきて 飯炊ぐ 事も忘れて ぬえ鳥の のどよびをるに
いとのかきて 短きものを 端きると いへるが如く 笞杖とる
里長が聲は 閨戸まで 來たちよばひぬ かくばかり
すべなきものか 世の中のみち

といへるは、題して「貧窮問答歌」といひ、同感の情に富めるを以て名高し。おのが境遇
の稍、足れるに比して、細民の貧苦に沈淪するさまを描く、相對する所一層貧者の窮苦

を想はしむ。從來の歌は大抵貴族の手になりて、題材は自然の風光にあらずば、通常貴人の間に起れる出来事に過ぎざりしに、憶良の此の歌は細民の階級を材として詠せしものなれば、正に當代の詞壇に一生面を開きたるものといふべし。而して、憶良の歌は適強の姿はあれども、詞形は稍粗笨なり。憶良に一の著書ありて『類聚歌林』といへり、當時の名歌を集めたるものなれども、今は傳はらず。

憶良の思想は前に述べたる如く、主として儒教より得たるが故に、着想おのづから人事にありて、且つ現世的なり。山川草木の自然美を詠じ、或は未來の觀念をほめさせる者の如きは、其の數も少なく、又概ね歌としては劣れるものゝみ。『萬葉集』中自然美を詠じて神に入れるは山部赤人なり。

赤人が自然美を詠せる歌は、音調特に美妙にして、(二)赤人の傳はた詳かならず。神集元年より天平八年までの歌『萬葉集』に見えたれば、聖武天皇の頃に盛なりし人と思はる。其の官は舍人閑雅にして、韻致に富み、氣力充溢して、生動せるが如などにや、御幸に従ひて諸勝地に遊覽せるが如し。

其の外の歌も、また自然美を詠せるものに譲らず、典雅の趣を具ふ。されども、其の長歌は概して短歌に劣れること、人麻呂の長歌の率ね短歌に優れると正反せり。

人麻呂の歌は長きは百四十九句に及べるもありて、言ふべき程の事は悉く具はり、一言の之に加ふべきものなきさまなりしに、赤人の一般に句を聯ぬること短く、言はまほしき所をいはずで意を轉ずる趣あり。かの不盡の山を望める歌に

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高くたふとき 駿河なる
不盡の高嶺を 天の原 ぶりさけ見れば わたる日の 影もかくろひ
照る月の 光も見えず 白雲も い往きはかり 時じくぞ
雪は降りける 語りつぎ いひつぎゆかむ 不盡の高嶺は

田子の浦ゆ打出て見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は降りける
といへるは、世人の一般に賞揚する所なれども、往々其の言の促迫するものあるを覺ゆ。某人の同じ題にて詠みたる左の歌に比較せんに、

なまよみの 甲斐のくに うちよする 駿河のくにと ちちくの
くにのみ中ゆ 出でたてる 不盡の高嶺は 天雲も い往きはかり
飛ぶ鳥も 飛びものぼらず もゆる火を 雪もてけち 降る雪を
火もてけちつゝ いひもえず 名づけもしらに あやしくも
います神かも せの海と 名づけてあるも その山の つゝめる湖ぞ

不盡川と 人の渡るも 其の山の 水のたぎちぞ 日の本の
倭のくいの 鎮とも います神かも 寶とも なれる山かも
駿河なる 不盡の高嶺は 見れどあかぬかも

ふじの嶺にふりおける雪は六月の望にけぬれば其の夜ふりけり
不盡の嶺をたかみかしこみ天雲もいゆきはかりたなびくものを

彼此共に清適莊高さりながら後なるは前なるに優りて風姿風情共に展びたり。赤人の長歌は比較上妙域にあらざりしこと想見すべきなり。然れども彼の短歌は此上なきまでに神韻の掬すべきものあり。次なる歌の如きは更に然り。

和歌の浦にしほみち來れば湯をなみあしべを指してたづ鳴きわたる
いにしへの古きつゝみは年ふかみ池のなぎさにみくさ生ひけり

これ其の一例にすぎざれど、其の調の高き人麻呂の短歌とても到底此の妙趣には及ぶべからず。景致見るが如く、感慨はた極りなし。赤人をして高名を博せしめしもの、蓋し是等の歌あるに依るめり。紀貫之二人を評へ「古今和歌集」の序文を見よ。

して「人麻呂は赤人の上に立たむ事かたく、赤人は人麻呂の下に立たむこと難し」といひたるはさる事ながら、彼れは雄渾なる長歌に於いてこれにまさり、此れは莊高なる短歌によりてかれに優れり。

さて赤人は自然美の詠者として特に其の妙を極めしが、彼れは又「萬葉集」の歌人等が通有せる特質をも決して缺かざりき。かの春日野の詠さては、聖武天皇の播磨の國、印南野に御幸せし時に陪從して詠める歌等は、かれが皇室に對する觀念の一斑を窺ふべく、敏馬浦の詠及び辛荷島の歌などは、懷郷の情を歌へるものから兼て彼れが情操の一端をトするに足る。人生又は宇宙に對する觀念は、其の詠のあらぬによりて見れば別に抱けりとしも覺えず、未來に對するはた然り。赤人はた現世的なる萬葉歌人なりしなり。

赤人全盛の前後は、當代に於ける歌界の最も盛榮の時期なりしを以て、歌人の輩出せるもの續々として相踵ぎたり。大伴安麻呂は文武天皇より元明天皇の頃に出でて人麻呂と稍、時を同じうせり。その子旅人は父に襲ぎて雄壯の調を唱へ、郎女はた女姓ながらに雄々しき風あり。此の郎女大伴宿奈麻呂に嫁して田村大嬢、坂上大嬢などを生みけるが、二女また母に劣らぬ才藻ありき。蓋し此の二女は「萬葉集」中女姓歌人の錚々たりしもの、詠する所情思纏綿坐ろに人を動かす趣あり。釋滿誓及び三方沙彌は又元明元正二帝の頃にありて、盛に老佛の旨義を歌ひ、志貴皇子、長屋王等も

其の頃の能手として後世に數へらる。笠金村・高橋・蟲麻呂・長意・吉麻呂等は、後れて世に出で、同じく斯道の功者として其の名現はれたり。概して云はゞ、莊重の音は意吉麻呂の歌に歸すべく、毅然たる丈夫の氣魂は蟲麻呂の詠に見るべし。金村は其の詞こそ巧なれ、想は足らぬがちにて韻致に乏しく、且つ平板に流るゝ傾あり。されど、是等の歌人は尙ほ當代の詞傑たるに耻ぢず、其の詠歌何れも諷詠に適せざるものなし。

そも、彼等の詠歌は、或は平板に、或は勇壯に、或は優婉典雅にして、其の着想も亦各異なりと雖も、歸する所は例の敬神忠君の念・主位に居り、相思の情之に次げり。雪月花等の自然を詠せるものも稀にはなきにあらざると雖も、おしなべては其もまた或種の感情を寄せんための料たるにすぎざりしが如し。若しそれ、釋滿誓等が人生の無常・流轉の相を詠せるなどの類は、特に異常として記すべきのみ。

その後なほ世の下りては、聖武天皇の朝よりかけて孝謙天皇の頃に、橘諸兄・同・奈良麻呂ありき。諸兄の歌は巧妙といふべき程にはあらねども、決して拙き者にあらず。奈良麻呂はた然り。次に大伴駿河麻呂・同地主・同像見等は、歌の數あまりに多からずと雖も、其の調整ひ、想も亦見るべきものあり。此の時に當りて、特に傑出せるを大伴

家持とす。家持は此の期の歌人を殿せるものにて、(一) 家持は旅人の子なり。生誕の年月并に行年詳ならず。聖武天皇の天平年中より孝謙淳仁稱徳光仁の五朝に歴事し、遂に中納言・特節・征東將軍を拜命し、從三位まで進み、桓武天皇の延暦四年に薨じたり。其の歌のすぐれたるもの、尠からず、歌の數も亦多し。

予輩は『萬葉集』歌人の特質として、敬神忠君の念又

は崇祖の情の熾盛なりし由を反覆すること數次に及びぬ。故に、爰に家持の評を述ぶるに當りては、其の思想又は感情の那邊に向へりしかを問ふことなく、純ら想像並に措辭の上に就きてを言ふべし。されども、尙ほ其の前に云ふべき一事こそあれ、即ち彼れの歌の中には、前人のに比して、儒佛の思想の加はれる者の多きことなり。こは山上憶良又は釋滿誓等の此の思想に富みたるとは稍、其の趣を異にせるものあり。彼等の作に儒佛の思想の交はれるは自ら好みて其の道を研究したる結果にすぎざりしに、是れのは時勢の傾向の作家の上に及ぼせる自然の印象としも見るべきものなればなり。敬神忠君又は崇祖の念に厚きをもて特質とせし『萬葉集』の歌人も、世につれて多少其の趣を異にせるは、趨勢の然らしめし所と謂ふべし。就中家持の如き最後の作家に到りては、當初の歌人のに比べて幾何か純粹の日本思想を缺き、儒佛の思想によりて、其の信念を形成したりげに見ゆ。家持の想像は深刻なりとは云ふ能はざれども、健全にして質實なる風あり。故に

其の歌ふ所は義理精細にして明快なれども平板に流るゝ嫌あるを免れず。また感情の熾盛なる割合には縹緲たる神韻に乏し。かの防人の別を悲む歌をはじめ、族を喩す歌、勇士の名をあぐるを慕ふ歌、さては亡き妻を傷む歌等は、最も微妙の詠として人の稱するものなるが、其の想像は稍乏しきかの觀あり。例へば次に掲げたる

久方の 天の戸ひらき 高千穂の 嶽にあまりし すめろぎの
神の御代より はじ弓を たにぎりもたし まかご矢を
たばさみ添へて 大來目の ますらたけをを さきに立て
ゆぎとりおほせ 山河を 岩根さくみて 踏みとほり 國覓ぎしつゝ
千早振る 神を事平け まつろはぬ 人もやはし はき清め
仕へまつりて 秋津島 大和のくにの 榎原の 畝火の宮に
宮柱 ふとしり立てゝ 天の下 知ろしめしける すめろぎの
天の日嗣と つぎて來る 君の御代々々 かくさはぬ 明き心を
すめらべに きはめつくして 仕へ來る 祖のつかさと 言たてゝ
授けたまへる うみの子の いやつぎくゝに 見る人の
語りつぎてゝ きく人の かやみにせむと 空言も 祖の名たつな

清き其の名ぞ おほろかに 心おもひて 空言も 祖の名たつな
大伴の うちと名におほへる ますらをのとも

反歌

しき島のやまとの國にあきらけき名におふ伴の雄こゝろつとめよ
つるぎたちいよゝとぐべし古ゆさやけくおひて來にし其の名を
といへるは、前に云へる「族を喩す歌」にて最も傑作の聞こえあるにも拘はらず、想像の分子は幾何もあらず、只歴史上の事實を借りて或道德的格言を平叙したりといはんのみ。しかれども感情の激烈なる、措辭の整然たる、若しくは格調の雄壯なるは、能く想像の缺乏を補ひて、誦者をして覺えずも襟を正さしむる概あり。彼れの歌には又情思の哀切なるもの、悲愴なるもの、或は典雅なるものも少からず。

亡き妻を傷む歌

吾が宿に 花ぞ咲きたる そを見れど 心もゆかず はしきやし
妹がありせば 水鴨なす 二人ならびる 手折りても
見せましものを 空蟬の 借れる身なれば 露じもの 消ぬるが如く
足引の 山道を指して 入日なす かくりにしかば そこ思ふに

胸こそ痛め いひもかね なづけもしらに 跡もなき 世の中なれば
せむすべもなし

反歌

時はしもいつもあらむをこゝろいたく去にし吾妹か若子をおきて
いで、行く道知らませばかねてより妹をとめむ關をおかましを
悲緒未だ息ますして更に作れる歌

世の中し常かくのみとかつ知れどいたきこゝろは忍びかねつも

秋の歌

さを鹿の朝たつ野への秋萩を玉と見るまでおけるしらつゆ

是等を其の最なるものとす。姿の長短に拘はらず、真情を述ぶるに妙を得たりしことを推測すべし。

以上に擧げたる歌人の外、此の集の歌には名歌として録すべきもの少からず。殊によみ人知らずといへる歌には、或は人麻呂又は赤人等にも殆ど匹敵すべきほどに巧妙なるものも見えたり。前に赤人の詠に比較したるなど、其の一斑なり。想ふに、其の作家の名の傳はらぬは劣等なる作者なるが故にはあらで、或事情の下に逸したるものもありしなるべし。
『萬葉集』以後、奈良時代に於ける歌界の消息は、漠として更に窺ふべきすべなし。蓋し、漸く漢文學の流行に壓せられて、一時衰微に赴きたるものなるべし。

第三章 散文

第一節 散文の概況

歌文の發達を異にせし所以 宣命 歴史 風土記及び氏文

奈良時代に於ける散文は、其の歌謠の靈妙富贍なりしに比すれば大に劣りて、猶ほ前代ながらの風を距ること遠からず。思ふに、是れ漢學の歌文に及ぼせる影響の異なるに依るなり。即ち、漢學渡來して人心の進歩を導きたるために、其の内容をして豊富ならしめしは歌文共に同じと雖も、獨り散文は一方に於いて又積極的に妨害を受けたり。漢學流行のあまり、國語にて綴れる散文の必要を減じて、其の發達を緩漫ならしめしこと是れなり。蓋し、當時の散文は世上に起これる事件を有りのまゝに記載するを以て足れりとし、要は簡便に事を處し得るにありき。漢文は我が國人には會得し難きものなれども、漢字の音訓をもて國語のまゝを寫さんよりは遙に便益なること多かり。故に、片假名の如き簡易なる文字なき時代は、漢字を知らざれば止む、苟くも之を學びたる以上は併せて其の文格をまで採用せんとするは、自然の人情なるべし。此の時代は即ちまさしく其れにて、漢字を知らざる輩は猶ほ口頭の傳唱

に依りて日常の用事を處辨し、之を學べる徒は漢文に物せんことを務めたり。况や、此の時代となりては漢學の獎勵益、其の効果を收めて、搢紳の間には漢文に堪能なる者ありて、朝廷の記録制令の類は云ふも更なり、一般の人民に告示する詔勅の類すら漢文なる者もありし程なるをや。かゝれば餘勢の歸する所、國語のまゝを寫せる文章は自ら等閑に附せられて、發達すべき機會に接せざりしなり。されば、此の時代の散文は、大概漢文の素に僅に國文を加へたる如き體裁のもの多し。但し以上云へるは、此時代の散文を以て歌謠の發達の著かりしに對していへるのみ、若しそれ之前代のに比するに豈に多少の進歩なしとせんや。殊に其の内容に至りては、人智の發達と共に進歩の見るべきものありて、漸次漢學並に佛教の思想の多くなり行きしは勿論なり。此の時代の散文には祝詞宣命歴史風土記及び氏文等の類あり。こゝには宣命歴史風土記及び氏文の三項に分ちて之を叙すべし。祝詞は前代に見えたと大差なきを以て之を録せず。

第二節 宣命

名稱 作者 書方 性質 天武天皇の宣命
宣命中の傑作

宣命とは漢文に綴れる詔勅に對して、國語に物せる勅語の謂なり。此のものゝ現存せるは、持統天皇以後の朝廷に用ゐられたるもの『續日本紀』に見えたるを始とす。而して、宣命といふ名稱は同書の第十卷に始めて見え、皇命を宣り聞かする所作を稱するなり。されば、宣命とは國語の生まれ、漢文の生まれ、朝臣が勅命を庶民に宣り聞かする所作を指して呼べるにて、其の文をさしていふ名稱にはあらざりき。さるを、後には直に詔勅の文を指して宣命と心得、甚だしきは宣の字に詔勅の意あるが如く解するに至りしなり。

宣命の今に傳はれるは持統天皇以後の作のみなれば、其の以前のは如何なりけん、『古事記』にも『日本書紀』にも記さざれば知るによしなし。古人の所説には上代のも皆此の宣命といふさまの文にてぞありけんといへり。『書紀』に載せたる詔勅の類は、悉く華麗なる漢文に譯せられたるものゝみ。

宣命の詞には上代より傳はれるを其のまゝに採用して、殆ど一定の成句となりたるもあるべく、或は多少取捨して時の便宜に従ひたるもあるべし。されども、當時の作者が其の時々の必要よりして綴れるからに、大體の上よりいへば其の時代々々の思想を告白せるものと見るを得べし。但し、其の作者の何人なりしかは今は詳かならず。『職員令』などには中務省なる大内記等の起草せしものなる由にいへり。而して、大内記の職には儒門の中文筆に堪へたる者を任命したる由、『職原抄』に見えたり。然るに、當時學問といへば只漢學のみを指せるにて、皇典等を攷究する事は絶えてなかりしかば、年月を経るにつれて漢語を交へ用ゐること愈々多く、或は梵語をさへ挿入せるものあるに至れり。其の外形の次第に當初の風を失へると共に、其の内容さへも頗る國體に違へるもの次第に増加せり。聖武天皇以後の作に係れるもの、殊に然り。これ勿論天皇の御心にも依るべしと雖も、當時の内記等の國典に暗きと時勢の然らしめたるとの結果なり。かくて『日本後紀』よりこなたの史籍に見えたる宣命に至りては、思想漸く純粹の日本的ならず、語格はた漢文めくところ多く、只古典を引ける若しくは成語を用ゐたるあたりのみ、古文の例によれり。さはれ、是等も散文としては漸次進歩の傾向を現せること、疑を容れざるなり。

書方は祝詞の漢文もて國語を寫せると均しく、彼の文字の正訓を用ゐ、且つ讀み易からんために細字にて助辭の假字を添へたり。世に之を宣命書と稱へて、上に見えたる萬葉書と區別す。元來、宣命の目的は朝廷の百官並に天下の庶民に宣り聞かすべきものなれば、成るべく多數の人々をして難解の點少からしむるにありき。これ宣命は止むを得ずして漢字を借るものから、務めて國語を寫すを主としたるなるべし。

されば、また其の文詞も最初は極めて通俗の言語を擇び出で、用ゐけんこと明けし。加之、措辭の上に種々の修飾を施して曲節の美妙ならんことをも務めたり。かくて、其の文體の祝詞に似て稍、韻文めきたるも、期するところ亦殆ど彼此相同じく、朗讀して聽者の感を惹かんとするにあればなり。即ち是れは庶民に宣り聞かする詞にて、彼れは神前に告白する詞なれども、共に對者として感動せしむるを目的としたればなり。故に、また宣命の文にも對句疊語等好調の語を用ゐたるがあり。要するに祝詞も宣命も散文とはいひながら、未だ全く純粹の散文たること能はざるものなれど、かれは極めて歌謠たるに近く、これは甚だ散文たるに近きものなり。而して、之を宣傳するには讀方嚴正にして、曲節あり、聲音明晰にして高調なるもの、宣命使として之を務めたり。各段落の終り毎に、諸、聞こし召さへと宣る時は、皇太子先づ唯と稱へ、次に親王以下諸人同聲に唯と稱へたりとぞ。これはた宣命をして莊重の感あらしめたるものなるべし。

こゝに文武天皇即位の始に下し給へる宣命を掲げて、其の一例を示さん。書方は前に云へる如くなれど、態と假名交りの體に改めたり。

現御神と大八島國しらしめす天皇大命らまと詔りたまふ大詔を集侍る皇子等
王臣百官人等、天下公民もろく、聞こし食さへと詔る。高天原に事始めて遠天
皇祖の御世中今に至るまで天皇御子の生まさん彌やつぎに大八島國知ら
さん次ぎてと天つ神の御子ながらも天にます神のよさしまつりしまに、聞
こしめし來る此の天つ日嗣高御座の業と現御神の大八島國しらしめす倭根子
天皇命授けたまひ負せたまふ貴き高き廣き厚き大命を受けたまはりて恐みま
して此の食す國天の下を調へたまひ平らげたまひ天の下の公民を惠みたまひ
撫でたまはむとなも神ながら思ほしめさくと詔りたまふ天皇が大命を諸、聞こ
し食せと詔る。是を以て百官人等四方の食國を始め奉ると任けたまへる國々
の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷きたまひ行ひたまへる國法を過ち犯すこ

となく明き淨き直き誠の心を以ちて御稱稱みて緩み怠る事なく務めしまりて仕へ奉れと詔りたまふ大詔を諸、聞こし食さへと詔る。故この状を聞こし食し悟りて歎しく仕へ奉らむ人は其の仕へ奉れらむ状のまに、品々讃めたまひ治めたまはむものぞと詔りたまふ天皇が大命を諸、聞こし食さへと詔る。

これ今を距ること殆ど千二百年以前の作なり。全文四個の段落より成る。第一段は殆どすべての宣命に見えたる冒頭ともいふべきものにて、皇命を謹承すべき旨を述べ。第二段には皇位の繼承並に施政の方針を指示す。而して、第三段には臣民の守るべき條々を諭し、第四段には忠良の臣民にはそれ、恩賞すべき由を述べたり。中にも、第二段に於いて皇位の由來を述ぶること縷々たるは、皇位の神聖なる所以を明かにして、忠君の念を振作せしめんが爲なるべし。之を詮するに、一は皇位の神聖なるより臣民の畏敬心を鼓舞し、一は徳政によりて彼等が報恩盡忠の念を喚起せんとするもの、如し。意義の上には君臣親睦の状況を窺ふべく、措辭の上には平易質實の言語、而も莊重謹嚴の調をなせるを見る。

右の外、元明孝謙二帝の即位の宣命、さては聖武天皇立后の宣命等見るべきものあり。就中、光仁天皇が左大臣藤原永手の薨去を吊ひ給ひし宣命は、更に世に稱せらる。

是は文武天皇の宣命を距ること七十年後の作なれど、其の文辭に詞句の流麗なるのみならず、哀悼の情溢るゝが如し。

第三節 歴史

修史 稗田阿禮 『古事記』の編修 太安萬侶 『古事記』の
文體並に書方 文例 本書の性質 『假名日本紀』

推古天皇廿八年に聖德太子蘇我馬子と共議して天皇紀及び國紀臣連伴造國造百八十部並に公民等の本紀を録したまひき。これをまさしく我が國に修史の舉ありし。嚙矢とす。されども此の計畫は其の明年太子薨去せられしかば完成に至らずして止みにき。かゝれど猶ほ其の書の幾分は成功したるもありけるが元來是は太子と馬子との私撰にて勅命を承りしものならねば其のまゝ蘇我家の預り置く所となりしに皇極天皇の御宇に中大兄皇子等馬子の孫入鹿を誅せられし時に其の父蝦夷火を其の家に放ちて自殺せしかば其等の書も大方は焼失して只船史惠尺といふもの、僅に取り出でたる天皇紀及び國紀のみ其の災を免れたりきといふ。

然るに其等の書ども亦いつの頃にか亡佚したれば體裁の如何は今日に至りては素より知るべからねど聖德太子の記したまひきといふ『上宮記』の遺文によりて推考すれば恐らくは假字漢字の混和したる者にて所謂宣命書の文をも交へ記したるものなるべし。

其の後天武天皇の御宇に至り天皇夙に國史編修の叡慮ありて諸家の賫す所の記録の正實に違ひ虚偽の加はること多きを患ひたまひ其の眞偽を討覈して後世に傳へんことを思召したまひき。此の時舍人に稗田阿禮阿禮の傳記は詳ならず。

といふ者ありき。阿禮其の頃年二十八博覽にして強記目に度れば口に誦し耳にふるれば心にしるすよし聞えき。天皇即ち近く召したまひて御口づから誦し授けたまへる先代の舊辭を讀み習はしめ給へり。『日本書紀』に天武天皇十年三月丙戌天皇御于大極殿以詔川島皇子忍壁皇子廣瀬王竹田王桑田王三野王上野君三千忌部連大島平群臣子首令記定帝紀及上右諸事大島子首親執筆而録焉と見えたるは此時の事なるべし。され共此の舉も其の十五年九月に天皇崩じたまひ又大詔を蒙りたる人の中にも事に與りし間に逝去したる者ありしかば功を見ずして自ら中止せられぬ。かくてまた持統天皇五年八月十八チ氏に詔して其のチ大三輪雀部石上藤原石川巨勢膳祖等の纂記を上進せしめしことありき。是は先帝春日部下毛野大伴紀阿諸佐伯采女穗積阿曇平群羽田。の遺志を紹ぎて國史を編修せしめたまはんの準備リ纂紀とは氏の系譜を云ふ。なりけめど讓位の事ありてまた果さゞりき。然るに多年の畫策は元明天皇の御世

に至りて漸く其の成果を見るを得たり。即ち『古事記』先づ成り、『假字』本記、『日本書紀』相踵いで世に出づるに至りしこと是れなり。是れより歷朝修史の舉愈々盛大に赴きぬ。

九〇

『古事記』は三卷より成り、我が國の開闢より推古天皇(ヌ)太安萬侶の傳は詳かならず。慶雲元年從五位下に叙し和銅五年正五位に進み勳五等を授けらる。此の年九月十八日詔を蒙りて古事記の撰進に着手し翌年正月廿八日上奏す。靈龜元年正月更に從四位下に進み氏の長者となり又民部卿となれり。養老七年七月逝りぬ。享年明かならず。

本書の文體は、大方を云へば漢文の格によりて記したる者なり。但し、書中に散見せる歌謳の類は勿論悉く漢字の音を假り、又適當なる漢語なき古語をも之によりて寫したり。故に、本書は漢文として見る時は拙劣なるを免れずと雖も、大むね漢文の格に従ひながら、猶ほ往々漢字の音を假りて國語のまゝを寫したるによりて見れば、最初より純粹の漢語に讀み下すべきやうに作りしものならざる事明かなり。

本書の書き方を大別すれば、四種あるを見る。第一は純ら漢字の音を假りて寫せるもの、第二は其の訓をも併せ用ゐて宣命書に類せるもの、第三は文字の排列こそ轉倒して漢文に類すれ實は我が國語の格と異ならざるもの、第四は文字の排列は勿論語格までも全く漢文に依れるもの是れなり。然れば、文字の用法も隨うて多様なり。漢字の本來の意義に用ゐられたるも其の一なれど、久羅下那洲多陀クワガナスダダ用弊流ヨヘの如きは字義に關せず用ゐたる音假字にして、天アメをア、師シをシ、木キをキと讀まする類は訓假字なり。其の他、漢字の偏傍を省ける略字、または漢字の意義を採らざる借訓、若しくは右の數種を併用したるものなど、何れも一種の書方とも見るべし。春日飛鳥長谷他田カスガトビカハツセ三枝等ササキは、更に又特殊の書方なり。

此の書元來祝詞宣命等とは其の目的を異にしたれば、其の文に彼等の如き韻文めきたる修飾を具へずと雖も、更に變化に富み、且つ素樸遒強の風を帯びたり。就中、上の卷は諸々の神話傳説を直寫せる處多きを以て、撰者が苦心の程大なるものありしなるべしと思はるゝにも拘はらず、中下の卷にまされり。

此の書編修の目的は純ら古傳説のまゝを録するにあり、而して撰者の周匝なる注意は能く其の目的を達したるが如し。かゝれば、此の書の貴重すべきは問はずして

明なるべきに、實際は之と反して近世に至るまで空しく高閣に束ねられて蠹魚を養ふ料となれりき。是は強ち此の書の價值を無視せしにあらざるべけれど、此の書出で、より八年新に『日本書紀』といふ漢文の歴史編纂せられ、剩へ漢學流行せる當時の嗜好に投じて太く世にもてはやされしかば、其餘波遠く後の世までも繼續して終にかゝる結果とはなりけるなり。勿論『書紀』にも優れる點絶えて無きにあらず、例へば其の體裁の極めて整然たる、若しくは一書として衆説を網羅したる如きは、到底此の『古事記』の企及するところにあらず。されども『日本書紀』は悉く華麗なる漢文をもて寫したるが故に、恐らくは詞藻の修飾に妨げられて、傳説の眞を失へるも多からん。開卷第一に天地開闢の説を記せるあたりすら、明かに支那の理學説に附會したる跡あり。且つ大體の上よりいふも『書紀』の記する所は餘りに精細に過ぎて、單に古傳説をのみ譯載せりとは思惟しがたき節あり。年月干支を細記せるが如き、其の一例なりとす。『古事記』は之に反して文章は尨雜記事は粗放なる觀ありと雖も、傳承のまゝを直寫したるを以て史的價值に至りては大に重んずべきものあるを覺ゆ。即ち『古事記』の載する記事が悉くに史事實ならば勿論、若し假りに多少は史事實ならずとすも、猶ほ此の記事が表する如き感想を或時代の人々が必然思ひ浮べきといふ

ことだけは動かすべからざる事實として斷言するを得べければなり。神話傳説其のものが詩歌小説の表する如く、或時代の思想感情の一斑を表明する者なればなり。此の意味にては此の書は史たる以外に、或部分は詩なりと謂はんも不可なからん。

此の書の神話傳説には頗る不可思議なる所多し。就中神代の卷を緝けば、さながら『新約全書』を見るが如き心地す。さればにや、古來神道家は此の書を以て一の神典と見做し、奇跡の不可思議なるは神の御仕業なるに依ると思惟したりき。されど、又神話を事實なりとすると同時に其の怪異なる説話をば全く比喩なりと解するもあり、或は全く事實にのらすとするもありき。要は孰れも其等の説話の奇怪なるを承認するに外ならず。今神話の中にて奇なりと思はるゝ一節を掲げて、其の例とせん。讀者の便を計りて假字交り文に改めたること例の如し。

此の大國主神の兄弟八十神坐しき。然れども皆國は大國主神に避りまつりき。避りまつりし所以は其の八十神各々稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて共に稻羽に行きける時に大穴牟遲神に袋を負はせ從者として率て往き。こゝに氣多の前に到りける時に裸なる菟伏せり。八十神其の菟に言ひけらく汝將爲は此の海鹽を浴み風の吹くに當りて高山の尾上に伏してよといふ。故其の菟

八十神の教ふるまゝにして伏しき。こゝに其の海鹽乾くまゝに其の身の皮悉に風に吹き拆し故に痛みて泣伏せれば最後に來ませる大穴牟遲神其の菟を見て何由泣伏せると問ひ給ふに菟答さく僕游岐島にありて此の國に度らまく欲りつれども度らむ因なかりし故に海の和邇を欺きて言ひけらく吾と汝の族の多き少きを競べてむ。故汝は其の族の在りことく率て來て此の島より氣多の前まで皆列み伏し度れ。吾其上を踏みて走りつゝ讀み度らむ。こゝに吾族と孰れ多きといふ事を知らむ。かく言ひしかば欺かえて列み伏せり。時に吾其上を踏みて度り來て今地に下りむとする時に吾汝は我に欺かえつと言ひ竟れば即最端に伏せる和邇我を捕へて悉に我が衣服を剝ぎき。此に因りて泣き患ひしかば先ちて行きましゝ八十神の命もちて海鹽を浴みて風當り伏せよと誨へたまひき。故誨の如せしかば我が身悉に傷はえつと告す。こゝに大穴牟遲神其の菟に教へ告はく今急此の水門に往きて水以て汝身を洗ひて即其の水門の蒲黃を取りて敷き散らして其の上に輾轉びてば汝身本の膚の如必ず差えなむものぞと教へたまひき。故教の如爲しかば其の身本の如くになりき。これ稻羽の素菟といふ者なり、今に菟神となもいふ。故其の菟大穴牟遲神に白さく此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ帑を負ひたまへれども汝命ぞ獲たまひなむと白しき。

其の他尾ある神、物言ふ鼠、天上黃泉さては伊邪那岐命の頸飾の葡萄の房となれる等の事、擧げて敷ふべからず。そも、撰者は是等の説話を全く實事なりと信じて記載したるか、或は然らざりしか分明ならずといへども、蓋し或時代の人々の想像したる小話に屬すべきものならん。是等を一種の想像説として見る時は、此の書は實に上古人の偉大にして豊富なる想像力を持てりし事を證するものなり。さはれ、其の想像多くは不自然にして、稍無稽なるかの觀あり。而して、上古人が特質たる純潔を貴ぶ風は、また著く本書の記事にも表れたり。

要するに、此の書には、史的事實と見るべきものと、詩的想像と見るべきものと、二あるべし。此の書元來史として編修せられたるものなりといへども、文學としての價值或は前者に譲らじ。此の書を史として研究せんものは、須らく如何なる度までが史的事實たるべきかを審にすべきなり。

『假名日本紀』といふは元明天皇の和銅七年に成りたる書なり。紀清人の撰進せしものならんといふ。『古事記』の如く和漢混和の文體なりしなるべしと思はるれども、

今は傳はらねば明に知るに由なし。

第四節 風土記及び氏文

風土記の由來 性質 文體 例 高橋氏文

元明天皇の和銅六年五月、畿内並に七道の諸國に制して、郡郷の名に好字を著けしめ、又其の郡内に生ずる銀銅彩色草木禽獸魚蟲等の色目及び土地の沃瘠、山川原野の名號の由來、又古老相傳の舊聞異事を史籍に載せて言上せしめたる事ありき。此の制に應じて諸國より奉りしもの之を風土記といふなり。當時諸國より奉りたる風土記も許多ありけんを、今は大方亡佚して、残れるは僅かに數部に過ぎず。其の中に、最も舊きは『播磨風土記』にて、常陸出雲丹後の風土記、これに次ぐ。『出雲風土記』は卷末に天平五年二月三十日之を勸へつくと見えれば、『常陸風土記』よりは二十年ばかりも後の作にやあらん。肥前豊後の風土記はた出雲のと同じ頃に作れるか、其の體裁稍相似たり。されど、其の文體出雲のよりも時代の後れて見ゆると、『朝野群載』に醍醐天皇の延長三年十二月五畿七道の國司に令して風土記を撰進せしめたることあるに依りて、其の頃撰したるものなるべしといふ説あり。此の中『出雲風土記』は缺くる所なければども、他は悉く缺本又抄録本にて傳はれり。其の外『筑紫風土記』『土佐

風士記』『備中風士記』『日向風士記』等の名稱は、『萬葉仙覺抄』『釋日本紀』其の他の古書に散見したれども、皆逸文のみ。又世に『日本總國風士記』とて、殘缺本若干冊ありて舊き奥書などもあれど、全く僞書なり。

風士記は大方は漢文躰に書かれたるが、中に古老の舊聞を録せるあたりは、國語のまゝを寫せるもあり。此の點よりいへば、其の文躰は多少『古事記』に近けれども、漢文の法によれる事遙に彼れに越えたり。書中の記事は物名等を列ねたる部分多きがゆゑに、概しては乾燥無味にして殆ど文學上の價值なき程なり。又傳説に屬せる記事は往々怪異に過ぎたれど、當代の人の詩的想像に富めりし一端を窺ふべき資料たるべし。次に『出雲風士記』なる國引の故事を記せる一節を掲ぐ。

意宇と名づくる所以は國引きませる八束水臣津野命の詔り玉はく八雲たつ出雲の國は狹布の稚國なるかも、はつ國小さく作らせり。故作り縫はむと詔り玉ひて袴衾新羅の三崎を國のあまりありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝき穗ふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに河船のもそろゝに國來國來と引き來かば石見の國と出雲の國との堺なる名は佐比賣山是れなり。又持ち引ける綱は國の長濱是れなり。亦北門崎の國をあまりありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに河船のもそろゝに國來國來と引き來まなみの國のあまりありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに國來國來と引き來波縫の打ちたえよりして間見の國是れなり。また高志のつゝの三崎を國のあまりありやと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに河船のもそろゝに國來國來と引き來るに國來國來と引き來縫へる國は三穗の崎なり。持ち引く綱は夜見島是れなり。堅めたてしかしは伯耆の國なる大神岳是れなり。今は國引き屹へぬと詔り玉ひて意宇の森に枝つきたてゝおゑと語り玉ひき。故意宇といふ。

(讀者の便を計り假字交り文に改む)

かば石見の國と出雲の國との堺なる名は佐比賣山是れなり。又持ち引ける綱は國の長濱是れなり。亦北門崎の國をあまりありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに河船のもそろゝに國來國來と引き來まなみの國のあまりありやと見れば國のあまりありと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに國來國來と引き來波縫の打ちたえよりして間見の國是れなり。また高志のつゝの三崎を國のあまりありやと詔り玉ひて童女の胸鉏取らして大魚のきだつき別けて旗すゝきほふり別けて三つよりの綱打ちかけて霜つゝらくるやゝゝに河船のもそろゝに國來國來と引き來るに國來國來と引き來

右の外なほ奇怪なる想像を描ける條渺からず。其の他の風土記にありても亦おなじ。されども、後に出でたるは漸次想像の分子を減じて愈、淡泊無味なるものと成り、終には文學的價值全く見えざるに至れり。

其の頃又氏文といふものありき、一家族の歴史ともいふべき者にて、祖先の功業及び家系を録せるものなり。書き方は漢文の中に假字文を混へて、別に助辭を細書し『古事記』の書き方と宣命書とを兼ねたる躰裁なり。氏文の今日に傳はれるは獨り高橋氏文の全文のみ。高橋氏文は其の先祖たる磐鹿六猶命の事蹟(磐鹿六猶命は景行天皇の頃の人なり)を始め、其の裔孫の世々膳部(カシヅ)の職を奉仕せし由來さては若狹國を領したる事などを録したり。此の書は延暦十一年高橋安曇の二氏神事の時、庭上の行立の前後を争ひしをりに上進せし者なりといふ。蓋し、祖先より傳はれる傳説又は舊記を搜りて編纂したる者にて、其の文古雅にして能く當代の風に適へり。

第四章 漢學

留學生の派遣 大化の革新 學校の設置 漢詩

漢文にて綴れる歴史 詩集

漢學の研究は、佛教の流行に隨ひて前期の末頃より稍其の頭を擡ぐるに至りしが、此の期に入るに及んで漸く其の隆盛を見るに至れり。蓋し、我が國に傳はりし佛經は概ね漢文なりしからに、其の研究は自然に漢學の研究を必要たらしめしなり。されば、漢學を研究するもの、最初は概ね佛教にたづさはりたり。就中、聖德太子の如きは内教を高麗の僧惠慈に習ひ、外典を博士覺智に學び給ひ、才學非凡なりきとぞ。其の自ら草せし所の漢文にして今に遺れるもの十七憲法あり、推古天皇の朝に作り給ひしものなり。これと相前後して、伊豫の道後温泉の碑文、大和法隆寺なる釋迦佛銅像の背銘、如意輪觀音の背銘等あり、其の何人の撰なるを知らずと雖も、稍、漢文の躰を得たるもの、皆今日に傳はれり。聖德太子が蘇我馬子等と共に同天皇の御宇に撰定せられし天皇紀、國紀、臣連、伴造、百八十伴並に公民等の本紀の如き、今は悉く亡佚して確知するに由なしと雖も、其の文章はまた漢文の如き躰なりしならん。

此の頃漢學をして更に愈隆盛に導きしものあり、我が國が隋唐と直接の交通を開きたる事これなり。これはた當初は佛教流行の餘波なり。從來我が國は三韓の諸國と交通來往したりしが、三韓は素と支那の文化を承けたるものにて、其の開化の度は未だかの國に劣れるものありき。故を以て、我が佛經を研究するもの、初の程こそは三韓の媒介にて安んじられたれ、漸く進歩するに隨ひ不滿の念おのづから起りて、竟に直接に使を支那の帝都に派して佛經を求めしむるに至れり。推古天皇の十五年に小野妹子を隋に遣はし、は即ち佛經を持ち來たらしむるためなりき。さて、妹子翌年歸るに及び更に遣はし給ひ、同時に學生、倭福因、奈良惠明、高向玄理、新大國、學問僧旻、南淵請安、志賀惠隱、漢人廣齊等、八人を隋に留學せしめき。これ隋唐の文物を輸入せんとする始なり。諸氏留り學ぶこと十數年、歸るに及んで盛に彼の國の文物制度の善美なるを賞揚せり。これより先き、内には冠制服制の新定せらるゝありて、參朝の禮古のに異なれば、道路既に目を側て、其の整然たるに驚きしに、唐風の善美を聞くに及びて、ますます景慕する念を喚起するに至れり。而して、其の結果は唐風の模倣となりて、政治上並に社會上に一大變動を與へ、更に人心を驚破せしめたり。其を大化の革新とす。此の革新は從來地方分權の制なりしを一變して、中央集權の唐風に

模したるものなり。事既に此の如くなれば、漢學の必要ますます増加すべきは勿論なり。即ち、其の天皇の御代には高向玄理、僧旻を以て博士とし、次いで又留學生を唐に派遣せしこと續きて二年、年毎に其の員數を増加したりき。天智天皇の時には學校を興し、學職頭を任命し、四道の博士を置きて學生の養成を務め給ひき。四道とは紀傳、明經、明法、算道の四科をいふ。紀傳は歴史を主とし、文章を兼修するもの、明經は『周易』『尚書』『周禮』『儀禮』『禮記』『毛詩』『春秋左氏傳』の六經一傳を主とし、『論語』『孝經』を兼修するもの、明法は今の所謂法律學にて、律、令、格式を研究するもの、算道は數理算術を學ぶものなり。さては、此の頃の學生の養成といふも、畢竟は漢學教育に外ならざりしなり。これより歴代の天皇これが整頓に意を留め、遂に京都に大學、諸國に國學をおきて學事を奨勵し給ひしかば、其の進歩大に見るべきものありて、學者彬々として續出せり。天智天皇の頃、其の子大友皇子の如きは、既にかの詩を模倣する、こゝをさへ始め給ひにき。皇子ある時宴に侍して作り給ひし詩あり。曰はく、

皇明光日月 帝德載天地 三才並泰昌 萬國表臣儀

また太政大臣となりし時の述懐の詩に曰く、

道德承天訓 鹽梅寄真宰 羞無監撫術 安能臨四海

着想もとより一奇なしと雖も、巧にかの詩の躰を得たり。漢學隆盛となりし現象、以てトすべきなり。さて、天智天皇の制定し給ひし近江の律令は、歴代の改革を経て愈完備し、大寶の律令となるに至りて、殆ど永世不磨の大典となりぬ。

かゝれば、元明天皇の頃よりは從來政治上にのみ注がれたりし力は、おのづから他方に向ふこととなりぬ。制度改革の必要よりして養はれたる學問は、今は學問其のものゝために講究するに至りぬ。此に於いて我が國文藝の見るべきもの漸く多かり。元明天皇和銅五年に『古事記』完成せられ、同六年に風土記の撰進せられしは既に云へるが如し。元正天皇の養老四年には、『日本書紀』といふもの又修定せられたり。

『日本書紀』三十卷は元明天皇の勅を奉じて舍人親王(ル)親王は天武天皇の皇子なり、學問該博識見高尚勅を奉じて日本紀三十六卷系圖一卷を撰進し、知太政官事に任じ、一品に叙せられ、天平七年十一月に薨じ給へり、淳仁天皇位に即かせ給ふに及び、追尊して崇道盡敬皇帝と諡し給へり。(大日本史)總裁となり、太安萬侶紀清人三宅藤麻呂等と共議して撰進せるものなり。故老の口碑により、世間の傳説に採り、なほ舊記を參照し、漢文にして漢土の史牀に倣へり、但し歌謠のみは漢字を假り、國語によりて口誦のまゝを寫したり。記事は天地の開闢より起りて、持統天皇の御代に至る。文牒の整備せる、なか／＼推古天皇時代の漢文の比にあらず。此に其の一例を示さん。

七年秋七月己巳朔乙亥。左右奏曰。當麻邑有勇悍士曰當麻蹶速。其爲人也。強力以能毀角申鉤。恒語衆中曰。於四方求之。豈有比我力者乎。何遇強力者。而不期死生。頓得爭力焉。天皇聞之。詔群卿曰。朕聞當麻蹶速者。天下之力士也。若有比此人耶。一臣進言。臣聞出雲國有勇士曰野見宿禰。試召是人。欲當于蹶速。即日遣倭直祖長尾市。喚野見宿禰。於是野見宿禰自出雲至。則當麻蹶速與野見宿禰令拏力。二人相對立。各舉足相蹶。則蹶折當麻蹶速之脇骨。亦踏折其腰而殺之。故奪當麻蹶速之地。悉賜野見宿禰。是以其邑有腰折田之緣也。野見宿禰乃留任焉。

然れども、此の書は前にも云へるが如く、其の文飾華(ナ)本書第二編第三節參照麗にすぎたるために、往々意を害し、又體製の完備を求めたるあまりに、支那の傳説に附會したるかと思はるゝ節あり。此の書が史實の記録として『古事記』に譲るところ多かるべきこと、亦前に云へるが如し。

『日本書紀』成りて翌年、天皇博士を召し、朝廷に於いて講筵を開き、之を講讀せしめ給ひき。其の後『書紀』を講せしめ給ふこと、世々の儀式となれり。此の書次々の御代に撰定せられたる『續日本紀』、『日本後紀』、『續日本後紀』、『文德實錄』、『三代實錄』と併稱せられて、世に『本朝六國史』と呼ばる。我が上代の事迹を研究するもの、以て重寶とす。

さて、奈良時代の文化は日に進みて、聖武天皇の前後にありて隆盛の頂點に達したり。此の御宇に吉備眞吉備留學二十年にして唐より歸りぬ。眞吉備は元正天皇の靈龜二年に遣唐使多治比縣守に従ひて彼の國に渡りしものなり。其の頃唐は玄宗皇帝の代にして、文運最も隆盛なる時なりき。長安の都は華美の中心として時様の流行人目を驚かし、絶代の學士星の如く、朝臣に張九齡郭子儀の徒あり、文人に李白杜甫高適岑參王昌齡孟浩然の輩あり、書には顏眞卿張旭等、妙手千古を壓し、畫には王維李龍眠等芳名四表に溢れき。されば、遣唐使僧侶學生等の此の偉觀を目撃し、若しくは私淑して歸朝するや、我が文運の進歩を益せしこと又昔日の比にあらざりき。漢學者として以上に掲げたるもの、外、越智廣江鹽野古麻呂淡海三船僧侶としては道慈・玄昉鑑眞・行基等、詩文の作最も多く且つ盛名あり。孰れも直接間接に漢學思想を國民に鼓吹し、文化の進運を賛翼せし事迹史上に顯著なり。

奈良時代の詩は大友皇子の作をはじめ編纂せられて『懷風藻』といふにあり。『懷風藻』二卷は何人の撰なるか詳かならずと雖も、天平勝寶三年の序文あるにて、其の世に出でたるを知るべし。諸作(カ)經國集は平安時代に出で、孰れも織巧和歌の率直なるに似ず。これ蓋し隋唐詩人(リ)懷風藻は淡海三船の撰とする説あれど、反對説もありて、断定しがたし。

の口吻を模倣せるに基く。着想の平凡なるも亦其の故なるべし。當代漢學者の詩文にて『經國集』といへるに採録せられたるものも亦少なからず。

第三編 平安時代の文學

第一章 總論

年代の範圍 平安時代文學の概況 時代の有様 言語
平假名の創作

平安時代とは桓武天皇が延暦年中帝都を平安に遷させ給ひし頃より、後鳥羽天皇の文治年中源頼朝覇府を鎌倉に開きし頃までを云ふ。其の間、およそ三十二代四百餘年なり。

此の時代の初には、歴代の天皇意を用ひて漢文學を奨勵し、朝紳はた私學館を設けて子弟の教養を務めければ、斯學の隆盛殆ど其の頂點に達したり。然るに、清和天皇の以後には、國文學勃興して歌謠に見るべきもの少からず。醍醐天皇の御宇より後一條天皇の頃にかけては、歌文共に隆盛を極めたり。就中、散文は未曾有の發達を爲せり。かくて、上古の歌謠を主としたりし文學は、此の時代に及びて散文を主とするに至りぬ。故に、此の時代をば、文學上にて散文時代と稱するものあり。後世國文といへば、此の時代の散文なりと思惟するものあるに徴しても、其の盛なりしを知るべし。後一條天皇の以後に至りては、又昔日の如くならず、歌文共に衰微の傾向を現はせり。

抑、此の時代は藤原氏が朝に立ちて權を專にし、驕奢を極めし世なり。されば、平安の京は押しなべて常に華美の中心として、奢侈の風盛に行はれたり。まづ、邸宅に大内裏の宏壯は云はずもあれ、王族權門おのゝ意匠を凝らして臺閣水石の巧を競へり。飲食衣服に膏粱美味綾羅錦繡は常の事なり、家具調度に玉杯象箸はた云ふに足らんや、輿車に金銀を鏤め、別墅に珠玉を布けるもありき。かゝれば、公卿殿上人などの如きも、實際の政務を顧るものなく、務むる所は主として歌舞遊宴辭令容儀の類ありしのみ。朝廷には曲水の宴を始めとして、子の日の遊びあり、紅葉の賀あり、人日、上巳、端午、七夕、重陽の如き、既に雅遊の佳節となれり。其の外、四季をりゝのながめは、花鳥風月につけて豪興至らざるなく、或は小舟を河水に泛べて詩歌管弦の巧に誇り、或は酒池肉林の盛會に東方の白むを覺えざるもありき。圍碁、雙六、蹴鞠、打毬、放鷹等の嬉遊甚だ盛にして、騎射競馬の如きも當時は遊戲の一として數へられ、催馬樂、東遊等の野曲はた詩歌と共に讌席の餘興として行はれき。如之、此の頃にありて猶ほ一層甚しかりしは、男女間の情交なりけり。翻々たる佳人才子は思を花鳥に寄せて穴

隙を鑽り春の日の暮るゝをも知らず秋の夜の更くるをも覺えず唯淫猥なる肉體の娛樂をのみ貪るを事とせり。當世の人は醉へるが如くまた狂ふにも似たりけり。さはれ醉ふものは必ず醒むる事あり狂へるものも猶ほ治することなきにあらず然るに當世の人はいつ醒めんとも見えざりき。

平安時代の文學はかゝる時勢の中に、かゝる事を務とせし貴族の手によりて成れりしなり。そも、かゝる時勢に、かゝる事を務とせし貴族の手に成れりし文學の性質は、果して如何なるものなるべきか。繊細巧緻浮靡艶麗多くを言ふを要せじ。况や、其の文學の主なるものは、多くは柔弱なる女流の手より産まれしものなるをや。

當時佛教には三論法相華嚴律俱舍成實等の古宗の外天台眞言の二宗大に行はれたりき。かくて神佛一體本地垂迹の説世上に傳はるゝに及びて佛教の傳播は殊に昔日に異り幾程もなくて舉國其の教を尊奉せざる者なきに至れり。然れどもかくの如くなりて後は僧侶も却て弘教の爲に力を盡すものなく剩へ名僧も出でざりければ何時しか深遠なる玄理は失せて皮相の妄語虚式のみ人心を領したりき。浮靡柔弱なる習俗の佛教によりて愈、其の度を増大せし事跡文學の上に歴然たるを見るべし。漢學もまた大に流行せしが、其の流行就中詩文の流行は少からぬ感化を人心

の上に與へたり。漢學と佛教との思想が漸々我が固有の思想と融和して、此の時代の文學の内容を豊富ならしめし事は言を待たず。言語は漢學佛教の流行するに従ひて外國語の混交漸く多きを致したり。此の時代に、其の輸入せられたるもの當に從來の如く名詞等の止むを得ざるものゝみにあらず動詞形容詞などまでも其のまゝに使用せられしもあり。是等は孰れも其の音韻の我が國語に融合すべき限を取りたること勿論なりしが、其の輸入の愈、多くなるとに従ひ、此方よりも亦調和すべき必要ありて、自然に國語の音韻若しくは組織の上に多少の變化を生ずるに至りぬ。いめ(夢)のゆめ、あかとき(曉)のあかつきと變じ、さきはひ(幸)のさいはひ、なほし(直衣)のなうしと化したる如き類は枚舉に遑あらず。其の他、上古に用ひし言語にて全く其の跡を絶ちたるもあり、新に増加したるもあり。今

是等の變化によりて生じたる國語の性質を考察するに、其の語勢の質朴にして強きは流麗にして弱きに變りたるが如し。是等の言語によりて綴られたる文章の漸く簡勁率直の態を失ひて滑脱妖艶の姿となりしは勿論なり。此の時代に見えたる限にても、早きと後れたるとを比較すれば猶ほ此の趨勢の現れたるを發見すべし。『伊勢』『竹取』等の物語に比べて、『源氏物語』などの遙に優美なるにても知るべし。

文字は奈良時代の末葉に片假名の發明ありしこと、既に前に述べたり。此の時代の初に至りて、平假名また製出せられぬ。元來漢字は點畫複雑なるからに、筆記の便をはかりて草體の文字を用ひ、やがて復字畫を省略し、遂に一種の簡易なる字體を作り出だすに至りしなり。平假名は又一に草假名とも呼べり。こは嵯峨天皇の頃僧空海が、いろは四十七文字の今様歌を作るに至りて字體始めて一定せるなり。然れども、此の二種の文字が文學上に實際の効果を現せしは醍醐天皇の御宇以後にあり。即ち、其の頃より全く假名のみを以て綴りたる文章をも見るに至りぬ。漢字を聲字として國語を寫したるに比すれば、當に一大進歩と謂ふべきなり。諷唱すべき歌謠が奈良時代の文學を支配し、筆記すべき散文が此の時代の文學を占領したる所以も、明瞭なるべくや。此の時代より我が國の文字は、永く漢字と共に、此の二種の假名を併せ用ふることゝなれり。

第二章 歌謠

第一節 歌界の概況

本期の初葉およそ七八十年間は、漢文學隆盛の時期にて、殊に嵯峨天皇の御宇などは大學なる學生等が科試にも専ら詩賦を以て及第仕官せしむる有様なりしかば、上下を擧げて詩を賦し漢文を屬する事のみ熾に行はれき。かくて、和歌繁榮の時代なりし奈良朝の餘響は全く尋ぬるすべなきまでに、歌といふもの衰へたり。蓋し、桓武天皇の頃には彼の『萬葉集』の編者の一人と算へられたる大伴家持を始として、其の集に載れる歌人の中には生存したるものも尙ほ在るべかりしに、其の歌の一も傳はらぬは、詩賦の流行に壓せられて世にまた歌の事を云ふもの無かりしに依るべし。かかれば、奈良時代の文學の精粹たる彼の『萬葉集』の如きも、空しく高閣に束ねられて蠹魚の住家となり果て、人の繙き見るものすら絶えて無かりき。然れども、反動の曙光は早く文徳清和の頃より現はれつゝ、和歌も一時詩賦の流行と拮抗の勢を呈せしが、漢文學の衰微につれて愈、復興の機運に會せり。此の機運に先驅せし俊秀なる歌人を、僧正遍照・文屋康秀・僧喜撰・小野小町・在原業平・大友黒主等と

す。是等の人々は、何れも『古今集』の序文中に載せられて、世に六歌仙と稱せらるゝものなり。宇多天皇の寛平の頃よりは此の機運益熟し、公卿宮媛の間には歌合と稱ふる歌會頻に行はれたり。是は歌人等相集りて題を設け思を構へて即吟し、其の作歌の詞藻を評隲して優劣を批判するものなり。されば、此の頃より詠歌の盛行したるは勿論なれど、かゝる遊戯的諷詠の行はるゝに従ひ、其の風調は景情に觸れて美感を歌ひし從來の歌謳に比して、いたく異様のものとなりぬ。

此の際、短歌獨り榮えて長歌衰ふるに至れり、蓋し即座に題を出して詠せんに、數十句を聯ぬる長歌は決して容易に作り得べきにあらねば、自然短歌をのみ詠み出でしがやがて習となりけるにや。詩賦に絶句の行はれしも亦間接の一因なるべし。仁明天皇の嘉祥二年三月興福寺の法師等が天皇の寶壽四十に満たせ給へるを賀して奉れる長歌の如き、奈良時代を距ること餘りに遠からずと雖も、『萬葉集』の比べては詞思共に甚だ劣りぬ。それより後なるは云ふに及ばず、稀に詠出したるものを見るに、姿情粗笨、詞をならべ句を續けたるところ一見長歌に似たりといはゞ云ふべけれども、寧ろ散文めきたり。また長歌の體、古昔は大方五音七音の句を聯ねたるを常としたりしに、此の時代の長歌は打見たるところのみは其の昔の形を存すれども、實際には七五の句調を帶ぶるが多くなりたり。

短歌はさすがに句を練り思を構へて巧を競ひたる程ありて、藝術としては一歩を進めたれど、古歌の雄渾眞摯なるには似て輕佻浮靡の風あり。其の句法の婉曲にして纖細なる、又は其の着想の複雑にして奇警なるものあるに引きかへ、眞率人を動かすの妙に乏し。これ美感中に動かざるに、強ひて詞を擇り句を尋ねて詠出したるに因らずんばあらず。さはれ、此の頃の歌にも、猶ほ往々古歌の想を傳へて眞率質樸なるものゝ見えたるは、勿論の事なり。

かくて、醍醐天皇の朝よりは和歌の極盛時代ともいふべく、名匠偉人數多現はれたり。紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀友則等は、其の最なるもの、伊勢、大江千里などは、た其の名を掲ぐるに足るものなり。折柄醍醐天皇は、夙に心を政治に用ひさせ給ひ、諸廢れたるを興こし給ひしが、和歌の道にも深く注意せられ、前の四人に仰せて『古今和歌集』を撰進せしめ給へり。これ勅撰歌集の濫觴にして、和歌奨勵の道はた是れより開けぬ。村上天皇の御代には和歌所を禁中の梨壺(昭陽舎)に設け、時の歌人大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等五人に勅して、『萬葉集』の訓點を附せしめ、また『後撰和歌集』を撰ばしめ給へり。その後、此の時代に勅撰歌集の撰進せられしもの、『拾遺』

『後拾遺』『金葉』『詞華』『千載』の五部あり。是等に鎌倉時代より室町時代にかけて出でたる十四種の撰集を併せて『二十一代集』といふ。此の外當代には私撰の歌集もまた尠からず。貫之の『新撰和歌集』藤原清輔の『續詞華集』藤原公任の『金玉集』能因法師の『玄々集』等殊に有名なり。また家々の歌集にては、業平・素性・躬恒・藤原敏行・貫之・伊勢・忠岑・能宣・元輔・紫式部・清少納言等の家集、今に存せり。

歌謠の流行するに従ひて、歌體も漸く多く、旋頭歌または連歌等當時代の初には往々物語若しくは草子類の中に散見するに過ぎざりしが、遂には勅撰の歌集にも掲載せらるゝに至れり。當時連歌は座興の頓作を旨とせしからに、吳漢の音をも俗語をも忌憚なく用ひたり。又今様の歌といふものも此の時代より見えしが、僧空海のいは、歌は蓋し此の種のものゝ始なるべしといふ。今様とは既に其の名目の標示する如く、姿も詞も古に泥まぬ當世風の歌といふ意にて、七音五音の句四節より成り、時俗の言語をも吳漢の音をも敢て嫌ふことなく、梵語をさへ其のまゝに混用したるもあり。其の他、神祇を祭る神樂歌あり、俗謠を唐樂の譜節(イ)に合せて謳へる催馬樂あり、詩賦に曲節を附して吟ずる(ロ)朗詠といふものもありき。但し、是等の中には純然たる(ハ)朗詠といふものもありき。但し、是等の中には純然たる

(イ)神樂歌については福守部の『神樂歌入綾』を見よ
(ロ)催馬樂については同『催馬樂入綾』を見よ
(ハ)朗詠については玄惠の和歌集註を見よ

歌謠の體を脱して歌曲に屬すべきものあり、現に催馬樂朗詠・今様等は當時總稱して郢曲とも又唱歌とも呼べり。

されば、此の時代には、普通の長短歌の如く専ら目に訴へて其の詞藻の巧を翫ぶものと、催馬樂朗詠今様などの如く吟誦して其の曲節を賞するものと、並び行はれたるなり。蓋し、催馬樂今様などは今日の所謂端唄都々一などいふと大差なきもの、今日の俗謠は是等のものに起因せしこと疑なし。其の題材には往々諷刺の意を寓せしものもあれど、大抵は男女の戀を歌ひて卑猥極まるものなり。就中、催馬樂最も甚し。故に、催馬樂は今日の俗謠とおなじく、多少當時の風俗などの想像せらるゝ外、毫も文學上の價値を認むること能はざるなり。

かくて此の頃和歌は益進みたるに似たれども、其の實末技に流れて名歌次第に減じ、大方巧緻細の風を以て最上のものなりと心得るに至りぬ。殊に此の時代の中頃より詠歌を教ふる書冊出で、各自門戸を立て、一定の方式を守株するに及びては、模型に従ひて作爲する外何事をも知らざる一種の機械的技術に過ぎざる有様となれり。藤原公任の『新撰髓腦』源俊賴の『山木髓腦』藤原基俊の『悦目抄』藤原清輔の『奥儀抄』『袋草紙』及び『和歌初學抄』等は、即ち此の種の書籍なり。若し是等の書にして

歌道の原理又は修辭の法などを秩序的に教ふるものならんには、さまでの弊害もなかるべかりしに、彼の言葉は忌むべし、此の句は用ふべからずなど、瑣々たる無用の詮索に詠歌の自由を奪ひしかば、遂に歌道の衰微を來す基とはなりたるなり。况や、當代の歌人は彫琢の一點には熱心なりしも、往々其の精神を忘れて一種の遊戯と心得たるが如き觀ありしをや。かの能因法師が「白河の關」の歌を詠みて事實と思はしめんが爲に、毎日顔を日に洒して旅せし様を装ひしが如き、又は侍賢門院の女房加賀といふものゝ「ふししば」の歌を詠みて、わざと操行を汚し、如き、豈に歌謠の精神を知るものゝ爲すべきわざならんや。既にかく其の精神を誤る、歌道の日を追うて衰頽に向ひしも偶然ならずと謂ふべし。

第一節 古今和歌集

歌の内容及び形式 『萬葉集』との比較 長歌 遊戯的歌謠

『古今和歌集』は醍醐天皇延喜五年四月に紀貫之を棟梁とし、紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等に仰せて撰ばしめ給ひたるものなり。此の集は『萬葉集』に入らざる古歌及び編者の自詠を網羅して、其の卷二十、春夏秋冬、賀、離別、羈旅、物名、戀、哀傷、雜長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所等の部門に分ち、歌の數は千百首に滿つ。年代の上よりいへば、淳仁天皇の天平寶字三年正月より延喜五年四月まで、大凡百五十年の間に亘る。但し、讀み人知らずといふ歌の中には、『萬葉集』時代の歌人なりしもありぬべし。さはれ、此の集は其の本領専ら當代の初期に存するを以て、和歌衰微の頃より再興の期に及べる時代の歌界を標致せるものと見るを可とす。即ち六歌仙の稱ある僧正遍照、在原業平、文房、康秀、喜撰法師、大友黒主、小野小町等は孰れも暗黒なる歌界に曙光を放てりしもの、在原行平、素性法師等はた然り。藤原敏行、紀友則、凡河内躬恒、大江千里、清原深養父、伊勢等相つぎては、歌界いよゝ明かに、紀貫之、壬生忠岑出で、は日まささに中天に昇りしにも喩へつべし。是等を此の集に見えたる歌人の主なるものとす。

此の集の中には漢學佛教の影響を受けて、其の感想を表露せしもの少からず。これ當代文學の大勢を知れるもの、夙に豫想せしことならん。蓋し是等の影響は早く奈良朝の歌謠にも見るべかりしが、當代の人心が漢學佛教の感化を受けしことは前代の比にあらざれば、其の反映の著く現せしことは問はずとも明かなるべければなり。たゞ茲に注意すべきは、『萬葉集』にありては是等の佛教思想を詠せしもの大方直譯めきて露骨なるを免かれざりしに、此の集にありては能く其の意を翻して斧鑿の跡を留めざること是れなり。即ち紀友則櫻の花の下にて年の老いぬることを歎きてよめる歌に、

色も香もおなじ音にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

と詠せるは、宋之門が「有所思」と題せる古詩の中に、年々歳々花相似、歳々年々人不同といへる句を翻したる想にあらずや。また、或人の詠める、寛平の御時后の宮の歌合の歌に、

雪降りて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

といへるは、『論語』なる「子罕」編に「歳寒然後知松柏之後凋」とあるを翻案してよめるにあらずや。これ、一にはかゝる思想の漸く我が人心に渾和融合せるに基き、また一には措辭の法一段の巧を加へたるにもよるべし。若し夫れ『萬葉集』をして異彩あらしめたる敬神忠君の念の如き、此の集にてはやゝ形式的に流れたる觀ありといへども、其の鬱勃たる氣概は猶ほ尋ぬべし。されど、此の集は既に部門の立て方にも、さては四季の詠並びに戀歌の多數を占めたるにても知らるる如く、雪月花の自然美を歌へるもの、又は男女相思の情を抒へたるもの格別多し。而して是等自然美を歌へるもの、多數は歡樂の調を帶ぶるものから、花を見て人生の果敢なきを歎ち、月を見て無常の感を寄するが如きもの、前代に比して一層加はりたり。これまた佛教思想の影響なるべし。

うつ蟬の世にも似たるか櫻花咲くと見しまにかつ散りにけり。

花の開落迅速なるを人生の榮枯不定なるに比して咏嘆せるなり。

やよやまで山時鳥ことづてんわれ世の中に住みわびぬとよ。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど。

前なるは山時鳥に、後なるは月に、孰れも人生の果敢なき由を寄せたるなり。かゝる例なほいと多し。されば、離別・羈旅・戀・哀傷等の歌に悲感を歌へるものゝ多きことは、殊更に云ふを要せじ。是はもとよりかゝる歌の本來の性質としてさるべき傾向の

ありぬべきことなれど、當代の人心既に孱弱浮靡に流れしこと主なる因由なり。着想は純ら題を設けて思を凝らし意を練るが多かりしかば、『萬葉集』時代の實際に見聞せる事情につきて起れる美感を歌へるとは趣異なり、一層緻密複雑となりぬ。されば、歌體も隨うて質實率直なりしは、纖細巧緻となりし觀あり。就中、贈答の歌又は歌合の詠にありては對者を翻弄せんとする希望より、奇巧なるもの多く、中には詩的感想を離れて一片の理窟に走れるものも見えたり。歌語は前にもいへる如く、此の時代の言語の既に優美艶麗に赴きしに剩へ俗を避けて雅を選ばんと努めしからに、いよ／＼華麗なり。但し、猶ほ此の時代には平生の俗語もそのまゝに直に歌語たるを得たりしことを忘るべからず、即ち雅言と俗語との懸隔差異はさまでに甚しからざりしなり。

要するに、此の集の歌は『萬葉集』のに比べては、其の詞も姿も優美に傾き、雄渾壯絶の氣力は著く減少せり。賀茂眞淵、歌體の變遷を評して云ひけらく、「大和は男子の國にして、山城は女子の國なり、遷都の、ちは丈夫の雄々しき手ぶりは失せて、手弱女のめゝしき姿とぞなれりける」と。蓋し至言なり。

長歌の此の時代に至りて甚しく衰微したることは、前に述べたるが如し。部門に

長歌の一項を設けたるにても早く既に其の數の僅少なるべきは推測せらるれど、長歌の此の集に載れるもの實に五首あるのみ、而も其の想といひ調といひ、到底『萬葉集』のに比すべくもあらず。案するに、此の想の下れるは常に短歌の作にのみ馴れたる身の、たま／＼長歌をものせんとするに當り、早く其の感想の缺乏を告ぐることもありしを、強ひて長からしめんとしたる結果にてもあるべし。されば、稀には面白き着想の散見せざるにあらねども、苦作の痕跡歴然として平語めきたる所多きによりても推測せらる。例へば、かの壬生忠岑の如きは此の集中にても優れたる歌人なりしに拘はらず、其のふる歌に加へて奉れる長歌などを見るに、幾何の詩的感想をも有せざるなり。全編九十一句、唯、縁語と冠辭とを配合して平凡なる事實を布陳したるに過ぎず。調も『萬葉集』のと異なりて、七五音若しくは、七五音の亂調となれり。蓋し、此の亂調は七五音を聯ぬる古調の自然に七五音を聯ぬる今、様、風、に變移し行く過渡にある故なるべければ、強ひて非難すべきにはあらざめれど、七五音の長歌體に配列せしものが、調の上にも想の上にも斯かる亂雜となり行きしは、特に注意しおくべき必要あり、後世古調の長歌全く廢れて、今様歌の七五の新調のみとなりぬべき前兆は、早く此に見えそめたりと謂ふべし。

長歌はかく見るかげもなき有様となりしかども、短歌に至りては措辭の巧妙なると着想の複雑なるとよりして、或は『萬葉集』の歌に優れたるもあり。『古今集』の短歌は文に過ぎず質に偏せず花實を兼備せるものなりとは、古來學者の唱道せる所能く當れり。されば、此の集の獨特の長所はいづくにありやと問はば、短歌にありと答へんのみ。後世撰集の數は二十に餘れども、歌を詠するもの、大抵其の模範を此の集に取れりしも理なるかな。

されども、歌謠の遊戯的となるべき傾向の、此の集には、ほの見えたるは、大に歎すべき事なり。歌謠の遊戯的傾向とは、何ぞ。短歌は誰れも知る如く、僅々三十一音に過ぎざるにかゝる中に、或種の事柄若しくは文字を詠み入れて、其の巧に誇らんとする兆あること是れたり。貫之が朱雀院の女郎花あはせの時に、をみなへしといふ五文字を句のかしらに置きて詠める、

を倉山みねたちならしなく鹿のへにけん秋をしる人ぞなき

又、紀のめのとがさゝまつびはばせをばの名をかくして、

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見られつゝ

又、僧正聖賢が「はをははじめ、るをはにてながめをかけて、時の歌よめと人のいひけれ

ばよめる」

はなのなかめにあくやとて分け行ば心ぞともに散りぬべらなる

此の集の「物名」と題する一部門はすべて此の稱の歌をもて満てるものなるが、右は其の重なるものなり。これ短歌が強ひて三十一音に局在せんとする時は、其の中に着想の變化を求めんこと自ら難かるべければ、終に其の巧を修辭の邊に求めたるなり。故は、是等の歌は歌謠を單に一種の藝術としてのみ見んには、其の巧妙稱すべきものあるべしと雖も、其の語意を害すること決して少からず。歌の本義を去ること、又更に遠しと謂ふべきなり。予輩が先に是等の歌を指して遊戯的となるべき傾向見えたりと云ひしも此の故なり。

第三節 『古今集』中重要なる歌人

在原業平 小野小町 僧正遍照 凡河内躬恒

伊勢 紀貫之

『古今集』に其の名を列ねたる歌人の数は甚だ多し。予輩は其の中に就きて、特に當代の歌界を代表するに足るべき重要なる歌人のみを探りて略評を加へんとす。重要なる歌人とは誰々なるぞ。之を前にしては在原業平小野小町僧正遍照等、之を後にしては凡河内躬恒伊勢紀貫之等なり。

業平は平城天皇の皇子阿保親王の第五子にて、母は桓武天皇の皇女伊登内親王なりき。當時藤原氏の驕慢甚しかりしかば、業平之を憂憤する餘り、壯時は操行稍放逸に流れしが、其の中にも常に王室の式微を憂ふる念と藤原氏の跋扈を惡む心とは、絶えず胸中に往來したりしが如し。さればにや、其の歌にも、二様の方面を具へて、優婉妖冶なる、と悲憤激切なるあり。されども、概しては優婉にして、壯絶の感に乏し。餘韻の深きは、彼の歌の常のさまなれども、殊に纏綿たる情思を歌へるものには、更に一段巧妙なるもの多し例へば、

五條の後の宮の西の對に住みける人に、ほいにはあらでものいひ渡りけるを、睦月の十日あまりになん外へ隠れにける。ありとろ在所は聞きけれど、え物

もいはで、又の年の春梅の花ざかりに、月の面白かりける夜、去年を戀ひて彼の西の對にいきて、月の傾くまであばらなる板敷にふせりてよめる。月やあらぬ春や昔の春ならぬ、我が身ひとつは元の身にしてといへる、餘韻深きを示すに餘りある歌ならずや。

渚の院にて櫻を見てよめる。

世の中に絶えて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし

二條の後の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉

流れたるかたを書けりけるを題にてよめる。

ちはやふる神代もきかず龍田川からくれないに水くるとは

これ皆かれの歌の最も上乘なるものなるが、表面に見えたるよりも言外に深き意味を含みて、詩趣の盡きざる觀あり。加之、聲調もまた能く其の質に合ひて流麗なり。紀貫之はいふ、業平の歌は意餘りありて詞足らずと。修辭の能技に富まざるもの、豈

（三）業平は淳仁天皇の天長二年四月一日奈良の舊都に生る。天長三年に父親王の奏請によりて、兄の行平と共に在原朝臣の姓を賜はり、人臣に列す。仕官して終に右近衛權中將となりしかば、世に在五中將と稱べり。元慶四年五月行年六十六歳にて逝けり。

にかくばかり言外に餘韻を持たせて而も流麗なるを得んや。然れども、業平の歌はその短處もまた此の餘韻深き邊に存するを見る。詠歌せる事情を知悉してのち、迎へて解するにあらずば、其の歌の本旨を會得しがたきものある事即ち是れなり。これ、我が短歌の大方通有する缺點なりと雖も、業平の歌の如きは格別甚しきものなり。かれの歌の往々纖巧に失し浮靡に流れたる觀あるも、亦一の弊ならん。かれの歌には元來自然を詠せるにも、人事を歌へるにも、同情の感を抒べたるもの多きにも拘はらず、かゝる弊を免かれざりしは、道念堅固ならず、情操はた高潔ならざりし當代の影響を享けたるに由るものか。然り、浮靡纖巧は當代を風靡したる情弊なり。業平の詠の其の風を帯びたるは、畢竟時代精神の反映敢て異とするに足らざるなり。其の頃の有名なりし小野、小町の歌の如きは、更に纖弱優婉の姿を帯び、想はた艶沃浮靡の致を具ふ。小町歌ひけらく

題しらす

いろ見えてうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける

文屋康秀が三河の掾になりて縣見にはえ出で立たじやと云

ひやりける返事に詠める

わびぬれば身の浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞあもふ

題しらす

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

右は僅に一斑を示したるに過ぎざれども、詞藻の優婉なる事想像せらるべし、小町の歌が優婉の態孺々として、よき女の惱める所あるに似たりしこと、一には、つよからぬ女の歌なればにやあらん。されども、女性の詠すら猶ほ一般に率直雄大の風を帯べりし奈良時代のに比して、相異の度如何に著しとするぞ。かの時代において、其の末葉にありては、既に稍、當代の特質を離れて纖巧なるもの稀に見えきと雖も、是等に比較すれば其の間一大溝渠を越えたる感あり。

遍照の歌は佛門に歸しての後は勿論、在俗の頃にても、何處ともなく瀟洒の風ありて、業平、小町等の婉約なりしに似るべうもなし。かの『小倉百人一首』に載りて誰れも知れる。

(一) 遍照は長峰安世の子、嵯峨天皇の弘安六年に生る。俗名を宗貞といへり。夙に仁明天皇の殊遇を蒙り、諸官を経て承和十三年に備前介兼左近衛少將に進みぬ。嘉祥三年天皇の崩御を歎く之餘り、比叡山に登りて僧となれり。後元慶寺の座主となる。宇多天皇の寛平二年に歿せり。

五節の舞姫を見てよめる。

あまつ風雲のかよひち吹きとちよ少女のすがたしはしとやめん
といへるは、殿上の節會に窈窕たる舞姫の姿容を嘆美せるものなれども、其れさへ洒
々たる高潔の念あるのみ。其の他も概してかゝる傾向を有せり。さるに、こは當代
の浮靡濃厚なる風と反せるを以て、讀者の見方によりては、或は貫之の云へる如く「ま
こと少し」とも思はるゝことあらん。剃髮後の歌には、殊に當時に於ては珍らしきま
で流俗を離れたるものあり。

題しらす

末の露もとのしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらん
蓮の露を見てよめる

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

其の詠概む此の如し。措辭に至りては、さすがの遍照も亦當代の風をば脱離するこ
とを得ざりけん、纖巧なるさましたるも稀に見えたり。

又、是等の人々と殆ど時を同じうして世に出でたる歌人の詠にも、賞すべきもの少
からず。

題しらす

在原行平

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

三條の東宮の御息所ときこえける時、正月三日御前に召して仰せこ

とある間に、日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるを詠ませたま

ひける

文屋康秀

春の日のひかりに當るわれなれどかしろの雪となるぞわびしき

題しらす

大伴黒主

はる雨の降るは涙かさくら花ちるを惜まぬ人しなれば

是等は最も高名なる歌人の傑作ともいふべきものなり。詠者異なるに隨ひて多
少其の風姿を異にすといへども、わざ／＼論述すべき程にあらず、且つ上に品評した
る三家に比しても、さまでの特調を認むる能はず。想の上にては、通常歌人が口にす
べしと思はるゝかぎりを抒べたるに過ぎざれば、是れはた兎角云ふに及ばざるべし。
然るに、寛平延喜の前後に輩出したる歌人に至りては、稍、獨特の妙處を有せりしも
のもありき。例へば、藤原敏行の歌が雅びたる想の中に一種の趣味を具へたるは、
是貞の親王の家の歌合によめる。

白露の色はひとつを如何にして秋の木の葉を千々に染むらん
何人かきてぬぎかけし藤ばかりかま來る秋ごとに野邊を匂はず
等の歌にても著く、素性法師が熱誠物に感じ易き狀は、

櫻の花の散り侍りけるを見て、

花ちらす風のやどりは誰れか知るわれに教へよ行きて恨みん

題しらす

はかなくも夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける
等にて知るべし。また紀友則が歌の雅趣妙想に富めるは、

櫻の花の散るを詠める

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらん

雪の降れるを見てよめる、

雪降れば木ごとに花ぞ咲きにける何れを梅とわきて折らまし

等にて推測するを得ん。なほ、此に漏れたる歌人にしても、大方はこれらに類せざる
ものなし。其の中に就きて稍、異彩を發てりしものを、凡河内躬恒伊勢紀貫之等とす。

躬恒の詠には想像を以てしたるものよりも、寧ろ見聞し（一）躬恒は父祖も生死年月

たる景情に其の折りごとの感を添へたるもの多し。故に
稀には一見詩致に乏しき觀あるものなきにあらず、而も其
の中に一種の重みありて、諷唱の際何となき妙味を覺えし
む。これ一には聲調の能く整ひたるに因るべしと雖も、情
熱の言裡に籠りたるぞ猶一段此の妙あらしむる所以なる
べし。

も詳かならず。寛平六年二月甲斐權小目となり、延喜二十一年正月和泉權藤となり、次で大椽となり、從六位を授けられたり。「文學者年表」に生死の年を一五九—一五六七とあれども、今は採らず。

題しらす

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

櫻の花の咲けりけるを見に詣うで來たりける人によみて贈りける、

わが宿の花見がてらに來る人は散りなんのちぞ戀しかるべき

孰れも、一首の中に表はされたる感想は簡單なるものなるに、業平等の詠歌の意味複雑なるよりも却りて感深き心地す。彼方は意味複雑なれども奇巧に失するがために人を動かす力に乏しく、此方は感想簡單なれども自然なるからに同情を惹き易きならん。單に山川草木等を見たるながらに詠せる歌にも、また、
月夜に梅の花を折りてと人のいひければ、折るとてよめる、

月夜にはそれとも見えす梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

白菊の花を見て詠める、

心あてに折らばやをらん初しものおきまどはせる白菊の花
等韵致に富むもの、其の例いと多かり。その他措辭の上に奇巧を構へて縁語を亂用
せる、又は想の邊に諧謔を旨とせる俳諧歌の如きものもなきにあらざれども、そはか
れの長所にあらず。要するに、躬恒の歌は大體につきていは、事情を率直に抒べて
かあるものと謂ふべきなり。

伊勢の作に至りては、少しく之と異なる所あり。その歌押しなべて情を以て優れ
り、躬恒に比べて華麗の風あるは流石に女性なればにやあらん。

水の邊に梅の花の咲けりけるを詠める、

春ごとに流るゝ川を花と見て

折られぬ水に袖やぬれなん

題しらす

あひあひて物おもふ頃の我が袖に

やどる月さへぬるゝ顔なる

(イ) 伊勢は伊勢守藤原繼隆の女なり。生年月今は知られず。光孝天皇の仁和の頃既に宮中に奉仕したりしが、後、宇多天皇に召されて皇子を生み奉りぬ。是れより世人尊びて伊勢の御または伊勢の御息所とも呼べり。晩年は零落して、天慶二年に逝れり。

年漸く老境に近づき、其の身また昔の榮花を夢みる頃となりては、其の聲調次第に悲哀の分子を交ふるに至りぬ。例せば、

家を賣りて詠める、

あすか川淵にはあらぬ我が宿も瀬にかはり行くものにぞありける

といへるは現世に於ける無常の感を歌へるもの、又、

女郎花を折りて硯の上に置きけるを見て、

女郎花見るに心はなぐさまでいとむかしの春ぞ戀ひしき

と詠せるは、今の境遇の見るかげなきを悲しむ餘り、疇昔の榮花を追慕せるにや。それ佛説的哀感を歌へるは殆ど當代の歌人の常にして、只一時の失望若しくは落膽の場合にも絶叫悲泣することありきと雖も、伊勢が晩年の境遇には心から斯く感せしめたる事情もありけんかし。其の一代の詠歌を通觀すれば、さながら嬋妍たる美女の年老ゆるに隨ひて色のうつろひ行くらんさまにも似たりけり。歌の姿は勿論、心さへ何時とはなしにさびれつゝ、活氣次第に失せて沈重の風その跡を襲ひぬ。さて歌の姿は言詞よく整ひて苦作の跡、奇巧の癖もなく、いは、新柳の風に翻るが如く、意暢び素直にして、多少華かなる所あるは此の人の特長なるべし。

されば、躬恒を以て伊勢に比するに、彼れと此れとの差異は、句の力あると力なきと姿の稍、質なると稍、文なると之れあるのみ、而も、是は兩端の極をとりて比したる見にして、多數の歌の中には全く此の反對なるものありぬべし。若しそれ、想の情熱に富みて浮靡に流れざるは、二人ともに同じく、寧ろ業平、小町等と異なる所なり。其の頃能く是等の長所を兼備して、優に當時の騷壇に將星の名を得たるを紀貫之とす。

貫之の歌は『古今集』に載れる者百首あり、特に勅命を蒙りて編入したるもの、よし其の他『後撰』以下の歌集にも許多あり。別に『貫之家集』と名づくるもの、自家全躰の詠を蒐録す、即ち上の諸集に見えたるは勿論、なほ他の數百首を網羅せり。『古今集』に出でたる歌は自撰に係るを以て、秀逸なる者の多かるは云ふまでもあらず。古來謂ふ、貫之は人麿以來の和歌の名人なりと現に藤原公任の撰なる『三十六人歌合』にも、歌仙中人麿に對して左の第一位を占むるは貫之なり。貫之は洵にさる名人なりしか。予輩は先に躬恒の歌に就きて、彼れの歌は想像よりも寧ろ實情を寫せるからに、一見詩致に乏しき觀あれども、抑しなべて熱情に富むを以て人を感動せしむる妙ありと云ひき。貫之の歌も實情を寫せる、又は熱情に富めることは、躬恒に異なるとなし、只、想像の一點は稍かれに優れるものありしが如し。さはれ、其の詠全體に就きていは、想像の豊富を以てよりも、猶ほ實情を抒べたる邊に於て勝れたりと謂ふべし。かるが故に貫之の歌は自然の風光又は人事に對して同情を表せるもの多し。貫之が其の同情を表するや、躬恒が常に直覺を以てするものも、此方にては考察によりてする傾向あり、隨つて其の弊は時に理に奔らんとする所あるを免れず。例へば、

富むを以て人を感動せしむる妙ありと云ひき。貫之の歌も實情を寫せる、又は熱情に富めることは、躬恒に異なるとなし、只、想像の一點は稍かれに優れるものありしが如し。さはれ、其の詠全體に就きていは、想像の豊富を以てよりも、猶ほ實情を抒べたる邊に於て勝れたりと謂ふべし。かるが故に貫之の歌は自然の風光又は人事に對して同情を表せるもの多し。貫之が其の同情を表するや、躬恒が常に直覺を以てするものも、此方にては考察によりてする傾向あり、隨つて其の弊は時に理に奔らんとする所あるを免れず。例へば、

紀友則がみまかりにける時よめる、

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬまの今日は人こそ悲しかりけれ

の如きげに人の真情なり、實感なり、即ち何人も他人の死を見ては、明日知らぬ我が身と思へども悲歎の涙に暮るゝこと常なり。かく、貫之の歌は實際の感想を其のまゝに詠嘆するものなれば、真情の充溢することは勿論なれども、多少其の中には又理窟めきたる所なきにあらず。更に、理窟めきたりと思はるゝは、

亭子院の歌合に

櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

といへる如きは是れなり。予輩は實に爛漫たる櫻花の開落を見ては、雪と思ひ雲とまがふ事あり、貫之の歌も即ち櫻花を雪と見立てたる想像より發せし詠なれども、雪と木の下風の寒からぬよしを配合せる間には理窟めきたる感あるにあらずや。是を以て貫之の詠には想像を主とせるものにも、亦多くは、

延喜の御時歌合しける、

春かすみ棚引きにけりひさ方の月のかつらも花や咲くらん

歌奉れと仰せられし時によりて奉れる、

櫻花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆる白雲

などの如く、多少の理窟を包藏せざるものなし。されば、其の想像の荒唐感情の愚痴に陥ることの少きも、おのづからなる結果なるべし。さもあらばあれ、予輩は貫之の歌を以て詩致に乏しきものとなすにあらず。彼の流麗和諧せる詞藻の妙は、自然諷唱の中に趣味を覺えしめ、彼の眞率なる實情は常に誦者の同感を誘ひて不識の間に其の詩致を認めしむ。况や、彼れの歌は其の格調變化自在なるものあるに於てをや。

八月駒迎

逢坂の關の清水にかけ見えて今や引くらんもち月の駒

の如きは、優美なる中に雄渾なる意氣の見えたる、さながら勇士が緋緘の鎧着て櫻花の下に佇むにも似たり之を大貳高遠が、

あふ坂の關の岩かど踏みならし山立ちいづる霧原の駒

といへるが名歌なるには相違なきも、東夷の膝節叩いて怒れる如き雄壯一邊なるさまに比して、變化の妙更に幾何ぞ。想ふに、格調の流麗にして變化に富むは彼れが後世の嘆美を博せし一因にあらざるか。又、彼れの歌には一氣呵成の作と思はるゝは、尠く、苦意刻思の餘りに成れりと見ゆるが多し。其の詠歌の往々理窟に偏せんとするは此の故にや、而も其の詞藻の巧妙なる、能く苦作の痕跡を蔽うて見えしむることなし。

其の歌の人心を惹くに足ること右の如し。しかれども、一層世人をして景慕せしめし所以は、彼の『古今集』を撰せしことと其の序に於ける歌論となり。古今集は勿論醍醐天皇の勅慮に出で、且つ貫之一人の撰にあらずと雖も、予輩は彼れの功に重きを置かずばあらず。『萬葉集』出で、百餘年、歌道將に廢れんとするに臨み、銳意此の擧に従ひつる熱心賞すべきものならずや。その歌論は永く歌界に範を示して、後世殆ど其の範を出づるものなきまでに重んぜられしにても、景慕せられし程を知るべきな

『古今集』の外、貫之の著作せる書に『新撰和歌集』『土佐日記』等あり。『新撰和歌集』は醍醐天皇の勅を受けて撰修せるものなりしが、書成りて未だ進めざるに天皇崩せられしかば、其のまゝ留め置きしもの、『土佐日記』は貫之が土佐守の任満ちて京に歸れる時の紀行なり。

第四節 『古今集』以後歴代の勅撰歌集

各集の撰者 各集の歌思及び歌體 比較評

『古今集』の撰進せられて後四十六年を経て、村上天皇の天曆五年十月に至り、新に成れる歌集を『後撰和歌集』といふ。村上天皇が源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城等五人を禁中の梨壺(昭陽舎)に召されて、『萬葉集』の訓點を考覈せしめ給ひし序に撰ばしめ給ひたるなり。此の集は主として『古今』以後の歌を載するものから、猶ほ上代に溯りて古歌を探れるもあり。卷の數は二十部門の類別大方『古今集』におなじ、唯、異なるは物名長歌・旋頭歌・併諧歌・大歌所等の數項を缺けると戀歌の著く多くなれるとがあるのみ。此の集以下の撰集はた是等と大同小異なり。集中の主なる歌人は『古今集』に見えたる人々の外、其の名を擧げて云ふべき程のもの殆どなし。

此の集は歌の姿よりも心を先とせる趣あり。故に、其の歌『古今集』の風姿風情共に兼ね備はれるに比しては劣れること論なし。鴨長明の『無名抄』に曰く『古今』の時、花實共に備はりて其のさままぢくに分かれたり、『後撰』には宜しき歌『古今』に取りつゝされて後幾程も經ざりければ、歌得がたくて姿を擇ばずして心を先とせりと。又阿佛尼が『夜の鶴』にも『後撰』にはやさしき歌多く、又みだりかはしき歌も多く交りたり、梨

壺の五人心々やかはりけんといへり。實に此の歌集の杜撰なるは戀若しくは雜の歌と見ゆるが四季の中に入りたる、さては詠者をさへ違へたるなどを見て知るべし。然れども、かく杜撰なる中にも豈に多少の名歌なしとせんや。若し此の集の或歌を擇び出で、『古今集』のに比べんに、如何でさばかり劣るべき。詞姿聲調にこそ惡しき點もあれ、大方真情流露の趣なくばあらず。

源 信 明

月のおもしろかりける夜花を見て、

八月十五夜

藤 原 雅 正

いつとても月見ぬ秋はなきものをわきて今宵の珍らしきかな

人の許より歸りて遣はしける、
貫 之

あかつきのなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

かへし
讀人しらす

おきて行く人の心をしら露のわれこそ先づはおもひきえぬれ

『後撰和歌集』はかくの如く姿よりも心のまさりたる歌多きが故に韻致あるものなきにあらざると雖も、次に成りたる『拾遺和歌集』は全く之に反して、大方意義明白に、文字の上に露はれいで搖曳の致を缺けり。されども、『拾遺集』の歌は必ずしも『後撰』に劣れりといふべからず、彼れに一長あれば是れにも一得あり、彼れの韻致あるは其れの流麗なるを以て償ふべく、此の韻致乏しきは彼の風姿あしきに對すべし。『古今集』に比べて風姿風情の及ばざる所多きは、二集共におなじ。

『拾遺集』は一條天皇の長徳年中大納言藤原公任の撰せりとも、或は花山上皇の御撰なりともいへり。此の集の撰ばれしは『後撰集』よりまだ幾程も經ざりしかば、其撰擇精しからず、玉石混淆の趣ありて、而も『萬葉集』の歌を讀みあやまり、古歌の詠者を違へしなど『後撰』にもまして枚擧すべからず。此の集に載せられたる歌の評は略、前に其の大要を述べたれども、尙ほ數首を掲げて参考とせん。

冷泉院御屏風の繪に、梅の花ある家に客來たる所、

平 兼 盛

わがやどの梅の立ち枝や見えつらむ思ひの外に君の來ませる

屏風に、八月十五夜池ある家に人遊びたる所、
源 順

水の面にてる月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける

題しらす
大 中 臣 能 宣

紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋をきゝわたるらん

清慎公五十の賀し侍りける時の屏風の歌 元

輔

一四四

青柳のみどりの絲をくりかへしいくらばかりの春を經ぬらん

『古今』後撰』の二集に、此の『拾遺集』を加へて之を『三代和歌集』といふ、後世歌を詠むもの以て重寶とす。おもふに、文質兼備せる『古今集』は勿論、質を以て優れる『後撰集』、文によりて名高き『拾遺集』は、孰れも一の特長を有せるからに、歌體の變遷ありしのみならず、永き世の模範となりけるにこそ。『後撰』と『拾遺』とは世を隔つること凡そ四十年、此の集に載れる歌人は、『古今』後撰』に見えたるものゝ外、重なるは、『後撰』の撰者と赤染衛門等數人に過ぎず。

『後拾遺集』は白河天皇の應德三年九月藤原通俊の撰進せしもの、『拾遺集』に後るゝこと十餘年なり。撰者通俊は小野宮左大臣實賴の末裔にして、從二位權中納言治部卿たり。かれ全く歌道の心得なき人にはあらざりしかども、當時源經信とて殊の外名人の聞えあるを措きて此の集を撰びしかば、世の誹謗は人の上のみならず、集の上にも及びけりとぞ。

『後拾遺』撰進せられてのち四十年にして、『金葉和歌集』の撰あり。崇德天皇の天治元年、白河法皇の院宣を以て、源俊賴一人にて撰せるものなり。俊賴勅命を承りて三度稿を更へ、始めて裁可を得たりき。此の時草案のまゝにて先づ試奉せしに、太く叡慮に合ひて其のまゝに留めおかれしかば、今世間に流布するは第二回目の稿本なりといふ。

それより又二十年ばかりを経て、近衛天皇の仁平年中、藤原顯輔、『詞花集』を奉りぬ。顯輔、天養二年崇德院御讓位の後勅を承りて撰録に従事せしが、此の年始めて成りて奏上せるなり。

『千載和歌集』は、又それより四十二年を経て、後鳥羽天皇文治二年、藤原俊成、後白河法皇の院宣に由りて撰び奉りぬ。此の集は後拾遺集に撰び残されたる歌、上は一條天皇の御宇正暦の頃より、下文治に至るまで、大凡二百年間の歌を網羅せり。

さて、此等の歌集は孰れも前に出でたる歌集を模範として作られたれども、其の歌の風は次第に古調を離れて纖細卑俗に陥り、自然に遠ざかりて人工漸く加はりぬ。その中に、『後拾遺集』に載せたる歌人に、大中臣能宣、源順、清原元輔等を始めとして、藤原公任、源經信、藤原範長、能因、良選の二法師、さては赤染衛門、紫式部、和泉式部、清少納言、相模、大貳三位等の名人許多あれば、隨うて秀逸なる歌なきにあらず。されど、撰者の識

見の低かりしと、時俗の然らしめたるによりて、其の歌流麗快暢の資あるには似て、幽玄の趣乏しく軽浮なるもの多し。例へば、

早苗をよめる

曾根好忠

みたやもり今日はさ月になりにけりいそげやさ苗老いも社すれ

宇治前太政大臣家に三十講の後歌合しけるに、五月雨をよめる

相摸

五月雨はみずのみ牧のま菰草苅りほすひまもあらしとぞおもふ

能因法師

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶うすしといへどあつくぞありける

の如きは其の好例となすに足る。されば當時の人も、之を後拾遺體と呼びて排斥せりといふ。

『金葉』、『詞花』の二集は、後拾遺體の卑俗淺近を嫌ひ、稍清新の趣は見ゆれども、猶全く織巧の風を脱すること能はず、只管其の詞姿の面白からんを求めしからに、其の調の俳諧歌めきたるも見ゆめり。例へば、

待郭公といへる事をよませ給へる

院崇御製

郭公まつにかゝりてあかすかな藤の花とや人は見るらん

郁芳門院根合にあやめを詠める

藤原孝善

菖蒲草ひく手もたゆく長き根のいかであさかの沼に生ひけん

京極前太政大臣家の歌合によめる

源頼綱

秋の夜の月に心のひまぞなき出づるをまつと入るを惜むと

の如し、巧に縁語を用ひ句を列ねたるも、中に真情の籠ることなきを以て、其の云ふところ或は軽浮に流れて諧謔の聲とも聞かるべく、或は談理の語とも思はるべし。且

つたまゝ見ゆる想像の如きも散漫若しくは荒唐なり。さもあらばあれ、『金葉』、『詞花』の二集は必ずしも悉くかゝる軽浮若しくは滑稽なるものゝみならず、中には

新院の御前にて花契還年といへる事をよめる 藤原顯輔

萬代に見るべき花の色なれど今日のにはひをいつか忘れん

水邊納涼といへることを 藤原家經

風吹けば川邊すゞしくよる波の立ちかへるべき心地こそせね

月のあかゝりける夜まうで來たりける男のたちながら
かへりにければ朝にいひ遣しける 和泉式部

泪さへいでにし方をながめつゝ心にもあらぬ月を見しかな
の如き熱あり涙あるもの、さては眞率掬すべきもの、自然の景致を繪の如く描寫して
神韻の縹緲たるも見えたり。

『千載集』の歌にありては大方『金葉』『詞花』の弊を去つて新古の風調融合せる所あ
るに似たり。此の集の撰者藤原俊成はさすがに斯道の達
人なりければ、自然歌謡の上にも一個の見識を有し、隨ひて
歌集の撰進にも意を用ひしかば、所撰の歌どもも風姿風情共に多少前の二集に比し
て優る所あるなり。但し、風姿風情何が重かるといは、勿論質よりも文の方に心を
用ひたりとおぼしくて、押しなべては風姿優りたり。風姿は優美なるをもて佳なる
ものとしたるが如し。

堀河院の御時、百首歌奉りける時、早蕨を
藤原基俊

みやま木のかげの、下の下わらびもえいづれども知る人もなし

加茂の歌合に、花の歌とて
藤原公衡

花ざかり四方の山べにあくがれて春はこゝろの身にそはぬかな

三月つごもり
式子内親王

ながむれば思ひやるべき方ぞなき春のかぎりの夕ぐれの空

かく、此の集は姿を重んじたる風あり、而も『後拾遺』の姿のみ美しく、其の實の卑俗
なるとは異なり、優美なる姿の中にも餘情綿々として雅致深邃なる趣を具ふ。更に
此の集を以て『古今集』以後の歌集に比較せんに、『後撰』の質に富みて文に貧しき、『拾遺』の
華に過ぎて實に乏しき、又は『後拾遺』の卑俗なる、『金葉』『詞花』二集の稍、清新の調あるも
のから輕浮なるを免れざる、共に一長一短ありと雖も、此の集の文質、其の中を得たる
に、近きとは比すべくもあらず。古來、此の集の歌體を以て、『古今集』の歌の細くなれる
姿して、後拾遺の風に少しく實の添はらんと趣ありと云ひけんも宜なり。前の諸
集は『萬葉』『古今』を距る遠からぬ時代の歌人を列ぬる事多ければ、其の中には名歌も
見え、たれど全體より見渡せば、撰擇粗漏にして、批難多かるに、此の集には、非常に秀で
たる名歌少きかはりに、全篇能く整ひて、甚しく粗笨なるものなし。

予輩は是まで歴代の勅撰歌集を評論するにつきて、想の上よりも重に風體の邊に
筆を着けたりき。これ一に我が歌謡が風體の變遷に比しては、其の内容大方『古今』以
後殆ど不變の状態にありしを以て再説するの必要なかりしなり。我が歴代の歌人
が主として歌へりし題目、例へば、月花のあはれをいひ、男女の相思、ふ心を抒べ、身を歎

き、人を悲むなどの類は、『古今集』以來不變の感想なれば、之を反覆せんは無用の辯なりと思惟したればなり。花鳥風月さては戀愛をのみ唯一の主題とし、只其の内に踟躇し、如何にせば是等の主題につきて、是等の感想を巧に抒べ得べきかと、修辭の點にばかり心を注ぎたる歌人に對して、其の感想の如何を評論する必要あるべしや。

第五節 『古今集』以後の重要な歌人

藤原公任 源俊賴 藤原俊成

『古今集』以後歴代の歌集に其の名を列ねたる歌人にして、特に其の名を擧げて史上に録すべきは、大中臣能宣、源順、清原元輔、曾根好忠、藤原公任、源經信、源俊賴、藤原顯輔、同基俊、同俊成、同俊秀に和泉式部、赤染衛門、相模大貳、三位等の十數人あるのみ。こゝには特に古より人口に膾炙せる公任、俊賴、俊成の三人を傳へんとす。

公任の歌は詞姿優婉にして、着想の平凡なる、割合には何となく風韻あり。例へば

九月晦日の日、秋のかげは雨の中につき

いづかたに秋は行くらむ我が宿に

今宵ばかりは雨やどりせよ

嵐の山の下をまかりけるに、紅葉のいた

く散りければ、

あさまだき嵐の山のさむければもみちのにしききぬ人ぞなき

公任は三條太政大臣納忠の長子にて、康和三年に生る。天元三年清涼殿にて元服を行ひ、正四位に叙せられて待從の職に任ぜられ、後大納言に至りぬ。世に四條の納言と呼べり。人と爲り聰明、學和漢を兼れ、諸藝に通じ、和歌と筆跡とに長ぜり。萬壽元年致仕、剃髮し、長久二年七十六才にて薨ぜり。

春日に詣うで給ひけるに、けぶりたつ山里をこれなん駒の里と人の
聞こえければ、

あさまだきあさゐる雲と見えつるはこまのゝ里の烟なりけり
といへるが如し。されば『後拾遺』の中にも公任の歌のみは稍幽玄の趣あつて文字
に表はれたる意味の外に連想の感を誘起せしむるものなり。是はおもふに、彼れ自
ら、よき歌になりぬれば、其の詞姿の外に景氣の添ひたるさまのあるものにや、たとへ
ば春の花のあたりに霞のたなびき、秋の月の前に鹿の聲をほのかにきゝ、垣根の梅に
春風の匂ひを誘ひ、峰の紅葉に時雨の打そゝぎ、村雨の晴れ行く空に時鳥の聲うちし
ほれ、籬の菊の霜枯れたるにはだれに積る雪且つ消ゆるけしきなどするさまなる事
のうかびて添へるなり」といへる如く、常に詠歌するに當りて只管餘韻あらん事を期
したりし鍛錬の功なるべし。然れども、其の風調は只古調を貴び、思想はた『古今』後
撰の範を出でじと勉めたる趣ありて陳套平凡なるを免れず。公任は當代にありて
は一代の宗と仰がれ又仰ぐに足りしと雖も、そはその作歌よりもその家格と官位と
その歌論の人を服せしめしものあるによるめり。『新撰髓腦』『和歌九品』は即ち歌人
の據つて以て金科玉條とせしものなり。

公任の著書は此の外『北山鈔』『和漢朗詠集』『前五十番名所和歌集』『深窓秘鈔』『金玉
集』『前後十五番歌合』『三十六人歌合』等あり。皆後世に傳へて珍重せらる。其の自
詠を集めたる書に『公任卿集』と名づくるものあり。

公任と殆ど時代を同じうして源經信といふものありき、博學多藝にして、就中和歌
を能くし公任と其の名を齊しうせり。其の第三子の俊頼といふものは、た父にもま
して和歌の名匠たりき。其の歌を詠するや、沈思熟考經
營慘憺として、輒く筆を下さず、一首成る毎に反覆朗詠し
て改竄する所あり、意に適するに及びて始めて之を人に
示しぬ。かくて詠する所姿情共に嶄新なれども、そのあ
まりに新奇を求めしからに往々怪奇なるものあるを見る。一代また宗として推重
し、朝廷及び諸家の歌會には必ず其の判者と仰ぎぬ。其の著書に『山木髓腦』『無名鈔』
『俊頼口傳』等あり、共に歌論の書也。家集を『三木棄歌集』といへり。

(チ)俊頼は生死の年月詳な
らず。堀河鳥羽崇徳の三朝
に歴仕し初め右近衛少將
に任ぜられ遂に木工權頭
右京大夫を兼ね、從四位上
に叙せられき。

藤原定家『近代秀歌』の中に俊頼の歌を載せて歌體を評せり、曰はく

山ざくら咲きそめしより久方の雲井に見ゆる瀧のしら絲
おちたぎつ八十うち川の早き瀧に巖こす浪は千代の數かも

これは晴の歌秀歌の本體と申すべきにや

うづら鳴く眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕ぐれ

ふる郷は散るもみぢ葉に埋れて軒のしのぶに秋風ぞ吹く

これは幽玄におもかげかすかにさびしき體なり。

明日も來ん野路の玉河菘こえてゐるある浪に月やどりけり

思ひ草葉末にかゝる白露のたま／＼きては手にもはまらず

これは面白く見ところありて上手のしごと、見ゆ。

うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬものを

とへかしな玉ぐしの葉にみかくれて鶯の草ぐきめぢならずとも

これは心深く詞心にまかせてまねぶともいひつゝけがたく誠に及ぶまじき姿なり

と。されど、定家の評は彼自身の意に適するものゝみを選びたるにて、俊頼の本領を

評したるものとはいふべからず。俊頼の功としては古格の陳套を破つて姿情とも

に新奇なるものを試みたるにあり、いまだ十分なる効果を收むるに至らずと雖も、世

の歌人をして『古今』『後撰』の古調以外に新天地あるを知らしめたるにあり。只惜む、

あまりに新奇を言語の上求めて却て聲調の熟せざるものあるを。

俊頼の子俊惠亦斯道の名匠を以て稱せられき。藤原俊成この父子を評して曰は

く、俊頼の歌は鍛錬精巧にして瑕疵の指摘すべきなし。俊惠の歌亦巧なりと雖も其

の父に及ばざること遠しと。

俊成の歌は詞姿流麗にして韻致に富むもの多し。俊成、居常歌を作るには、古き淨

衣を着けて端座し、桐火桶を擁しながら心を凝らして毫も懈怠の色なかりきとぞ。

嘗て、自己の信する絶巧の作といふものあり。

夕ざれば野邊の秋風身にしみて

うづら鳴くなりふかくさの里

といふ。されども世の普く傳唱して其の妙を稱へしは

おもかげに花の姿をさきだて、

いくへこえ來ぬ峯の白雲

といふ歌これなり。其の風格自然にして雅健、其の旨深く、詞姿圓熟して粗硬の風な

し、恰も古き淨衣を着して端座し、桐火桶を擁して刻思するさまにも似たりけり。故

に世の人かゝる風格の歌を指して桐火桶の體といへりきとぞ。猶ほ二の例を挙げ

ん。

攝政太政大臣家に五十首歌よみ侍りけるに

またや見ん交野の御所の櫻がり花の雪散る春のあけぼの

國文學史 第三編 平安時代の文學 第二章 歌謡 第五節 『古今集』以後の重要な歌人 一五五

俊成は藤原俊忠の第三子なり。仁安三年正月三位となり、承安二年二月皇太皇宮大夫となり、安元二年九月剃髮して釋阿と號す。後鳥羽天皇に寵愛せられ、建仁三年九十の賀を賜はり、御製の歌と鳩杖とを下賜せらる。元久元年九十歳にて逝れり。

暮れはつる夕の空を眺むれば雲こそ秋の名残りなりけれ

要するに俊成は古風の平凡と新體の怪奇とを去つて兩派の長を渾成して稍々成功するものとも見るべし。

其の著すところ『古來風體抄』あり、我が邦古來歌體の變遷を論じたるもの、大要を知るべし。『家集』、『長秋詠草』といへり。

子に成家、定家あり、共に和歌を能くせり、就中定家は一世の名手たり。子孫はた相つぎて一派を構へ、朝に仕へて永く斯壇の牛耳を執りぬ。されども、是等は共に鎌倉時代以後の事なれば、其の機を待ちて論評する折あらん。

第三章 散文

第一節 散文界の概況

祝詞宣命 假名書の文章 物語 日記及び紀行 草子 雜史 翻譯文

此の期の初葉に於ける漢文學の流行は、散文の上にも影響して、祝詞宣命の如きも次第に國文の格を離れて彼の文格を混する事多きに至りしが、其の後漢學の獎勵止み、假名文字の便利承認せらるゝに及びて、假名の文章世に出づる事となりぬ。想ふに、日用の記録などには早くより假名もてする事も行はれたらむと思はるれども、初めて一の體裁を備へて世に公にせられ、今の時にも傳はるは『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』の序及び『土佐日記』等なり。是等は大方清和天皇以後醍醐天皇の朝に出でたるものなれば、恰も歌謠の再興と其の時期を同うするものなり。『古今集』の序の稍、莊嚴華麗なるをおきては、孰れも其の文章簡古にして、前時代の風何處となく残りたらむ趣あり。是より相踵ぎて諸種の物語世に出でしが、今に遺れるものに『空穗物語』『落窪物語』等あり、想像を馳せ、意匠を凝して全く架空の事實を構成し、純ら快樂

を讀者に與へむがために作れる小説なり。從來我國の散文が單に實用の一方に止りしを、今や漸く美術的方面に其の領域を擴張せんとす、當に一大進歩と謂ふべし。此の頃に又『蜻蛉日記』と云ふもの出でたり。消息文もまた當時より漢文の書牘に交りて、假名文にて物すること始りぬ。是は云ふまでもなく、實用一遍のものなるべき筈なりしかど、多くは歌謠の序詞めきたる文にて、文學的趣味を帶ぶること尠からず。蓋し、斯の文の實用よりも寧ろ風流の媒介として用ゐられたるに因るべし。其の後數世を経て、一條天皇の御宇よりは未曾有の發達散文の上に現れ、名流大家蔚然として起りぬ。作者には紫式部、清少納言を始として、和泉式部、大貳三位、讚岐典侍、菅原孝標の女、源隆國、藤原爲業等相紹ぎて輩出し、其の名最も現れき。著書には『源氏物語』の小説なる『枕草子』の隨筆なるは殊更に云はずもあれ、『濱松中納言物語』、『堤中納言物語』、『狹衣』は艶麗優美の筆を以て人情を描くを主とし、『今昔物語』、『多武峯少將物語』、『榮花物語』、『大鏡』、『今鏡』等は事實を直寫したる又面白く見所あり。『紫式部日記』、『和泉式部日記』、『更科日記』、『讚岐典侍日記』等は自己の經歷を録したるものから、文學者の手になりし程ありて、孰れも斯壇に列すべき價值見えたり。其の他、序文に『後拾遺』、『千載』等諸歌集の序、翻譯文に『唐物語』、説明文に『新撰隨筆』、『和歌十體』、『奧義抄』、『悅目抄』

等、最も秀でたり。

かくの如く、平安朝は諸種の散文一時に發達して各其の榮を極めたりしかば、奈良朝を和歌時代と呼ぶに對して、世に散文時代の稱あり。今日單に和文といふべし、殆ど此の朝の散文にかざる特別の名稱なるかの如き觀あるを見ても、如何ばかり平安朝の文學が散文に秀でたりしかを窺ふに足るべし。而して、爰に特筆すべき一事は、此の盛大なりし散文が、或二三の作を除ける外は、すべて宮女の胸底より溢れ出でたる産出物なりし事是なり。是は例の漢文が一時世を風靡したる結果、男子は猶ほ假名文をものすることを恥ぢたりし故にぞあるべき。彼の紀貫之の氣慨あるも、現に『土佐日記』を起草するに當りては、さながら婦女子の手に成りしかの如く假托せし事跡は、明かに以上の如き傾向ありしを證すと謂ふべし。遮莫、又當時女流の文學者を出だし、所以は、當朝の中頃より藤原氏漸く朝廷に權力を得て、皇后を始め、中宮、女御、大かた其の一族より出で、榮花を盡しければ、女子を持てるものは之に宮仕せさせん事を希ひ、皇后及び中宮、女御たちも亦學才あるを抱へて他に誇らんと願ひしかば、仕ふるものは孰れも心を傾けて内外の文學を研鑽したりしにも因ることならん。かゝれば、當代の散文には内外の文學研鑽の結果として、支那文學の影響若しくは佛

教思想の混交少々ならざるを見る。文章は質實豪放殆ど前記の精神を其の儘なるも見ゆれど、概しては歌謠の上にも云へりし如く、繊細巧緻を貴びて、艶麗優美なるもの多かり。是は即ち當代の好尚一般にさる傾向を有し、花朝月夕、只管艶美を競ひければ、其の世態の反映こゝに現れたるなり。是れにつけても、艶麗優美は當代文學の全體を蔽ふべき語なりと謂ふべし。

今此時代の散文を叙するに當りて、其の性質體裁より分類して、小説、歌序、日記及び紀行、草子、雜史の五種に分たむ。

第二節 小説

『竹取物語』『伊勢物語』『空穗』『落窪』等の物語

『源氏物語』其の餘の物語

小説の中に最も古きは『竹取物語』なり、此の書は大同以後延喜以往の著作ならんといひ、或は嵯峨天皇より清和天皇の頃までの間に成りたるものならむとも云へれど、作者は詳ならず。

一篇の筋は、かぐや姫と云ふ一美人竹の中より生れ出で、竹取の翁夫婦に養育せられて、久しく人間の痴情を迷はす種となりしが、此の姫實は月界の天女にして、宿世の定業によりて生を此の人間界に託せしものなりしかば、穢土の交りを欲せずとかくするほどに、八月十五夜に月界より下りし迎の使と共に再び上天すと云ふ傳奇的の物語なり。骨子は勿論怪誕無稽、趣向はまた平板なるを免れず、人物の性格等には勿論毫末の注意だにも及ぼしたる跡なしといへども、皇族大臣などいふやんごとなき朝縉が一女子のために掌中に弄せらるゝあたりは、痴情に驅らるゝものゝ眞情を熹微の間に髣髴せしむるものあるが如し。さはれ、人物の行爲往々愚痴に過ぎて、讀者

の心に一種のをかしみを覚えしむることあり。例へば、石上の中納言（はくろめ）の持てる子安貝を取らむとて、大炊寮の官人くらつ磨を語らひて燕の巢を探ぐる條に、中納言みづから

「我れ上りて探らん」と宣ひて、籠にのりてのぼりて窺ひ給へるに、燕尾をさゝげていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめけるものさはる時に、「吾れ物握りたり今はおろしてよ」翁しえたりとの給ひて、集りて疾くおろさんとして綱をひきすぐして、綱絶ゆる、即ちやしまの鼎の上へのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしろめにて伏し給へり。人々口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていき出で給へるに、また鼎の上より手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて「御心ちいかおぼさる」と問へば、息の下にて、「ものは少し覺ゆれど腰なん動かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來。此の貝顔見んと御頭もたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける古囊（ふるくせ）を握り給へるなりけり。

とあるは、其の一例とも見るべし。世に此の物語を解するもの、或は作者深意のあるありて、滑稽の中に諷刺の意を寓せしなりと云へり。實に心を留めて見るは時自然

に讀者をして痴情に迷ふことの愚にして憐むべきを思はしむる者あるが如し。此の書の結構は大體「寶樓閣經」「普曜記」「太平廣記」「搜神記」等種々の佛經又は漢籍中に散見したる怪譚を翻案綴合して作りたりと云ふ舊説あり。何はともあれ、今より一千年以前に於て、首尾整然たる此の一篇を見る、以て珍とするに足る。

文章は彫琢を加へたる痕跡絶えて見え、押しなべて平淡なり。章句簡樸なる點は何處となく祝詞宣命の俤ありて、おのづから古文の趣具はれり。

『竹取物語』に次ぎて世に出でしは、『伊勢物語』なり。其の作者は伊勢の御なりといひ、或は在原業平なりともいふ。然れども、業平の日記やうのもの、遺りしに、後人の他事をも加へて作爲したるものなるべしと云ふ説、眞に近きが如し。此の書は物語の名はありと雖も、『竹取』などの如く全篇を通徹したる脚色あるにあらず、極めて簡單なる事件を數多集録したるものなり。每章一首若しくは數首の歌を附して、其の文の意を完成せり。其の例次の如し。

昔、東の五條に大后（オホキサ）の宮おはしましける西の對（オウ）に住む人ありけり。それを本意にはあらで、志深かりける人行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに外にかくれにけり。在る所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶

ほ憂しと思ひつゝなんありける。またの年の正月に梅の花盛りなるに、去年のこと思ひ出で、彼の西の對にいきて立ちて見居てみれど、去年に似るべくもあらず。打ち泣きて、あばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて、去年を思ひ出でよめる。

月やあらぬ、春やむかしの春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして。
とよみて、夜のほのくくと明くるに泣くく歸りにけり。

其の文はさながら通常の歌のはしがきに似てや、長きものなり。其の事件は大方業平朝臣の閲歴めきたる書きざまにて、虚實を錯へ前後を序せず、専ら當代の姪靡なる男女の情交を寫し、親子の間にありては殆ど誦讀するだに憚るべき事項をも點綴せり。かゝれば、世人は此の物語を以て誨姪の媒介たる書と見做して、嚴肅なる家庭には手にするだに禁せりといふ。然れども、往昔歌を讀むもの『古今集』と共に此の物語を賞揚して、必讀の書としたりき。これなほ單に其の文辭の妙を愛せしのみにて、其の意を採りしにてはなかりしが如し。藤原定家曰はく、強不可尋、其作者只可玩詞花言葉而已と、古來一般に作者の意向を問ふことなく、純ら章句の流麗なるにのみ眼を注ぎたりしを想見すべし。

げに其の文章は『竹取物語』にもまして簡潔適強、其の詞少うして其の意餘れる、古文中恐らくは此の右に出づるものなかるべし。或は巧に短句を用ゐ、或は助辭を省略して餘情を含めたるなど、筆法極めて古雅なり。若し又、歌に稍、過巧繁擗なるものと理窟めきたる沒趣味のものと多く見えたるは、作者が強ひて事相を面白からしめんと欲して牽強附會したる自然の餘弊なるべく、文に詞足らずと思はるゝは、今人の見なるべし。

『伊勢物語』に次ぎて世に出でたりといひ傳ふるは『住吉物語』と『宇津保物語』となり。二書共に著者と年代とは詳かならず。清少納言が『枕草子』に、『物語は『住吉』『宇津保』の類とあるによりて、古きものなるべしと思はるゝなり。されど、今世に傳はれる『住吉物語』は、其の名を假りて、後人の僞作せしものなるべしといふ。

此の『住吉物語』も其の著者の年代分明ならざれども、いたく近世のものにあらざるべし。物語の筋は、昔中納言にて左衛門督を兼ねたる人の女、繼母に憎まれて幾多の辛酸を嘗めたりしが、遂に住吉の浦なるゆかりの尼の許にさすらひ行き、其の難を避け、果ては大に富み榮えたるに、繼母は之に引きかへて不幸の中に逝りし由を述べたり。其の文章拙ならず、脚色また同時代の他の物語に較べては見るべきものなり。

因果應報の理一貫して、所謂勸善懲惡の主意分明に認識せらる。嵯峨野の子の日の條、繼母がむくつけく女をたしなむるくだりなど、殊に行文自在にして且つ精細、其の狀見るが如し。

『宇津保物語』は『住吉物語』に比すれば、趣向も文章も稍劣りたり。清原俊蔭といふ人、遣唐副使となりて唐に渡らんとして、海上暴風の爲に吹き流されて佛界に至り、琴を習ひて歸りきといふ事より、其の娘の落魄して山中に隠れ、木の空穂を住家として、果敢なき世を送りしが、遂に太政大臣なる人の若君の北の方となりて榮えきと云ふ事柄を叙ぶ。全體の結構に變化の妙なく、至極單純の物語なり。今に傳はれる書には蠹魚の害を被れるところ少からず、又さなきも誤脱錯落ありて解すべからざる節多し。文章は『住吉物語』よりも簡樸にして、『竹取物語』に次ぎて自然の風あり。

此の頃さては稍後の作として、『落窪物語』、『濱松中納言物語』今に傳はれり。『堤中納言物語』も亦此の前後の作として數へらる。是等の物語は何れも其の作者詳かならず。『落窪物語』は昔中納言なりし人の娘數多もてるが中に、異腹の女一人いたく繼母なる人に惡まれて、寢殿の放出の又一間なる落窪なる處の二間あるになん住ませ給ひ、落窪の君と呼ばれて詫びしき月日を送りくらしけるが、藏人の少將なる人に思はれて、遂に其の家を脱れ出で、共に住ひて末遂に榮えたりといふ節を寫せり。措辭簡明にして、筋よく通り、餘情多き書きぶりなり。

『濱松中納言物語』は中納言なる人の唐の國へ渡り、彼の國の皇后をかたらひ、子を設けて我が國に歸りきといふこと、さては其の子の母を慕ひて佛道に入りしことなどを叙べたり。

『堤中納言物語』は同代の他の物語とは多少其の趣異にして、短篇の物語十帖より成り、各篇に題するに風雅なる名目を以てせり。曰はく

- 花ざくら折る少將 このついで
- 蟲めづる姫 君ほどくの懸想
- 逢阪こえぬ權中納言 貝あはせ
- おもえぬかたにとまりする少將 はなだの女御
- はひすけ よしなしごと

是れなり。物語の趣向も諧謔滑稽あるは風流を旨とし、而も其の文章高雅にして趣味深し。但し、今世に存するものは誤脱錯簡多く、文意の通徹しがたきところあり。右の外、尙此の種の作といひ傳ふるものに、『大和物語』あり。全篇の結構體裁すべて

『伊勢物語』に類し、歌話に近きものなり。此の書『八雲御抄』には必ず歌人の見るべきものなりとやうにいひたれど、文も歌も『伊勢物語』に比べては太く見劣りせらる。彼は其の文簡潔遒強なるに、是れは冗漫なるところ、薄弱なるふし往々見えて、彼れよりも粗笨なり。

要するに、此の頃の物語には、文章の外に未だ精細なる攻究を値するものなきが如し。されど、我が國最古の小説はかゝる物語より發達したりと思へば、決して輕々しく看過すべきにあらず。况や、今日まで空前絶後の大傑作と公認せらるる『源氏物語』は、かゝる搖籃中に生長せしものなるをや。

『源氏物語』の著者は誰れぞ。紫式部即ち是れなり。

式部が幼時の教育は如何なりしか知られねども、父爲時は菅原文時が高足の弟子にして、漢學に精通し兼て歌にも秀で、兄惟規、伯父太皇太后宮亮爲頼等はた歌を以て名ありしものなれば、おのづから其の誘掖感化を蒙りしこと蓋し尠少ならざりしならむ。資性穎敏にして強記、好みて學を嗜みぬ。年長するに及びては博覽衆に超え、我が邦の物語、日記、歌集の類は云ふに及ば

(ウ)紫式部は閑院冬嗣の第六子、贈太政大臣良門五世の裔孫、越中守藤原爲時第四子にして藤原宣孝の室たり。母を常陸介爲信の女堅子と云へり。紫式部とは其の本名にあらず、所謂呼名といへるものなり。生誕終焉の年月詳ならず、但し後一條天皇の長元四年の頃逝りたるならんかといふ

ず、三史五經佛書の玄理さては香合、繪合、歌合、彈琴、裁縫の諸藝に至るまで、一として通曉せざるはなかりきとぞ。されば彼れが後年の傑作は天稟の詞才に依るは勿論なりと雖も、這般の博覽又幾多の詩材を供せしや疑なからむ。况や、式部は單に典籍に依りて居ながら其の識を養ふを務めたるのみならず、女子としては驚くまでに名勝古跡を歴訪して、其の詩囊を豊富にするを力めたるをや。

式部はかく學殖豊かにして、才藻衆に勝れたりしのみならず、當世の士女が姪蕩靡浮なるには似ず、謹慎以て身を奉じ、謙遜以て人に接するを常としたりき。されども、式部は決して因循姑息妄りに世に媚び人に阿るが如きものにあらず、能く中庸の徳を守りて節を完うせんことを欲ひき。

かゝれば、式部は夫宣孝に事へても貞淑能く婦道を盡したりしや知るべきのみ、長保三年四月重孝逝きての後、其の女と共に寡居して専ら風月の樂みに哀悼悲愁の情を紛らしぬ。其の後、寛弘二三年の頃より一條院の中宮上東門院彰子に仕へて、侍講など折々務めたるよし、其の日記に見ゆ。式部に二女あり、長は賢子、大貳、三位とて世に『狭衣物語』の作者とせられるもの、次を辨の局といへり。

式部が其の大作たる『源氏物語』を著はし、は何時の頃にてかありけむ、是れに就き

ても種々の臆説傳はりたり。輓近の學者の推定には、長保の末寛弘のはじめ式部寡居して私第に在りけるころの徒然に作爲せるものならむと云へり。

一部の趣向は、帝王三代の間に亘りて、源氏の君一生の出來事を叙べたるものにて全篇すべて五十四帖より成れり。

桐つぼ	はつき木	空蟬	夕がほ	わか紫
未摘花	紅葉の賀	花の宴	葵	榊
花散里	須磨	明石	落標	逢生
關屋	繪合	松風	薄雲	朝顔
少女	玉かづら	はつ音	胡蝶	螢
とこ夏	篝火	野分	御幸	藤袴
横柱	梅が枝	藤の裏葉	若菜上、下	柏木
横笛	鈴虫	夕霧	御法	幻
雲隠	勾宮	紅梅	竹川	橋姫
椎の本	總角	早わらび	やどりき	あづま屋
浮舟	かげらふ	手習	夢の浮橋	

即ち是れなり。此の中「雲隠」の卷は名のみにて文なし、今別に「雲隠」の卷と稱するものあれど全く後人の假作にすぎず。「山路の露」とて「夢の浮橋」の卷の末にあるも、また同じ。

かく此の物語は全篇五十四帖を以て成れり、雖も大體より云ふときは、其の結構二段に分かるべし。即ち前なる四拾四帖は専ら光源氏の君と紫の上とを男女の主人公として、之に許多の人物と事件とを配合鹽梅し、後なる拾帖は源氏の子薫大將及び匂の宮を以て男主人公とし、之に大姫君中の君、浮舟の三女を配し、また許多の人物事件を錯出して叙事の變化を務めたり。故に古來此の後なる十帖をば別に「宇治十帖」ともいへり。

式部が此の物語を著作したる主意に就きては、古より種々の説ありて、或は是れを以て勸善懲惡の趣旨を明かにせんとするにありきといひ、或はこれを假りて好色の禁戒を諷刺せんとするにありきといひ、甚しきは是れによりて儒佛の立理を談するがためなりとも云へり。要はおしなべて小説若しくは詩歌の類が其の直接の目的とする讀者の快感を促すことをば第二にして、或種の理窟を寓するにありきと解するものゝ如し。然れども、是れみな此の物語の中にたま〜漢學若しくは佛教の思

想又は當代の風俗習慣等の痕跡の多少見ゆるによりて揣摩したる附會の説たるを免れじ。おもふに、式部が此の物語を著作するに當りては、別に前述の如き判然たる寓意ありてにあらす、當代に流行せし他の物語と等しく、單に消閑の具にとて物したるに過ぎざりしなるべし。即ち、彼れが『源氏物語』を著作せしは、勸善懲惡のためにもあらず、好色を禁戒せんの意にもあらず、又儒佛の道理を談せんがためにもあらず、只々他の消閑の一具たらしめんと欲せしなり。故を以て、若し讀者の心中に反省若しくは悔悟の念など起すとあらば、其は著者なる式部にとりては、洵に豫想外の結果たらんのみ。かくて、式部は此の物語に於て、本居宣長が所謂物のあはれを寫すことを力め、其の物のあはれを寫すに主として戀愛の事件を採りぬ。蓋し、戀愛てふ事は、其時代の浮靡姪蕩なる讀者にとりては、無上の趣味を感せしならん。彼の戀ふべからざるを戀ひてかなはぬ戀に、浮身を寢し、彼の思ふべからざるを思ひてはかなき思に心を痛むるは、當代の人士が見て以てあはれと覺えし事ならん。式部は能く是等の消息を知りしが故に、當代の人士が命と頼みたる戀愛の事件を以て物語の主眼とし、當代の人士にあり得べき、又は想像し得べき事件を點綴して、あはれを感せしむべく、一部の趣向を作りたるなり。

か、い、れ、ば、『源氏物語』は大體の上より見れば、理想的なる傾を有せり。されども、彼の馬琴の『八犬傳』に見えたる八犬士が悉く抽象的觀念に著衣せしめたる如きとは全く異なりて、孰れも世間的の人物たらざるはなし。故に、馬琴のは其の人物おほむぬ道義の化身なるからに、完全無缺の性情特質を有して、秋毫の批難すべき點なしと雖も、式部のは淑徳の中にも猶ほ醜惡伏して、醜惡の裡にも猶ほ淑徳の存するものあり、源氏の君の諸種の美性を兼ねたる中にも、まゝ、好色の僻ある、または未摘花の君のよろづぶつゝ、かなる中にも、氣高くして、禮儀を失はざるなど、其の一例とすべし。予輩は『八犬傳』を繙きては、往々其の八犬士の不自然なる行動に吃驚することありといへども、此の物語を讀みては、只其の卷中の人物の自然にして、まのあたり世上の人に接する心地するのみ。此の物語の興味津々として盡くるを覺えざる所以は、畢竟此に存するなり。

これ、まことに式部が靈筆の赴くところ、おのづから詩人の呼吸を得て、人物の行動事件の變替景色の配合共に其の宜しきにかなひ、前後照應齊一して自然の活動をなし、露ばかりも斧鑿の痕跡を止めざるに因るべし。

前なる四十四帖の中に見えたる人物は、其の性情特質率ね中庸を得て善惡共に極

端なる者なく、稀に多少の缺點を具へたるものありと雖も、未だ非常の災禍苦悶を作
 るまでに甚しからず。源氏の君の藤壺の女を犯せる如き、もとわりなき戀情に出づ
 と雖も、相互の思慮分別により、悲慘の結果をなさざるのみならず、却つて源氏の君の
 繁榮の靦染たる趣あり、弘徽殿の嫉妬は桐壺の更衣を微縮せしむる餘り病死に到ら
 しめ、終には源氏の君をさへ須磨の浦曲の配所の月に世のうたてさを感じしめしこ
 とありといへども、是れはた後に明石の上を得しむる伏線たるに似たり。かるが故
 に、四十四帖を見渡せば、時に隆替あり、事に起伏あり、人物はた盛衰浮沈なきにあらず
 と雖も、打ちまかせて云へば諸の美性才能を兼備したる王孫公子が、壯麗なる平安城
 裡歌舞管絃の聲洋洋たるうちに華奢風流を盡くして、遊惰放逸たゞ癡狂を事とし、而
 も大なる罪過の以て非常の波瀾を生せしむべきものなし。尙詳言すれば、此の四十
 四帖に於いては、わりなき戀かなわぬ戀逢ひがたき戀又は見ざる戀に懊惱苦悶する
 ことありと雖も、或は社會の制裁道義の衝突により大破裂を起すべき性情の素更に
 見えざるなり。故に、是等の卷は紫の上の死を以て大局を結び、幻の卷に於ける愁歎
 より引きつゞきて源氏の君の薨去をほめかしたりといへども、孰れも其の天壽を
 全うしたるものにて、其の一生には大なる危難も、非常なる憂苦も、亦激裂たる懊惱も

あることなく、思ふがまゝに其の希望を満足し、爲すがまゝに其の望をかなへ、幸多き
 運命の徑路を過ぎ行けるもののみ。

然るに、後なる宇治十帖は、いたく是れと趣かはりて、其の主人公の運命稍悲壯劇の
 素を有す。おもふに、式部は前なる四十四帖の卷々に於いて、光源氏一流の圓滿幸福
 の人物を描き終へたれば、此の十帖にては其の反對の不完全なる状態を寫さんの意
 にてもありしものか。彼れの主人公は諸の美性を兼備したる圓滿なる人物なりし
 に、是れのは稍、偏僻なる性情を具ふ。薫の大將のしめやかにして物のあはれ深き、匂
 の宮のあだくしくして好色のくせある、恰も物のあはれ深く人の情も且つ思ひ知り
 ながら、まゝすきくしくあだなる源氏の君の性情を折半したる觀ある是れなり。
 大姫君、中君、浮舟の君の如きも、彼の紫の上とは大に異なりて、其の性情に幾多の缺點
 あり。こゝをもて、此の十帖の物語はおのづから彼の圓滿なる美性を兼備せる人物
 を主人公とせる四十四帖の主人公とは異ならざるを得ざるなり。宇治十帖には懊
 惱あり、苦悶あり、憂愁悲歎はた充滿す。二者を喩ふれば、彌生の空のうららかなるも
 のから花散らす嵐はあれど、まづ樂しきは前なる四十四帖なり、冬枯の野邊の稀に小
 春日和はなきにあらねど、見渡したるところ荒涼たるは此の宇治十帖のさまなり。

○かく『源氏物語』は前後其の趣を異にすれども、其の人物の性情云爲事件の變替景色の配合等は、共によく統一を保ちて自然の趣致あること、彼此相同じ。

古來世の評釋家或は此物語をさして誨淫の書となし、或は諷諭の文となすものは、戀より起る動作を基礎として物語の趣向を設け、まゝ云ふに忍びざる事件をも包含するところ、尙ほ能く自然の實情に符合して、讀者の解釋に従ひて其のさまを別にするに因らざるなきか。若し、此の推定にして誤ることなくば、これたまゝ、此の物語の現する天地の大にして美妙なるを證明するものと謂ふべし。

○其の文章は周到精密にして流暢能く其の想の巧妙なるに應じて、毫も遺憾の點なきは殊更に云ふを要せず。げに情を寫し、景を叙し、事を論ずるに、一として其の法を具へ、其の妙を究めざるはなし。就中優美溫柔の情操若しくは光景を描ける章は、ひとへに議論を旨としたる文章よりも一層妙趣多きを覺ゆ。是れおもふに優美なるは和文の長所にして、溫柔なるはた式部の特質たりしに因るものならむ。山水風月の景も、細叙せる趣の時としては花やかに、時としては物さびしく、又哀別離苦の情緒を描寫せる章句の、或は句ごとに涙あるを覺えしめ、或は章毎に嗚咽の聲を感せしむるなど、最も作者の技倆の顯著なる所なるべし。

野分だちて、俄に肌寒き夕暮の程御門ニ常よりもおぼし出づること多くて、靴負の命婦といふを桐壺ノ更衣ノ許ニつかはす。夕づく夜のをかしき程に、いだし立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御あそびなどさせ給ひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひかたちの、おもかげにつと添ひておほさるゝも、やみの現にはなほ劣りけり。命婦かしこ更衣にまかでつきて、其ノ門ひき入るゝより氣色あはれなり。更衣ノやもめすみなれど、人ひとりの一人ノ更衣御かしづきに、家ノ内とかく繕ひたてゝめやすき程に、すぐし給ひつるを、更衣ノ逝去チやみにくれて臥ししづみ給へる程に、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらすさし入りたる。命婦南おもてにおろして、母君ニ對面母君もとみにえものも宣はず。チヤウホケルハ「今まで生とまり侍るがいと憂きを、かゝる御使の蓬生の露別け入り給ふにつけても、恥かしうなん」とて、げにえ堪ふまじく泣い給ふ。命婦ノ「まゐりてはいとど心苦しう、心ぎもゞ盡くるやうになむと、先ニ給ヒシ典侍の御門奏し給ひしを、我物おもひ給へ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたう侍りけれ」とて、やゝためらひておほせごと傳へきこゆ。し

ばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべきかたなく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合はすべき人だになきを、忍びてはまゐり給ひなんや。若宮のいと覺束なく、露けきなかに過ぐし給ふも、心苦しう覺さるゝを、疾くまゐり給へなど、はかしくしうものたまはせやらすむせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心よわく見奉るらむと、おぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心苦しさに、うけたまはりも果てぬやうにてなん、まかで侍りぬるとて、御文たてまつる。更衣ノ母目も見え侍らぬに、かくかしこきおほせごとを光にてなんとて、見給ふ。勅程經ば少し紛るゝこともやと、待ち過ぐす月日にそへて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。いわけなき人もいかにと思ひやりつゝ、諸共にはぐくまぬおぼつかなさ、今は猶は昔の形見になすらへて物し給へなど、細かに書かせ給へり。帝ノ歌

「宮城野の露吹きむすぶ風の音に、小萩がもとを思ひこそやれ。」

とあれど、え見給ひはてす。更衣ノ母命長さのいとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の思はんことだに恥かしう思ひ給へれば、百敷に往きかひ侍らんことは、ましていとばかり多くなん。かしこきおほせごとをたび／＼承りながら、みづか

らはえなん思ひ給へたつまじき。若宮はいかにおもほし知るにか、まゐり給はんことをのみおぼしいそぐめれば、ことわりに悲しう見奉り侍るなど、内々に思ひ給ふるさまを奏し給へ。忌々しき身に侍れば、斯くておはしますもいまくしうかたじけなくなどの給ふ。命婦又申宮は大殿ごもりにけり。見奉りて、委しく御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらんを、夜更け侍りぬべしとて急ぐ。

此の『源氏物語』の外、紫式部に猶ほ一の著書あり、『紫式部日記』といふ。また『紫式部家集』といふは、其の詠じおける和歌を集めたるなり。

紫式部が世を去りて後は、小説の創作俄に頓挫して落日の觀あり。世に聞えしは勿論、さらぬだにも殆どなく、只『狭衣物語』とりかへばや物語等の僅に餘光を保ちしのみ。否、是等とても、大作『源氏物語』を見來たりし眼には、とかくの批判を下すべき程の價値を認むること能はず。

『狭衣物語』は紫式部の子大貳三位の作なりといはるれど、定かならず。其の著作せしは『源氏物語』の以後およそ四十年ばかりなるべし。一部八卷、狭衣の大將といふを男主人公に、源氏の君を女主人公に立て、結構せり。趣向は大體『源氏物語』に酷似せ

り。而も此の物語を以て彼の物語に比すれば、趣向は勿論、文章はた雲泥の相違あり、只、散見せる歌ばかりぞ、或は辛うじて彼の物語のにも比べつべし。されども若しこれを『源氏物語』以前の諸作に比すれば、些少の傑れたる點なきにあらず。

『とりかへばや』の物語は作者も年代も共に詳かならず、後半は鎌倉時代の作なるが如し。權大納言にて大將を兼ねたまへる人に、北の方二人おはしけるが、その生み給へるに男女二人の子あり。容貌態度共に美しけれど、男女其の性質を異にし、男は女の如く物はづかしげに振舞ひ、女は男の如く雄々しくほこりかにおはせしかば、父君とりかへばやとの給ひて、男君を姫君に、姫君を男君にしなし給ひけり。この二人の子のちに仕官して、實の姫君は權中納言となり、實の男君は宣耀殿の女御となり給ひけり。此の二人は即ち此の物語の主人公にて、書名もやがて父君のとりかへばやとの給ひしに出づ。作者は力めて物あはれげに書きなしたれど、大體の結構既に滑稽の風を帯びたれば、讀み行くも情のうつらぬ心地す。文章悪しきにあらねども、勿論優れたるにもあらず、平凡なり。

此の物語より後には小説といふべきものゝ創作全く其の跡を斷ちて、今日には一も傳はるものなし。たま／＼物語の名を冒す作ありと雖も、其は歴史的作物にて、想像を主としたるものにあらず。

此の期の末と覺しき頃に『唐物語』と題する翻譯の物語出でたり。譯者も年代も詳かならず。こは支那の話說のくさ／＼を集めて國文に翻譯せし書にて、全編を一貫する趣向やうのものなし。されども、其話は多く男女の愛情に關る事柄を旨とす。いづれも短編なるからに、取りわきて多趣味なるものを見ず。文章は全く和文の脈にて、いさゝかだにも漢文の臭味なし。其の說話と翻譯の文體を示せば次の如し。

かゝる程に、此の世に楊貴妃、いかならん巖の中なりとも、覺束なからぬ御住居ならば、いと心苦しからず思しけるに、思の外に命絶えぬべきにやと淺からぬ別の涙、血しほの紅よりも猶ほ色深くて、詮方なく見え給ひながら、なほなほ帝に目をかけ奉り給ひて、かくれさせ給ふまで顧み給へる御有様、何に譬ふべしとも見えす。撫子の露にぬれたるよりもらうたく、青柳の風に隨へるよりもなよらかに、太液の芙蓉未央の柳に通ひ給へるをしも、情なく道の邊の寺の中にして、練衣を御頸に引きまとひつゝ、遂にはかなくなし奉りつ。物の哀を知らぬ草木までも色かはり、情なき鳥獸さへ涙を流せり。

ものごとにかはらぬ色ぞなかりける、緑の空も四方のけしきも。

御供にさぶらふ人、心あるも心なきも、猛きもたけからぬも、皆涙におぼれて行くかたも知らず。又帝の御心のうちには、

何せんに玉のうてなを磨きけん、野邊こそつひのやどりなりけれ。

唯、御袖の下より、紅の涙ぞ流れける。御心惑ひにや、馬の上も危く見えさせ給へば、人々表裏ウラウラに添ひ奉りて、やう／＼行かせ給ふに、兵士ども糧盡き力瘦れて、帝に随ひ奉らんこと二心なきにあらねば、陳玄禮も留むべき心地せず。かゝる程に、益州といふ國より貢物數しらす運べりけるを、御前に積み置せて、侍ふ人々に分かち賜はせての給はく、我が政事マツリゴトの清み濁れるを知らざりしより、今日此の亂ミダレにあへり。我が身一つによりて、去りがたき親兄弟にも別れ、二なき命を捨て、なほ我に随へり。われ又石木ならねば憐む心深し。早くこの物を賜うて、各、故郷へ歸りねと宣はする御袖の上、秋の草葉よりも露けく見ゆ。

第三節 歌序

歌集の序 歌の小序『古今集』並に、大堰川行幸和歌の序

其等の文體『古今集』以後の諸歌集の序

歌序は歌集の撰ばれたる由來又は歌の詠まれたる所以を説明するものなり。故に、歌序におのづから二種の別あり、歌集の序と通常に歌の「はしがき」と唱ふる小序とは是れなり。是等のもの『萬葉集』の時代には純ら漢文にて物せしが、此の朝に至り、『古今集』の序文より始めて國文にて述ぶることとなりぬ。されば、國文の歌序は醍醐天皇の御代延喜の頃より出で來たりしなり。

歌序の中に最も世上に名高きを『古今集』の序と、大堰川行幸和歌序とす。『古今集』の序はいふまでもなく、集の序にて、大堰川行幸歌序は歌の小序なり。是等は共に紀貫之の作に係り、等しく假名もて國文の體に連ねたれども、其の文脈を吟味する時は、彼の『竹取』『伊勢』

（カ）野々口隆正の説に、大堰川行幸和歌序といふ者『古今集』の序よりも猶ほ先に出でたるが、『古今集』の序にある延喜五年四月十八日は此の集撰めと勅し給へる時なれば、實際に撰びあげて奉りしは延喜の末なるべきに、此の序は醍醐天皇延喜七年九月大堰川に行幸ありし日群臣によましめ給へる歌の序なれば

等の純粹に國文體なるとは異なりて、多少漢文の調あり。殊に、又當時に行はれたる『文選』などの文體に倣へりと覺しく、四六駢驪にして、莊重なる中にも華麗なる

といひき。此の説の可否容易く断すべからずと雖も、それにも國文の歌序の延喜の頃に始まりしを知るべし。

を力め、稍繁褥に失する嫌あり。二編共に散文なるものから、縁語・疊語・對句を並べ、冠辭をも用ひたり。然れども、是が爲に語調整一し、文勢に緩急昂低あり、恰も音律を具ふるが如き觀なきにあらず。大堰川行幸和歌序を掲げて其の一斑を示さん。

あはれ、我が君の御代長月の九日ときのふいひて残れる菊を惜み給ひ、又暮れぬべき秋を惜み給はんとて、月の桂のこなた、春の梅津より御船よそひて、渡守を召して、夕月夜をぐらの山のほとり、行く水の大堰の川邊に行幸し給へれば、久方の空にはたなびける雲もなくみゆきをまち、流るゝ水底には濁れる塵なくて、御心にぞ協へると詔して仰せ給へるとは、秋の水に浮びては流るゝ木の葉と過たれ、秋の山を見れば識る人なき錦とおもほえ、紅葉のはの嵐に散りて曇らぬ雨ときこえ、菊の花の岸に残れる空なる星と驚き、霜の鶴河邊に立ちて雲のおかるゝかと疑はれ、夕の猿山のかひになきて人の涙をおとし、旅の雁雲路にまどひて玉章と見え、遊ぶ鳧水に栖みて人に馴れたり。入江の松幾世經ぬらんといふ事をぞ

詠ませ給ふ。我が筆短き心のこのもかのもにまどひつたなき言の葉吹く風にみだれつゝ、草の葉の露と共にうれしき涙おち、岩根と共に悦ばしき心ぞ立ちかへる。もし此の言の葉世の末まで残り、今を昔にくらべて後の今日を聞かん人海人の栲繩くりかへし忍ぶの草の忍ばざらめや。

此の外、庚申夜奉和歌序は源順の作にして、『古今集』の序につぎて優れたりとの評あり。平兼盛の子、日行幸和歌序、善滋爲政の「高陽院行幸之時應制奉和歌序」又は藤原通俊の『後拾遺集』の序など、亦見るべきものあり。されども、歌序の目的とする所は前に云ひし如く、歌集の撰せられたる由來又は歌の詠まれたる所以を説明するに止まるものなれば、其の内容にさしたる玄義妙想のあることなく、其の外形にも亦異なる奇趣變體あるにあらず。『後拾遺』以後のに至りては、所謂様に依りて、胡盧を描ける類のみ、思想も文體もおしなべて前者の模倣に過ぎざるなり。『千載集』の序の如き、藤原俊成の筆に成りしものから、『古今』の序の莊重なる趣もなく、大堰川行幸和歌序の艶なる姿もなく、全篇たゞ、無味枯淡の文字を古文の典型によりて寫したるのみ。

第四節 日記及び紀行

日記と紀行と 『土佐日記』 『蜻蛉日記』 『和泉式部日記』

『紫式部日記』 『更科日記』 『讃岐典侍日記』

日記と稱するものにも亦二種あり、日々の行事を記録せるものと旅行中に見聞若しくは遭遇したる事柄を寫したるもの即ち紀行と是れなり。故に、是等の書中の記事は、多少作者の僻見誤聞は交れることあるにもせよ、大方は實事と見るを得べし。然れども、其の文章は通常の歴史の如く專一に實用を期せしものにあらざれば、かれの謹嚴なる風なく、又物語の如く純ら娛樂に供せしにもあらざれば、かれの艶麗なる態もなし、而も天真爛漫たる筆さすがに妙趣鮮しとせず。日記に屬するものに『蜻蛉日記』 『和泉式部日記』 『紫式部日記』 『讃岐典侍日記』あり。紀行に屬するものに『土佐日記』 『更科日記』あり。

『土佐日記』は紀貫之が延長八年土佐守となりて赴任し、五年の後承平四年に任滿ちて歸京せし時の船路の紀行なり。全編亡兒をおもへる悲を罩めつゝ、時としては海賊の難を風波の中に思ひ、時としては滑稽の筆を徒然に弄するなど、五十餘日の記事を以て成れり。文章は『古今集』の序、大堰川行幸和歌、序の如く莊重若しくは艶麗の體なく、瀟洒にして輕快剩へ往々諧謔の辭さへ加はりて興味多し。例へば、

廿二日、和泉の國までたひらかにとねがひつ。藤原の言實船路なれど馬のはなむけす。上中下酔ひすぎて、いと怪しく潮海の邊にてあされあへり。

といひ、又

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、こゝにして俄に失せにしかば、此の頃の出立ちいそぎを見れど、何事もえいはず。京へ歸るに、女子のなきのみぞ悲み戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間にある人の書きて出せる歌、

都へとおもふもものゝかなしきは、歸らぬ人のあればなりけり。

又ある時には、

あるものと忘れつゝなほなき人を、いづらと問ふぞ悲しかりける。

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に、守の兄弟又他人これかれ酒など持て追ひきて、磯におり居て別れ難きをいふ。守の館の人々の中に、此の來る人々ぞ心あるやうにはいはれほのめく。かく別れ難くいひて、かの人々の口網も諸持にて

此海邊にて荷ひいだせる歌。

をしと思ふ人やとまると葦鴨のうちむれてこそわれはきにけれ。といへる筆に隨うて言湧き意に隨ひて句を成すところ、諧謔はたわざとならずしておもしろし。殊に、諧謔の中又折りにふれて悲哀の情をかすめ行くなど、微妙なる筆致なり。これを當時作られたる紀行文の最上なるものとす。後世紀行を草するもの、大むね模範とす。此の後、大凡百餘年『更科日記』の書かれし頃まで、世に紀行といふべきもの更になし。

『蜻蛉日記』は藤原道綱の母の記せるものなり。此の書は天曆八年に作者が藤原兼家と相識りし頃より筆を起して道綱出生の前後さては其の殿上元服の事などを記し、終に天延二年道綱二十歳に至るまでの事を書けり。此の中、天徳三年より應和元年に至る三年間の記事闕けたれど、概しては村上冷泉・圓融三帝の御代をかねて、二十一年の間に亘れり。體裁は『土佐日記』の日次の事件を記載せるとは異りて、六月になりぬ。朔かけて長雨いたうす。見出だして獨言に、

我が宿のなげきの下は色深く、うつろひにけりながめふるまに。

などいふほどに、七月になりぬ。絶えぬと見ましかば、かりに來るには勝りましなど、思ひつゝくるをりに、物したる日あり。物もいはねば、さう／＼しげなり。

前なる人ありし下葉の事を物の序にいひ出づれば、聞きてかくいふ。

をりならで色つきにける紅葉は、時にあひてぞ色まさりける。

とぞ書きつくる。かくあり續き絶えずば來たれども、心のとくる夜なきに、荒れ

まさりつゝ來ては氣色悪しければ、一向に立山タテヤマと立ち歸る時もあり。

などの如く、單に年月の重要な事件若くしは所感を録するのみ。文章は此處に掲げたる如く、平易にして而も亦著き妙所なし。歌には優れたるも多し、殊に長歌の所々に見えたるは爾餘の日記に異なる所、自ら一種の體裁を具ふるものなり。

『和泉式部日記』は和泉式部の書けるものにて、又『和泉式部物語』ともいふ。冷泉院の第三の皇子爲尊親王薨御の翌年、長保五年四月の頃より其の弟宮の敦道親王が式部の許に通ひ給ひし事の始末を書きたり。歌もよく、文章も輕妙なれど、次に擧ぐる『紫式部日記』の精到にして流麗なるには到底及ぶべしとは

和泉式部は紫式部と同時代の人にて、越前守大江雅致の女なり、和泉守橘道貞の妻となりしとあるを以て和泉式部の名あり。夫道貞死にての後、上東門院彰子中宮に任へけるが、後に藤原保昌の妻となり、小式部内侍を生みぬ。式部天性和歌に巧にして、兼ねて